

平成 22 年度

福岡県農業総合試験場年報

平成 23 年 9 月

福岡県農業総合試験場

目 次

I 総 説	
1 沿 革	1
2 組織及び事務の概要	2
3 所 在 地	3
4 職 員	4
(1) 現 員 表	4
(2) 職 員 名 簿	5
(3) 職 員 の 異 動	9
5 施設・ほ場の面積及び飼育家畜数	11
(1) 施設・ほ場の面積	11
(2) 飼 養 家 畜 数	12
6 主要工事及び重要物品	13
(1) 主 要 工 事	13
(2) 重 要 物 品	13
7 歳人・歳出決算	14
(1) 歳 入 決 算	14
(2) 歳 出 決 算	14
8 参 観 者	18
II 試験研究の概要	
1 平成22年度試験研究課題数	19
2 平成21年度試験研究の成果数	19
3 平成22年度試験研究の概要	20
—— 食 品 流 通 部 ——	20
—— バイオテクノロジー部 ——	21
—— 土 壌・環 境 部 ——	22
—— 病 害 虫 部 ——	25
—— 農 産 部 ——	30
—— 野 菜 育 種 部 ——	37
—— 野 菜 栽 培 部 ——	38
—— 花 き 部 ——	41
—— 果 樹 部 ——	42
—— 家 畜 部 ——	45
—— 畜 産 環 境 部 ——	48
—— 豊 前 分 場 ——	51
—— 筑 後 分 場 ——	53
—— 八 女 分 場 ——	56
—— 果 樹 苗 木 分 場 ——	58
III 試験研究以外の業務概要	
1 作物の原原種の採種	61
2 作物の原種の採種	61
3 種 苗 等 の 配 布	62
4 飼 料 検 査	64
5 家 畜 衛 生	65
6 依 頼 分 析	67

IV	研究成果の公表及び指導	
1	刊 行 物	68
	(1) 研 究 報 告	68
	(2) 成 績 書	70
	(3) 農業関係の試験研究成果	70
	(4) 技術指導資料	71
	(5) そ の 他	71
2	研究成果の公表	72
	(1) 学会等研究発表	72
	(2) 業 績 発 表	77
	(3) 学会誌等投稿	80
	(4) 雑 誌 等 投 稿	83
	(5) 著 書	86
	(6) テレビ、ラジオ放送	86
	(7) 新 聞 掲 載	88
3	指導・啓発活動	91
	(1) 研 修 会 等	91
	(2) 農業大学校講義	120
	(3) 農業総合試験場における指導普及業務（まとめ）	121
V	研 修	
1	研修生及び実習生の受入れ	122
	(1) 普及指導員留学派遣研修の受入れ	122
	(2) 実習生の受入れ	122
	(3) 海外技術研修生の受入れ	122
	(4) 一般研修生の受入れ	122
2	研究職員の派遣研修	123
	(1) 依頼研究員研修	123
	(2) 短 期 研 修	123
	(3) 大学院博士後期課程社会人枠入学者	123
VI	表彰及び海外出張	
1	職 員 の 表 彰 等	124
2	海 外 出 張 等	124
	[附属資料]	
1	作 柄 経 過 概 要	125
2	気 象 表	130

I 総 説

I 総 説

1 沿 革

福岡県の農業に関する試験研究は、明治12年7月、それまで県下2ヶ所にあった植物園（有用植物見本園）を廃止し、当時の那珂郡春吉村（現在の福岡市博多区東中洲）に全国に先がけて勸業試験場が設立されたときに始まる。

その後、農産、畜産、園芸など部門ごとの分離独立が行われるなど幾多の変遷を経、昭和56年に、試験研究の総合的機能の発揮を図るため、それまで県下4ヶ所に設置されていた農業関係の試験研究機関が統合され農業総合試験場として発足した。

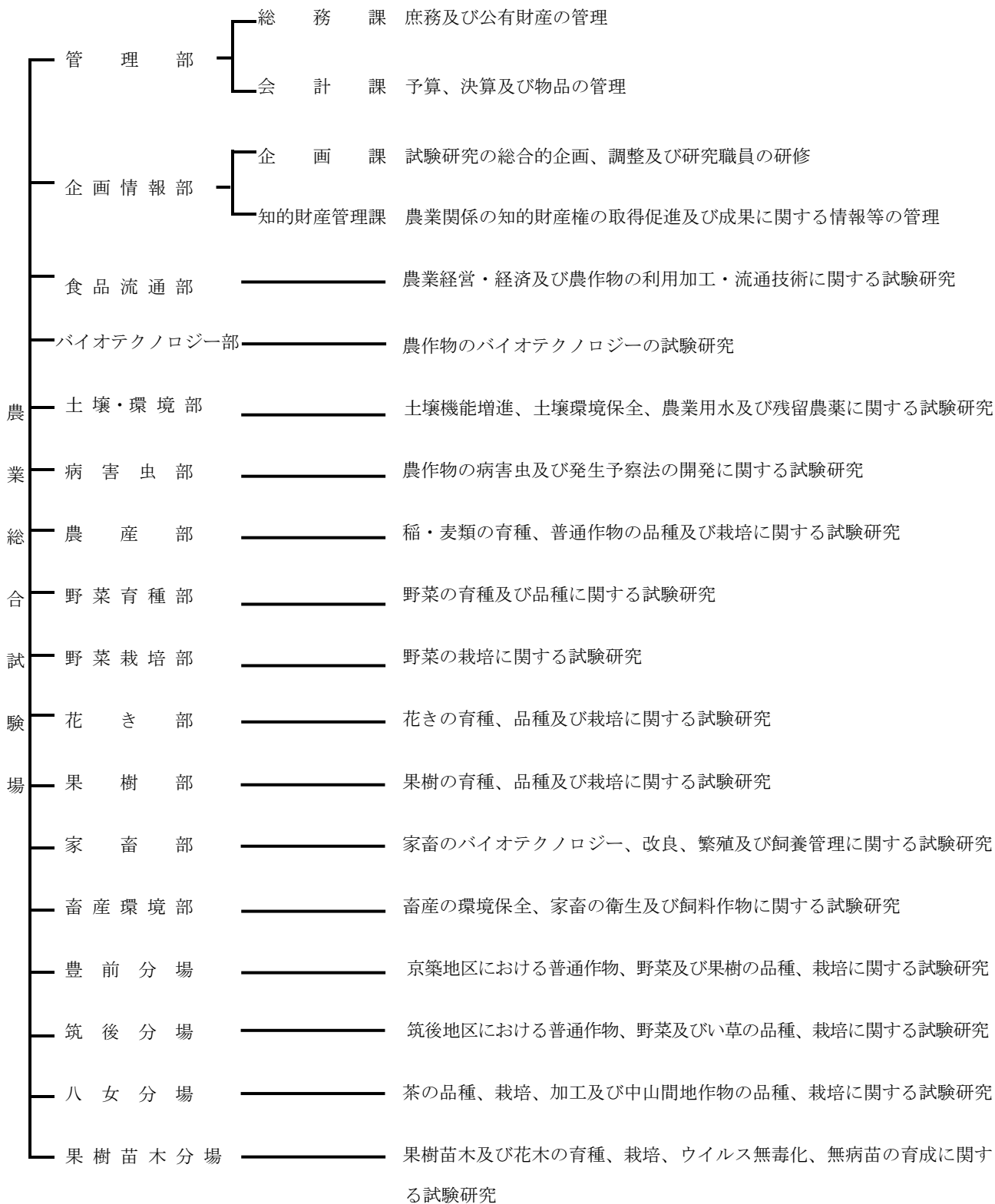
明治12年	那珂郡春吉村（福岡市博多区東中洲）に福岡県勸業試験場として設立
明治28年	福岡県立農事試験場に改称
明治39年	筑紫郡住吉村（福岡市博多区住吉）に移転
明治40年	八女郡黒木町（八女市）に福岡県立農事試験場紅茶試験所を設置
大正3年	福岡県立農事試験場紅茶試験所を廃止
大正12年	京都郡泉村（行橋市）に福岡県立農事試験場豊前園芸分場（現豊前分場）を設置
大正15年	八女郡岡山村（八女市）福岡県立農事試験場茶業試験部を設置
昭和2年	八女郡羽犬塚町（筑後市）に福岡県立農事試験場筑後分場を設置、茶業試験部を合併
”	福岡県立農事試験場豊前園芸分場を福岡県立農事試験場豊前分場に改称
昭和3年	福岡県立農事試験場内に福岡県種鶏場（現家畜部）を設置
”	浮羽郡水縄村（久留米市）に福岡県立果樹母木園を設置
昭和4年	筑紫郡太宰府町（太宰府市）に福岡県種鶏場移転
昭和12年	三井郡三国村（小郡市）に福岡県種畜場（現家畜部及び畜産環境部）を設置
”	三潞郡大木町に福岡県園芸指導所を設置
昭和14年	筑紫郡二日市町（筑紫野市上古賀）に福岡県立農事試験場を移転
昭和21年	福岡県園芸指導所を福岡県立農事試験場三潞試験地に改称
昭和23年	福岡県立農業試験場三潞試験地を再び福岡県園芸指導所に改称
昭和24年	福岡県立農事試験場を福岡県立農業試験場に改称
”	福岡県立農事試験場豊前分場を福岡県立農業試験場豊前分場に改称
昭和25年	農林省九州農業試験場が福岡県立農業試験場筑後分場を統合
昭和31年	福岡県園芸指導所を福岡県立農業試験場筑後分場に改称
昭和32年	福岡市柏原（福岡市南区）に福岡県立農業試験場園芸分場を設置
昭和33年	八女郡黒木町（八女市）に福岡県立農業試験場茶業指導所を設置
昭和40年	福岡県立農業試験場園芸分場が福岡県立園芸試験場として独立。果樹指導所を編入
昭和53年	筑紫野市吉木に福岡県種畜場を移転
昭和54年	筑紫野市吉木に福岡県種鶏場を移転
昭和55年	筑紫野市阿志岐に福岡県立園芸試験場を移転
昭和56年	筑紫野市吉木に福岡県立農業試験場を移転

●農業総合試験場

昭和56年	福岡県立農業試験場、福岡県立園芸試験場、福岡県種畜場、福岡県種鶏場を統合し、福岡県農業総合試験場として発足。
”	福岡県立農業試験場豊前分場を福岡県農業総合試験場豊前分場に改称
”	福岡県立農業試験場筑後分場を福岡県農業総合試験場筑後分場に改称
”	福岡県立農業試験場茶業指導所を福岡県農業総合試験場茶業指導所に改称
昭和62年	福岡県立果樹母木園を福岡県農業総合試験場果樹苗木分場に改称
平成元年	企画調整室を企画経営部に改組し、企画課、経営情報課を設置
”	経営環境研究所を生産環境研究所に改組し、生物資源部及び流通加工部を設置、経営部、環境保全部を廃止
”	農産研究所育種部に水稻育種研究室を、栽培部に機械化作業研究室を設置
”	畜産研究所大家畜部に畜産工学研究室を設置
平成2年	福岡県農業総合試験場茶業指導所を福岡県農業総合試験場八女分場に改称
平成5年	農産研究所栽培部の機械化作業研究室を廃止し、園芸研究所野菜花き部に施設機械研究室を設置
”	豊前分場に普通作物・野菜研究室を設置
”	八女分場に中山間地作物研究室を設置
平成12年	筑後分場に水田高度利用研究室を設置
平成14年	鉦害試験地を廃止
平成15年	生産環境研究所、農産研究所、園芸研究所、畜産研究所の廃止、農産物知的財産権センターを設置

2 組織及び事務の概要

農業総合試験場の組織と所掌事務は次のとおりである。



3 所在地

所 属	所 在 地	電 話 番 号	交 通 の 便
管 理 部	〒818-8549 筑紫野市大字吉木 587	092-924-2936 FAX 092-924-2981	<ul style="list-style-type: none"> 西鉄天神大牟田線「西鉄二日市」下車、西鉄バス吉木行き、太宰府駅行き、原営業所前行き、柚須原行き又は本導寺行き 「吉木入口」下車、東へ1.8km JR鹿児島本線「二日市」下車、西鉄バス吉木行き、太宰府駅行き、原営業所前行き、柚須原行き又は本導寺行き 「吉木入口」下車、東へ1.8km
企 画 情 報 部		(企画課) 092-924-2971 (知的財産管理課) 092-924-2986	
食 品 流 通 部		092-924-2930	
バイオテクノロジー部		092-924-2970	
土 壌・環 境 部		092-924-2939	
病 害 虫 部		092-924-2938	
農 産 部		092-924-2937	
(園芸棟) 野 菜 育 種 部 野 菜 栽 培 部 花 き 部 果 樹 部	〒818-8549 筑紫野市大字阿志岐 1-129	092-922-4930 092-922-4364 092-922-4958 092-922-4946 FAX 092-922-4916	<ul style="list-style-type: none"> 同西鉄バス「六本松」下車、東へ2.0 km
(畜産棟) 家 畜 部 畜 産 環 境 部	〒818-8549 筑紫野市大字吉木 1269	092-925-5232 092-925-5177 FAX 092-925-5308	<ul style="list-style-type: none"> 西鉄天神大牟田線「西鉄二日市」下車、西鉄バス葉光ヶ丘団地經由吉木行き「東吉木」下車、東へ1.8km JR鹿児島本線「二日市」下車、西鉄バス葉光ヶ丘団地經由吉木行き「東吉木」下車、東へ1.8km
豊 前 分 場	〒824-0038 行橋市西泉2丁目 4-1	0930-23-0163 FAX 0930-25-4143	<ul style="list-style-type: none"> JR日豊本線「南行橋」下車、徒歩約8分 平成筑豊鉄道「美夜古泉」下車、徒歩約12分
筑 後 分 場	〒830-0416 三潁郡大木町大字 八町牟田1003	0944-32-1029 FAX 0944-32-0977	<ul style="list-style-type: none"> 西鉄天神大牟田線「八丁牟田」下車、徒歩約10分
八 女 分 場	〒834-1213 八女市黒木町本分 3266-1	0943-42-0292 FAX 0943-42-1410	<ul style="list-style-type: none"> JR鹿児島本線「羽犬塚」下車、堀川バス「中町」下車、徒歩約40分
果 樹 苗 木 分 場	〒839-1212 久留米市田主丸町 石垣16-3	0943-72-2243 FAX 0943-72-4660	<ul style="list-style-type: none"> JR久大本線「田主丸」下車、徒歩約40分 西鉄天神大牟田線「西鉄久留米」下車、西鉄バス「上田主丸」下車、徒歩約40分

4 職 員

(1) 現 員 表

平成23年3月31日現在

所 属 名	行政職	研究職	勞 務 職				合計	
			農業技術員	運 転 士	用 務 員	小 計		
管 理 部	総 務 課	8	3		4	1	5	16
	会 計 課	7					0	7
	計	15	3	0	4	1	5	23
企 画 情 報 部	企 画 課	2	4				0	6
	知的財産管理課	1	2				0	3
	計	3	6	0	0	0	0	9
食 品 流 通 部		8					0	8
バイオテクノロジー部		5					0	5
土 壌 ・ 環 境 部		8	1				1	9
病 害 虫 部		8	1				1	9
農 産 部		11	10				10	21
野 菜 育 種 部		6	3			1	4	10
野 菜 栽 培 部		8	4				4	12
花 き 部		6	2				2	8
果 樹 部		10	5				5	15
家 畜 部		14	19			1	20	34
畜 産 環 境 部		9	4				4	13
本 場 計	18	102	49	4	3		56	176
豊 前 分 場	2	7	6		1		7	16
筑 後 分 場	2	7	7	1	1		9	18
八 女 分 場	2	7	3				3	12
果 樹 苗 木 分 場	2	5	2				2	9
分 場 計	8	26	18	1	2		21	55
合 計	26	128	67	5	5		77	231

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名	
農産部 水稻育種チーム	部 長	尾形 武文	野菜栽培部 イチゴ栽培チーム	部 長	山本 幸彦	
	研 究 員 (チーム長)	和田 卓也		専 門 研 究 員 (チーム長)	井上 恵子	
	研 究 員	井上 敬		研 究 員	水上 宏二	
	主 任 技 師	坪根 正雄		主 任 技 師	奥 幸一郎	
	主 任 技 能 員	田中 保博		主 任 技 能 員	瀬戸口 章	
	〃	坂口 聖史		〃	大熊 サヨ子	
	〃	吉積 慶二		研 究 員 (チーム長)	井手 治	
	専 門 研 究 員 (チーム長)	馬場 孝秀		研 究 員	國武 みどり	
	主 任 技 師	甲斐 浩臣		主 任 技 師	龍 勝利	
	〃	高田 衣子		〃	小熊 光輝	
	主 任 技 能 員	池田 明久		主 任 技 能 員	原田 ひろ美	
	〃	仲山 妙子		〃	別府 恭司	
麦類育種チーム	技 能 員	古江 洋幸	花き部 花き育種チーム	部 長	小代 文明	
	〃	岡松 陽介		研 究 員 (チーム長)	山田 明日香	
	研 究 員 (チーム長)	岩渕 哲也		主 任 技 師	巢山 拓郎	
	研 究 員	内川 修		〃	佐伯 一直	
	主 任 技 師	宮崎 真行		技 能 員	水落 実鶴	
	〃	平田 朋也		専 門 研 究 員 (チーム長)	谷川 孝弘	
	主 任 技 能 員	石川 雄二		主 任 技 師	中村 知佐子	
	〃	初井 優一郎		主 任 技 能 員	田中 清治	
	技 能 員	中西 政雄		果樹部 果樹育種チーム	部 長	矢羽田 第二郎
	研 究 員 (チーム長)	柴戸 靖志			研 究 員 (チーム長)	千々和 浩幸
	研 究 員	末吉 孝行			研 究 員	白石 美樹夫
	主 任 技 師	古賀 武			〃	石坂 晃
〃	片山 貴雄	主 任 技 師	村本 晃司			
〃	宮原 克典	主 任 技 能 員	石井 豊			
主 任 技 能 員	松岡 強	〃	岩隈 正彦			
〃	加藤 尚亮	研 究 員 (チーム長)	松本 和紀			
〃	児嶋 勇夫	主 任 技 師	藤島 宏之			
技 能 員	松井 美香	〃	渡邊 辰彦			
		〃	大倉 英憲			
		〃	朝隈 英昭			
		主 任 技 能 員	深見 義浩			
		技 能 員	勝田 英樹			
		〃	松生 茂久			
栽培品質・大豆育種 チーム			花き栽培チーム			

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名
家畜部 工学・養豚チーム	部 長	古賀 康弘	畜産環境部 環境衛生チーム	部 長	徳満 茂
	専門 研究員 (チーム長)	磯崎 良寛		専門 研究員 (チーム長)	浅田 研一
	専門 研究員	笠 正二郎		研 究 員	小山 太
	主 任 技 師	森 美幸		〃	尾上 武
	〃	山口 昇一郎		〃	福原 絵里子
	主 任 技 能 員	大川 良幸		技 能 員	北崎 直美
	〃	上瀧 英治		専門 研究員 (チーム長)	柿原 孝彦
	〃	池末 修		専門 研究員	棟加登きみ子
	技 能 員	秋吉 弘達		主 任 技 師	手島 信貴
	〃	高木 覚		〃	中村 由佳里
	専門 研究員 (チーム長)	馬場 武志		主 任 技 能 員	藤田 嘉昭
	研 究 員	梅田 剛利		〃	伊藤 ただし
	〃	北崎 宏平		〃	小河 淳史
	技 師	森永 結子		豊前分場	分 場 長
主 任 技 能 員	吉瀬 嘉彦	次 長	矢野 義文		
〃	米倉 隆信	事 務 主 査	山本 里美		
技 能 員	力丸 直	主 任 技 能 員	渡辺 和子		
〃	中屋 邦仁	専門 研究員 (チーム長)	林田 達也		
〃	野見山 剛	研 究 員	田中 良幸		
専門 研究員 (チーム長)	家守 紹光	〃	姫野 修一		
主 任 技 師	浅岡 壮平	〃	石丸 知道		
〃	林 武司	主 任 技 能 員	門崎 岸雄		
主 任 技 能 員	松熊 盛夫	〃	竹本 孝博		
〃	力丸 俊朗	技 能 員	松本 博文		
〃	林 龍雄	〃	松下 晃		
〃	平尾 江津子	研 究 員 (チーム長)	野方 仁		
専門 研究員 (チーム長)	西尾 祐介	主 任 技 師	井上 義章		
研 究 員	小島 雄次	主 任 技 能 員	中山 芳之		
主 任 技 能 員	棚町 英明	〃	中村 俊一		
〃	篠崎 文江				
〃	小能見 義彦				
技 能 員	菓子野 正人				
〃	米倉 博治				
〃	森岡 龍太				
乳牛チーム			野菜水田作チーム		
肉用牛チーム			果樹チーム		
家きんチーム					

(3) 職員の異動

ア 転 入

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

転入年月日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
H22.4.1	本 場	場 長	松 江 勇 次	本場
〃	〃	副 場 長	渡 邊 大 起	水田農業振興課
〃	〃	バイオテクノロジー部長	古 庄 雅 彦	本場
〃	〃	農 産 部 長	尾 形 武 文	本場
〃	〃	参 事	高 田 則 好	市町村支援課
〃	〃	企 画 課 長	大 石 裕 二	農林水産政策課
〃	〃	専 門 研 究 員	家 守 紹 光	経営技術支援課
〃	〃	会 計 課 副 長	馬 場 良 一	飯塚農林事務所
〃	〃	事 務 主 査	藤 田 博 行	朝倉農林事務所
〃	〃	事 務 主 査	青 木 守	北筑後教育事務所
〃	〃	研 究 員	水 上 宏 二	筑後分場
〃	〃	主 任 主 事	小 松 由 紀 子	那珂県土事務所
〃	〃	主 任 主 事	河 本 明 日 香	労働政策課
〃	〃	主 任 技 師	石 橋 正 文	豊前分場
〃	〃	主 任 技 師	平 田 朋 也	筑後分場
〃	〃	主 任 技 師	朝 隈 英 昭	果樹苗木分場
〃	〃	主 任 技 師	林 武 司	飯塚農林事務所
〃	豊 前 分 場	次 長	矢 野 義 文	北九州東県税事務所
〃	〃	専 門 研 究 員	林 田 達 也	八幡農林北九州普及指導センター
〃	〃	主 任 技 師	井 上 義 章	飯塚農林飯塚普及指導センター
〃	筑 後 分 場	分 場 長	濱 地 勇 次	本場
〃	〃	次 長	篠 田 俊 博	久留米県土整備事務所
〃	〃	専 門 研 究 員	下 村 克 己	本場
〃	〃	主 任 技 師	大 野 礼 成	筑後農林南筑後普及指導センター
〃	〃	主 任 技 能 員	濱 田 文 子	久留米県税事務所
〃	八 女 分 場	主 任 主 事	仙 頭 和 子	八女県土整備事務所
〃	果 樹 苗 木 分 場	研 究 員	牛 島 孝 策	本場

イ 転 出

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

転出年月日	所 属	職 名	氏 名	転 出 先 所 属
H22.4.1	本 場	農 産 部 長	濱 地 勇 次	筑後分場
〃	〃	専 門 研 究 員	上 田 修 二	経営技術支援課
〃	〃	会 計 課 副 長	河 野 宏 治	朝倉農林事務所
〃	〃	事 務 主 査	矢 野 由 紀 子	朝倉農林事務所
〃	〃	事 務 主 査	森 田 真 治	那珂県土整備事務所
〃	〃	事 務 主 査	林 徳 子	筑紫県税事務所
〃	〃	研 究 員	下 村 克 己	筑後分場
〃	〃	研 究 員	満 田 幸 恵	福岡農林福岡普及指導センター
〃	〃	研 究 員	牛 島 孝 策	果樹苗木分場
〃	〃	主 任 主 事	久 家 千 恵	工業技術センター
〃	〃	主 任 技 師	横 山 学	農林水産政策課
〃	〃	主 任 技 師	荒 卷 幸 一 郎	筑後農林事務所
〃	〃	主 任 技 師	佐 藤 公 洋	筑後農林南筑後普及指導センター
〃	豊 前 分 場	次 長	岡 村 祐 二	行橋農林事務所
〃	〃	専 門 研 究 員	田 中 浩 平	経営技術支援課
〃	〃	主 任 技 師	石 橋 正 文	本場
〃	筑 後 分 場	次 長	吉 田 龍 樹	久留米高等技術専門校
〃	〃	研 究 員	井 上 拓 治	筑後農林八女普及指導センター
〃	〃	研 究 員	水 上 宏 二	本場
〃	〃	主 任 技 師	平 田 朋 也	本場
〃	八 女 分 場	事 務 主 査	重 野 義 江	八女県土整備事務所
〃	〃	主 任 技 能 員	大 隈 英 明	八女県土整備事務所
〃	果 樹 苗 木 分 場	主 任 技 師	朝 隈 英 昭	本場

ウ 退 職

(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

退職年月日	所 属	職 名	氏 名	備 考
H22.8.17	本 場	主 任 技 師	井 上 信 明	
H23.3.31	〃	場 長	松 江 勇 次	
〃	〃	副 理 事 兼 管 理 部 長	荻 野 徳 男	
〃	〃	企 画 情 報 部 長	津 留 崎 正 信	
〃	〃	総 務 課 長	吉 永 能 典	
〃	〃	会 計 課 長	濱 田 広	
〃	〃	主 任 技 能 員	大 川 良 幸	
〃	豊 前 分 場	分 場 長	山 本 富 三	
〃	筑 後 分 場	専 門 研 究 員	吉 野 稔	

5 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数

(1) 施設・ほ場の面積

区 分	総面積	建物		水 田	畑	樹園地
		棟 数	面 積			
本 館	ha		m ²	ha	ha	ha
管 理 棟		1	4,825			
付 属 施 設		73	9,432	5.3	0.7	0.4
園芸研究棟						
管 理 棟		1	1,537			
付 属 施 設		87	13,395	0.6	1.2	6.9
畜産研究棟						
管 理 棟		1	1,438			
付 属 施 設		89	14,285	0.3	13.1	
農業資料館		1	483			
本 場 小 計	135.6	253	45,395	6.2	15.0	7.3
豊 前 分 場	7.1					
管 理 棟		1	880			
付 属 施 設		25	1,878	2.2		3.6
筑 後 分 場	2.8					
管 理 棟		1	867			
付 属 施 設		15	1,762	3.1		
八 女 分 場	2.9					
管 理 棟		1	817			
付 属 施 設		12	1,899		1.5	
果樹苗木分場	1.9					
管 理 棟		1	675			
付 属 施 設		13	1,734		0.5	
分場等小計	14.7	68	10,318	5.3	2.0	3.6
農業大学校	16.8	50	15,777	0.7	1.1	1.6
農業研修所	2.7	3	3,031			
合 計	169.8	374	74,521	12.2	18.1	12.5

(2) 飼養家畜数

平成23年3月31日現在

種 別		雄	雌	計	品 種 別 頭 羽 数	
乳 牛	成 牛	頭 —	頭 23	頭 23	ホルスタイン種23頭	
	育成牛	—	6	6	ホルスタイン種 6頭	
	子 牛	—	—	—		
肉 用 牛	成 牛	4	12	16	ホルスタイン種去勢 4頭、黒毛和種雌12頭	
	育成牛	2	2	4	ホルスタイン種去勢 2頭、黒毛和種雌 2頭	
	子 牛	6	2	8	黒毛和種去勢 6頭、黒毛和種雌 2頭	
牛 計		12	45	57		
豚	種 豚	7	17	24	大ヨークシャー種20頭、デュロック種 4頭	
	試験豚	15	53	68	大ヨークシャー種67頭、デュロック種 1頭	
	計	22	70	92		
鶏	種	卵用種	羽 —	羽 —	羽 —	
		兼用種	215	392	607	横斑プリマスロック種607羽
		肉用種	162	309	471	軍鶏471羽
	試 験 用	卵用種	0	231	231	白色レグホン種231羽
		肉用種	—	—	—	
計		377	932	1,309		
めん羊		頭 5 (内去勢 4)	頭 3	頭 8	コリデール種 8頭	

6 主要工事及び重要物品

(1) 主要工事

工 事 名	金 額 (千円)	備 考
畜産棟暖房設備設置工事	22,348	管理部
園芸棟暖房設備設置工事	21,157	管理部
畜産第2キュービクル他改修工事	8,400	管理部
野菜キュービクル改修工事	3,675	管理部
畜産第6キュービクル改修工事	3,129	管理部
イノシン防御柵工事	2,929	果樹部
防霜ファン入替工事	2,457	八女分場
本館大会議室天吊エアコン取付工事	2,415	管理部
空調設備設置工事	2,216	八女分場
果樹棚災害復旧工事	1,937	果樹部
温室修繕工事	1,974	花き部
本館冷暖房設備工事	1,841	筑後分場
プレハブ冷凍庫改修工事	1,701	畜産環境部
井戸改修工事	1,659	果樹苗木分場
福原試験地かん水施設改修工事	1,523	豊前分場
ハウス施設装置修繕工事	1,313	野菜栽培部
畜産棟飲料用井戸ポンプ取替え事	1,155	管理部
計	81,829	

(2) 重要物品

物 品 名	金 額 (千円)	備 考
大豆コンバイン	5,789	農産部
人工気象装置	4,631	果樹部
スキッドステアローダー	3,558	家畜部
多飼料DNA抽出遠心分離装置	2,331	バイオテク部
高速液体クロマトグラフ	2,021	食品流通部
孵卵器	2,048	家畜部
トラクター	2,300	筑後分場
田植え機	1,354	豊前分場
計	24,032	

7 歳入・歳出決算(平成22年度)

(1) 歳入決算

(千円)

区 分	1 特定収入							2 一般財源 (人件費を 含む)	3 国 庫 支出金	4 その他 (受託金)	合 計
	(1)使用 料及び 手数料	(2) 財産貸 付収入	(3) 生産物 売払代	(4) 動 物 売払代	(5) 不要品 売払代	(6)利 子及び 配当金	(7)雑入				
本 場	44,405	1,457	5,208	18,395	16,951		2,394	1,555,395	144,928	21,675	1,766,403
豊前分場	1,368	59		1,289			20	149,627	5,683	3,448	160,126
筑後分場	1,083	31		1,016			36	158,103	4,556	3,867	167,609
八女分場	1,177	16		1,135			26	105,700		5,683	112,560
果樹苗木分場	4,798	6		236			4,556	89,942	4,548	861	100,149
計	52,831	1,569	5,208	22,071	16,951	0	7,032	2,058,767	159,715	35,534	2,306,847

(2) 歳出決算

(千円)

区 分	人 件 費	管 理 費	試験研究費	施設整備費	企画調整費	合 計
管 理 部	1,230,967	124,872		163,330		1,519,169
企画情報部			2,663		1,554	4,217
食品流通部			4,215	3,265		7,480
バイオテクノロジー部			10,942	3,301		14,243
土壌・環境部			11,016	910		11,926
病虫害部			20,761	2,056		22,817
農 産 部			34,446	9,983		44,429
野菜育種部			10,638	2,895		13,533
野菜栽培部			8,616	3,173		11,789
花 き 部			4,592	2,275		6,867
果 樹 部			20,145	13,249		33,394
家 畜 部			44,322	10,123		54,445
畜産環境部			13,470	8,624		22,094
本場小計	1,230,967	124,872	185,826	223,184	1,554	1,766,403
豊前分場	135,637	8,912	11,408	4,169		160,126
筑後分場	144,371	5,205	13,395	4,638		167,609
八女分場	88,079	5,543	13,157	5,781		112,560
果樹苗木分場	77,057	6,098	11,306	5,688		100,149
合 計	1,676,111	150,630	235,092	243,460	1,554	2,306,847

*人件費については、退職手当を除く。

(参考) 畜産における生産

(1) 牛乳生産量

年 月	乳 牛		
	搾乳頭数	搾乳延頭数	生産量
	頭	頭	kg
22. 4	19	521	12,351
5	18	485	13,253
6	18	465	15,005
7	15	427	13,055
8	14	426	11,359
9	13	366	8,224
10	14	358	8,961
11	13	361	9,897
12	14	411	10,699
23. 1	14	415	12,533
2	17	391	11,987
3	14	413	13,129
計(平均)	(15.3)	5,039	140,453

(2) ひな、卵の生産及び購入状況

ア ひなの生産状況

年 月	生 産 羽 数 (羽)								
	横斑 [®] リマスロック		軍 鶏		はかた地どり はかた一番どり		そ の 他 (種鶏)		
	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	無鑑別
22. 4	—	—	157	145	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	285	233	—	—	—
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	—	—	—	—	—	—	180	—	—
11	—	—	—	—	98	96	—	—	—
12	112	184	—	—	—	—	—	—	—
23. 1	68	112	113	136	—	—	33	—	—
2	—	—	—	—	—	—	110	—	—
3	—	—	6	68	—	—	—	—	—
計	180	296	276	349	383	329	323	0	0
合 計	476		625		712		323		

イ ひなの購入状況

年 月	購 入 羽 数 (羽)									
	白色レグ ホーン系		ロードアイラ ンドレッド系		ブロイラー・ はかた一番どり		ホワイト ロック		日本鶏その他	
	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌
22. 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	—	—	—	—	275	274	—	—	—	—
12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23. 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	—	—	—	—	275	274	—	—	—	—
合 計	—		—		549		—		—	

ウ 卵の生産状況

単位：kg

年 月	22/4	5	6	7	8	9	10
種 卵	0	0	0	0	0	0	0
食 卵	490.7	276.5	478.0	814.7	789.6	769.1	882.1
計	490.7	276.5	478.0	814.7	789.6	769.1	882.1
年 月	11	12	23/ 1	2	3	計	
種 卵	62.0	38.9	58.5	75.7	0	235.1	
食 卵	793.3	731.8	506.5	386.9	597.6	7,516.8	
計	855.3	770.7	565.0	462.6	597.6	7,751.9	

(3) 飼料作物

ア 栽培面積

飼料作物生産圃場面積は平成23年3月31日現在1,039 a であり、延作付面積は1,913 a であった。延収穫面積は2,336 a であり、圃場の回転率は1.92回であった。

イ 飼料作物栽培状況

作物(品種)	収穫面積(a)	10a当たり(kg)	総収量(kg)
イタリアンライグラス	1,184	1,689	200,000
トウモロコシ	0	0	0
スーダングラス	823	1,366	112,400
ギニアグラス	0	0	0
ローズグラス	0	0	0
ヒエ	0	0	0
その他	229	1,572	36,000
計	2,236	—	348,400

ウ 飼料作物の利用状況

利用区分	収納場所	作物名	生草換算収量(kg)
サイレージ	ラップサイロ	イタリアンライグラス	200,000
		トウモロコシ	0
		スーダングラス	112,400
		ギニアグラス	0
		ローズグラス	0
		ヒエ	0
		その他	36,000
	合 計		348,400

8 参観者

(1) 試験場（分場を含む）

区分	官公署	農業者等	教育者等	一 般	大学生 高校生	中学生	小学生	幼稚園児 父兄	計
県内	398	2,327	43	305	144	64	23	8	3,312
県外	178	377	21	42	53	0	0	0	671
外国	14	0	16	4	0	0	0	0	34
計	590	2,704	80	351	197	64	23	8	4,017

(2) 農業資料館

区分	官公署	農業者等	教育者等	一 般	大学生 高校生	中学生	小学生	幼稚園児 父兄	計
県内	26	572	2	1,376	102	20	17	0	2,115
県外	9	230	7	19	40	0	0	0	305
外国	16	0	0	6	0	0	0	0	22
計	51	802	9	1,401	142	20	17	0	2,442

II 試験研究の概要

Ⅱ 試 験 研 究 の 概 要

1 平成22年度試験研究課題数

部・分場名	課 題 数	
	大 課 題	中・小 課 題
食 品 流 通 部	4	5
バイオテクノロジー部	4	5
土 壤・環 境 部	10	15
病 害 虫 部	6	10
農 産 部	9	15
野 菜 育 種 部	3	3
野 菜 栽 培 部	6	8
花 き 部	4	11
果 樹 部	8	12
家 畜 部	17	20
畜 産 環 境 部	7	8
豊 前 分 場	10	12
筑 後 分 場	8	13
八 女 分 場	6	8
果 樹 苗 木 分 場	6	10
合 計	108	155

(課題数には事業課題を含む)

2 平成21年度試験研究の成果数

成果 分類	① 新技術	② 技 術 改 良	③ 品 種 育 成	④ 品 種 選 定	⑤ 生 理 生 態	⑥ 製 品 開 発	⑦ 経 営	⑧ 情 報 技 術	⑨ 研 究 手 法	⑩ 調 査 分 析	⑪ 行 政 対 応	合 計
作 物		3										3
野 菜	2	1										3
花 き	1											1
果樹・茶	5	2										7
畜 産	1	2										3
合 計	9	8										17

3 平成22年度試験研究の概要

〔流通加工チーム〕

食品流通部

〔経営マーケティングチーム〕

1 北部九州水田輪作地帯における省力低コスト生産技術の体系化と現地実証 (22～23)

(1) 省力低コスト生産技術の現地実証と経営的評価 (22～23)

技術開発部門で試験研究が行われている稲、麦、大豆の省力低コスト技術について、朝倉市の集落営農組織を対象に作業調査を行い、新技術が経営に与える影響について明らかにした。水稻の直播を導入すると、水稻の10aあたり労働時間は1.3時間短縮され、生産費は3,230円削減される。大豆の浅耕一工程播種及びディスク式中耕は、大豆の労働時間を0.17時間短縮するが生産費は変わらない。

2 集落営農による低コスト飼料用米生産システムの構築 (21～22)

(1) 飼料用米の低コスト生産モデルの策定 (21～22)

集落営農組織に、飼料用米を導入した低コスト生産モデルを策定した。米・大豆・麦の二毛作の集落営農組織では、飼料用米を導入しても収益効果がない。但し、大豆単収が130kg以下の地域では、大豆を飼料用米に代替することで収益が増加する。また、中山間地等の水稻単作地域の集落営農組織では、転作作物に飼料用米を導入すると機械装備を拡充しても収益が増加する。

(2) 低コスト飼料用米生産システムの構築 (22)

飼料用米生産の採算性や飼料用米を給与した養豚生産費への影響、さらに消費者の評価等、米を家畜飼料としてとして利用した場合の経済性を明らかにした。現行の飼料用米の助成制度や価格体系のもとでは、飼料用米生産は水稻7ha以上の規模階層で生産費を確保できる。飼料用米を給与した養豚は一頭当たり飼料費が270円、精肉1kg当たり生産費が5.2円増加する。飼料用米を給与した豚肉の消費者の価格評価は7割が一般豚肉と同等、3割が高く評価した。

1 需給調整に対応したブロッコリーの長期貯蔵技術の確立 (22～23)

(1) 包装資材を利用した長期貯蔵技術の開発 (22～23)

ブロッコリーをフィルム包装（折込み）して-2℃に貯蔵すると、6週間鮮度保持できる。貯蔵したブロッコリーは、出庫後の鮮度低下を防ぐためフィルムで個包装（バッグシール）すると良い。

2 果実の品質保持のための輸送条件の確立 (22～24)

(1) いちじくの低コスト流通技術の開発 (22～24)

イチジク「とよみつひめ」の低コスト・遠隔地出荷を推進するため作型と降雨が収穫後果実の品質に及ぼす影響や出荷条件がイチジクの日持ち性に及ぼす影響について明らかにした。果実水分は降雨後1～2日で最大となり、糖度は最小となることが明らかとなった。また、果実を光殺菌し、5℃に制御されたトラックで輸送すると、品質に影響することなく遠隔地へ輸送できることが明らかとなった。

(2) カキに付着したフジコナカイガラムシの殺虫処理条件の確立 (22～24)

カキを海外に輸出する際に問題となるフジコナカイガラムシを効率的に殺虫する技術を開発した。温度や雰囲気ガス条件を検討し、カキ表面に付着したフジコナカイガラムシは100%、ヘタ下の付着虫では97%殺虫できた。処理後は、冷蔵柿用フィルムで包装し、果実品質に影響することなく冷蔵で2ヶ月以上貯蔵できることを明らかにした。

バイオテクノロジー部

[遺伝子情報活用チーム]

1 イチゴ次世代「あまおう」の育成 (20～24)

(1) DNAマイクロアレイによる有用形質の 選抜技術の開発 (20～24)

マイクロアレイ解析を基に開発したqRT-PCR選抜マーカーと炭疽病接種の両評価手法に裏付けられた抵抗性の217系統を選抜した。さらに、うどんこ病抵抗性分離集団のマイクロアレイ解析により、分離に適合する197のマーカー候補遺伝子を選定した。

また、花芽分化関与遺伝子群を検索するために、「さがほのか」に由来するcDNAマイクロアレイを作成した。さらに、「さがほのか」自殖および交雑後代で分離する早生性への関与が示唆されるマーカー候補遺伝子群を選定した。

(2) 有用遺伝子の集積技術の開発 (20～24)

イチゴの有用形質を雑種後代へ効率的に遺伝させるために、有用遺伝子集積系統作成を目的とした薬培養により、1091の再生個体を獲得した。さらに、半数体や自然倍加個体を選抜するためのDNAマーカーを利用し、半数体の可能性が高い16個体を得た。

2 早期開花結実技術を活用した果樹 オリジナル品種の開発 (21～25)

(1) DNAマーカーおよび開花ホルモン等を活用 したナシの早期選抜技術 (21～25)

成熟期が「幸水」より早い早生の赤ナシを早期に育成するためにDNAマーカーを適用し、6交雑組み合わせ1994実生から、早生の赤ナシと推定される880個体を選抜した。また、発現制御型の花成ホルモン遺伝子FcFTを導入したナシ台木候補4系統のうち、1系統を増殖発根して1個体を鉢上げした。さらに、可溶性で可視化したFcFTタンパク質を大量発現する大腸菌発現系を確立するとともに、検出のための抗体を作成した。

3 農作物の品種識別技術の開発 (18～継続)

(1) キクの品種識別技術の開発 (21～22)

本県育成のキク新品種の育成者権を護るため、遺伝子データベースに登録されているキク遺伝子の配列を基に、14品種の識別に適用可能なマーカーを検索した。11種のマーカーは、「雪姫」を含む本県育成4品種と市場に流通する11品種間で多型を示し、識別性が認められた。

4 キク「雪姫」の高品質安定生産技術 (22～24)

(1) ウイロイドフリー苗の育成技術 (22～24)

キク「雪姫」の栽培で問題となるウイロイドに起因する収量低下を予防するために、ウイロイドフリー化条件を検討した。

2種成長点近傍培養手法は、5～24%の確率で、いずれもCSVdフリー個体が獲得できた。また、フリー化後に30℃で培養することが、CSVd検定の精度を高く保つのに有効であった。

土壌・環境部

[環境保全チーム]

1 農産物におけるカドミウムの リスク低減技術の開発 (20~24)

(1) 土壌洗浄によるカドミウム汚染土壌の修復 技術の確立 (20~24)

塩化第二鉄溶液でカドミウム (Cd) 汚染土壌を洗浄する化学洗浄法は現地Cd汚染圃場の修復技術として有望と考えられている。そこで、化学洗浄施工水田において水稲一麦二毛作を行い、リスク低減効果を確認した。22年産麦の作付け前土壌の化学性は、洗浄区と無洗浄区に差は認められなかった。コムギ子実中のCd含有率は無洗浄区を1とした場合、洗浄区で0.36となり化学洗浄によるCd含有率低減効果が確認された。化学洗浄施工圃場に炭酸苦土石灰を6 Mg ha⁻¹施用するとコムギ作付け期間中の土壌pHは概ね6.5で経過し、他の資材区より明らかに高くなった。同区では、0.01M塩酸抽出Cd濃度も低い値を示し、子実中のCd含有率は資材無施用区に比べて有意に低減できることが明らかとなった。一方、堆肥、ケイカル、ようりんの施用効果は認められなかった。

(2) 水田転換畑におけるファイトレメディエーションによるカドミウム汚染土壌修復技術の開発 (20~24)

ムギ類は九州地域の水田裏作として広く栽培されているが、土壌のCd濃度が低レベルであっても子実中のCd濃度がCodex基準値を超える可能性が指摘されている。そこで、これまでに選抜されたイネやソルガムのCd高吸収品種を用いて水田転換畑におけるファイトレメディエーション技術を開発し、土壌中のCd濃度を低減させることによりムギ類子実中のCd濃度をCodex基準値以内に抑えることを目指した。長香穀、IR-8、ソルガムを3年連続で栽培しても収量の低下が認められないことから、これらの植物では連作障害は無いと思われた。土壌中のCd濃度の低下に伴い、植物のCd吸収量は年々低下する傾向を示した。いずれの植物も根は15cmまでの作土層に全体の97~98%含まれることから、植物は作土層からCdを吸収しているものと思われた。また、刈り株の回収効果は低いことが明らかになった。

(3) 栽培法と資材施用を組み合わせたムギの カドミウム吸収抑制技術の開発 (20~24)

西日本で栽培されているコムギ品種は、土壌中Cd濃度が低レベルであっても、子実中のCd含有率がCodex基準値を超える可能性が指摘されている。そこで、Cd吸収量を低減できる資材を明らかにするとともに、子実Cd含有率が低い品種を選定した。炭酸苦土石灰を6 Mg ha⁻¹施用すると、栽培期間を通じて上層土壌のpHが無施用よりも高く推移しシロガネコムギおよび農林61号の子実Cd含有率は無施用区より明らかに低くなった。それ以外の資材は施用効果は判然とはしなかった。コムギ品種ではシロガネコムギ、ニシホナミでCd含有率が高く、農林61号で低かった。しかし、いずれもCodex基準値(0.2ppm)を下回ることはできなかった。オオムギ、ハダカムギはコムギよりCd含有率は低かったものの、Codex基準値(0.1ppm)を下回る品種はなかった。

2 土壌由来温室効果ガス抑制技術の 実証 (20~24)

(1) 農地土壌における温室効果ガス固定量の 評価 (20~24)

県内全域の水田26地点、樹園地13地点の計39地点について、土壌断面および30cmの深さまでの作土層と下層の仮比重、土壌中全窒素および全炭素含量を調査した。

3 残留農薬に関する研究 (46~継続)

(1) 農薬の残留特性の解明 (15~継続)

マイナー作物等の農薬登録を推進するため、パセリのアクタラ顆粒水溶剤などの農薬残留性を分析した。

[施肥高度化チーム]

1 施肥コスト削減技術の確立 (20~25)

(1) 水稲・麦体系水田圃場におけるリン酸・ カリ施肥量の削減が収量・品質に及ぼす 影響の解明 (20~25)

リン酸およびカリの蓄積土壌で、リン酸、カリ施用量を50%以上減らし、長期継続した場合の水稲および麦の収量、品質、土壌中の可給態リン酸と交換性カリ含量の消長について明らかにする。可給態リン酸30mg/100g、交換性カリ含量25mg/100gの中肥沃土壌と、可給態リン

酸15mg/100g、交換性カリ含量3mg/100gの低肥沃土壌を用いて、リン酸、カリ施用量を標準量の半量および全量削減した場合の小麦チクゴイヅミおよび水稲ヒノヒカリの収量、品質、土壌中の養分含量等を調査した。

小麦では、リン酸およびカリの減肥は収量・品質に悪影響を及ぼすことはなかったが、土壌中の交換性カリ含量は確実に減少した。

水稲ではリン酸の2年間の長期減肥は水稲の収量・品質に悪影響を及ぼすことはなかったが、カリの減肥では生育が劣り、収量が減少する傾向が見られた。土壌中の交換性カリは収量に悪影響が出るまでに減少した。

(2) 施設園芸圃場のリン酸およびカリ過剰土壌における施肥量削減技術の確立 (20~22)

施設園芸圃場では、土づくりのために投入した堆肥や過剰施肥による土壌中の塩類集積が問題となっている。一方、世界的な肥料需要の増加や肥料原料のリン鉱石やカリ鉱石の価格上昇により、肥料価格が高騰している。このため、土壌診断に基づく適正な施肥が必要である。そこで、リン酸およびカリ蓄積土壌における施肥リン酸およびカリの肥効を明らかにする。

作土中の可給態リン酸および交換性カリ含量が135および100mg/100g乾土程度の施設圃場で、コマツナを5作連続で無リン酸・無カリ栽培した場合、収量は慣行栽培と変わらなかった。交換性カリはコマツナの吸収により1作毎に乾土100g当たり8mg程度減少したが、可給態リン酸はほとんど減少しなかった。施設のコマツナで無リン酸・無カリ栽培ができる可給態リン酸(トルオーグ)および交換性カリ含量の下限値は、乾土100g当たり130mgおよび70mgであった。

2 地域内未利用資源を原料とする発酵肥料の開発 (21~23)

(1) 発酵肥料の肥料特性の解明と野菜に対する施用効果 (21~23)

肥料高騰により施肥量の節減や化学肥料に代わる資材、資源の利用の必要性が高まっている。そこで、旅館や飲食店から排出される食品残さを主原料とした発酵肥料の肥料特性と野菜に対する施用法を明らかにする。

発酵肥料の肥料成分量を高めるために鶏ふんを原料の1つとして配合した発酵肥料の窒素無機化速度と野菜に対する施用効果を明らかにした。鶏ふんを配合した発酵肥料の窒素無機化速度は、配合しない場合と比較して低くなったため、鶏ふん配合のハウレンソウへの窒素肥効の明確な差は1作では認められなかった。一方、リン酸、カリ成分については成分量を高めた効果が認められた。

宗像市で食品残さ乾燥物を主原料として製造されている発酵肥料は、窒素およびリン酸成分がともに約3%であることに対して、カリが1%強であった。他の有機

質資材と比較して3要素の成分バランスがフラット化されていた。発酵肥料の窒素無機化は緩やかに上昇するパターンを描くが、培養約60日における無機化率は約30%で代表的な有機質肥料である菜種油かすの半分であった。培養試験における窒素無機化率を考慮し、追肥しないことを想定して発酵肥料を施用したが、投入量が大きくなったために、化学肥料区と比べると発芽ムラが大きかった。跡地土壌の化学性の比較からも過剰施肥であることは明らかであった。

3 作物の養分管理に基づく高品質安定生産技術の確立 (20~22)

(1) 温暖化に対応した水稲、小麦の高品質生産技術の開発と実証 (20~22)

近年、温暖化の進行にともない、水稲作においては白未熟粒の増加と粒の充実不足から検査等級が低下している。さらに、全量基肥栽培において、温暖化にともなう稲体窒素栄養要求と窒素肥効発現時期のずれが指摘されている。そこで、品質と収量の向上を目指して、全量基肥栽培における速効性窒素と緩効性窒素の配合割合を検討した。

m²当たり粒数28,000粒の窒素吸収量の指標としては幼穂形成期までに10a当たり5.5kg、穂揃期までに9~10kgであった。移植35日後から幼穂形成期にかけての茎数の目安は各々m²当たり430~450本、410~420本であった。高温登熟対策肥料として、長期間溶出するタイプを配合することによる施肥改善の効果は検査等級には現われなかったものの、整粒歩合に対するプラスの効果が認められた。なお、著しい高温年に想定される追肥施用は千粒重を向上させ外観品質向上が期待できるが、タンパク含量上昇に留意する必要があると考えられた。

4 飼料用稲一麦二毛作体系を基軸とした飼料生産技術の実証技術の確立 (22~26)

(1) 温暖多雨な圃場条件に適した試料用稲一試料用麦二毛作体系 (22~26)

暖地水田二毛作体系に適した品種選定は、九州沖縄農研セが開発する品種、系統を中心に選定し、その飼料特性把握並びに多収を維持しつつ適期作業を可能とする作期・作型を検討・実証する。さらに、農家・普及組織が参画した現地実証と経営評価を行い、九州北部の暖地水田向けの家畜ふん堆肥を利用した低コストで持続的な飼料用稲・麦二毛作生産技術の現地体系化を図り、実証レベルで2t/10aの乾物収量を得る。

場内圃場において、窒素施用量12kg(8+4)、16kg(12+4)/10aの2水準を設け、有望品種「まきみずほ」を

栽培した。水準間の収量差は小さく、いずれも乾物収量 1.2t/10a を確保できた。窒素吸収量および窒素利用率は水準間の差が小さかったが、コブノメイガの止葉に対する虫害率は両水準ともに非常に高く、16kg区で特に高い傾向を示し、虫害の回避により、さらなる収量の増加が見込まれると考えられた。

麦作付け前に牛ふん堆肥 2 t / 10 a を施用し、堆肥施用の有無、窒素施用量 2 水準、基肥・追肥の施肥割合 3 水準を組み合わせ 12 水準を設け、有望品種「ワセドリ 2 条」の栽培試験を現在実施中である。

5 キク「雪姫」の高品質安定生産技術の確立 (22~24)

県育成の白色系秋ギク「雪姫」は、生育後半に下位葉から斑点状の生理障害が発生しやすく、それによる品質悪化が問題となっている。土壌 pH と Mn 施用量が「雪姫」の斑点症等の発生に及ぼす影響を検討した。

土壌 pH 2 水準 (5.0, 6.0) に Mn 施用量 4 水準 (0, 1, 5, 10kg/10a) を組み合わせてプランタ栽培した結果、葉中の Mn 含有量に差がみられたが、すべて斑点症が発生した。すべての水準で下位葉の Na 含有量が高く、Mn よりも Na の過剰による影響ではないかと考えられた。

6 施肥の合理化に関する研究 (62~継続)

(1) 新肥料・資材の効果確認試験 (62~継続)

新開発の肥料および土壌改良資材について、作物に対する肥効や施用方法を明らかにした。本年度は、水稻を対象に 4 肥料の施用効果を検討した。

ケイカルは、品質はわずかに向上する傾向が見られ、玄米収量が増加した。また、酢酸法を用いて判別した土壌中の可給態ケイ酸含量別では、収量や品質に差が見られなかった。

緩効性肥料 SCU・BB388 は、水稻生育期間中の初期においては対照区より窒素の肥効がやや弱く、籾数も対照区より少なめであったが、登熟が良かったことから対照区と遜色のない収量であった。総じて対照区と比べてやや窒素利用率が低く、籾数がやや少なめとなる。一方で粒の充実は対照区と遜色がなく品質面では差が認められない。収量は年によってやや低めとなることがあると考えられた。

けい酸加里は、エムコート 600 号に上乘せ施用すると、カリとケイ酸の吸収が向上し、収量がわずかに増加した。

ケイ酸加里入りエムコート複合 402 は、対照のエムコート 600 号と比べて収量、品質ともに差が見られず、養分(窒素、ケイ酸、カリ)吸収量で比較しても明確な違いは認められなかった。

7 作物の栄養生理障害の解明 (継続)

(1) 作物の栄養生理障害原因究明 (継続)

依頼のあった大豆 1 件、野菜 7 件 (サラダナ 2 件、セルリー 1 件、ゴボウ 1 件、シュンギク 1 件、タデ 1 件、キュウリ 1 件)、花き 3 件 (キク 1 件、ヒマワリ 1 件、ガーベラ 1 件)、果樹 3 件 (ユズ 1 件、モモ 1 件、スモモ 1 件) について診断を行った。

病害虫部

1 IPM（総合的病害虫管理）に基づく減農薬防除体系の確立（22～24）

(1) カンキツ園における減農薬栽培等の環境保全効果の評価に用いる生物多様性の指標生物の選抜

ア 指標生物種を用いた標準的な評価手法の開発（22～24）

県内のカンキツ園（減農薬8カ所、慣行防除5カ所）で調査を行ったところ、指標候補種が効率的に確認できる手法と時期は、ピットフォールトラップではゴミムシが5月、甲虫類およびオサムシ類が7、8月、オオヒラタシデムシが8月、黄色粘着トラップではテントウムシ類が6月、見取り調査ではクモ類およびジョロウグモが7月であった。確認数は周辺環境（水田や畑地が多く見られる平坦地、スギ・ヒノキ主体の林野等）によって異なるため、環境保全効果の評価に用いる際には周辺環境が揃った同一地域内で、発生の多い生物を選択する必要がある。

(2) 促成イチゴの育苗期における土着天敵を高度活用したIPM体系の確立（21～23）

土着天敵を核としたIPM体系の現地実証試験を行い、有効性を評価した。IPM体系区では、ハダニ類の密度増加に合わせて、ハダニアザミウマとカブリダニ類（ケナガカブリダニとミヤコカブリダニ）が発生し、ハダニ類の密度抑制効果が得られた。また、ワタアブラムシも同様に、アブラコバチ類による密度抑制効果が得られたと推察された。一方で、慣行防除区では、薬剤だけではハダニ類に対して十分な密度抑制効果は得られなかった。本IPM体系での殺虫剤の散布（成分）回数は2回～3回で、慣行防除区の1/3以下であった。以上のことから、育苗ほ場で発生する土着天敵を活用することで薬剤の使用回数を大幅に削減できる本IPM体系は、十分な防除効果を得ることができるため、実用性は高いと推察された。

天敵誘引植物候補として選定したダイズをイチゴ育苗圃に設置し、ダイズとイチゴ苗に発生する土着天敵種と害虫を調査した。ダイズで発生する土着天敵はカブリダニ類、ヒメハナカメムシ類、クサカゲロウ類及びハダニアザミウマであった。主要害虫はアザミウマ類、カメムシ類、ハスモンヨトウ、ヒメヨコバイ類、アブラムシ類であった。イチゴ苗で発生した土着天敵は、ハダニ類とアブラムシ類の発生が少なかったため、クサカゲロウのみであった。主要害虫は、ハスモンヨトウとヒメヨコ

バイ類であった。ダイズ設置によるイチゴ苗への主要害虫増加等は認められなかった。以上の結果から、ダイズは種々の土着天敵を誘引・温存でき、発生する主要害虫がイチゴに及ぼす影響も低いことから誘引植物として有効であると判断された。

(3) 土着天敵を維持活用したカキ害虫の総合的管理技術の開発（21～23）

場内草地にプランター植えのヒャクニチソウを設置したところ、放飼したフジコナカイガラクロバチ（カキ害虫フジコナカイガラムシの有力な天敵）を誘引することが示された。また、現地カキ園内にヒャクニチソウを植栽し減農薬栽培を行ったところ、植栽しなかった区に比べて天敵類の定着開始時期が早まった。

2 気候温暖化によって発生が増加する病害虫の防除対策（21～23）

(1) ミナミアオカメムシの発生予察法および防除対策の確立（21～23）

場内の周辺環境が異なる3ヶ所（雑草地、水田、ダイズ畑）にフェロモントラップを設置し誘殺消長を調査すると共にほ場での発生消長も調査して両者を比較した。その結果、本種の少発生条件下においてもフェロモントラップで効率的に発生量を調査できる可能性が示唆された。また、ダイズ畑ではトラップでの誘殺数が増加した9月3半旬以降にほ場内で成・幼虫が認められた。このことから、ほ場内の調査では低密度のため把握しづらい本種の侵入・定着時期がフェロモントラップで推定できる可能性が示唆された。

薬剤を散布したイネの穂にミナミアオカメムシ5齢幼虫を接種し、殺虫効果と被害阻止効果を調査した。その結果、キラップフロアブルは長期間の殺虫効果に優れ、スタークル顆粒水溶剤、トレボン乳剤は被害阻止効果に優れた。スミチオン乳剤は速効的であったが残効性に劣った。

(2) タバココナジラミにより媒介される新発生ウリ科野菜ウイルス病の防除体系の確立（21～23）

昨年度選抜したウリ類退緑黄化ウイルス感染抑制効果の高い殺虫剤4薬剤（コルト顆粒水和剤、サンマイトフロアブル、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤、ベストガード水溶剤）について残効性を検討した。薬剤散布1, 7, 14日後のキュウリ苗に保毒虫を曝露し感染率を調

査した結果、いずれの薬剤も散布7日後まではウイルス感染抑制効果が高かったが、散布14日後では感染抑制効果は認められなかった。

場内抑制栽培キュウリにおいて、ウイルス感染抑制効果の高い薬剤と捕食性天敵スワルスキーカブリダニを組み合わせた体系防除試験を実施した。体系防除区では試験期間を通してコナジラミを低密度に抑制できた。また、施設内に退緑黄化病罹病株を設置したため、定植70日後には無処理区の発病株率が63%と高感染圧条件下での試験となったが、体系防除区は発病が認められなかった。しかし、RT-PCRによりウイルス感染の有無について調査した結果、体系防除区では67%（無処理区は93%）の株が感染していた。定植時の薬剤施用によりウイルスの感染時期を遅らせることができ、さらに天敵利用により媒介虫密度を低下させたことでウイルス感染拡大の抑制に一定の効果が得られたものと考えられた。

3 突発性病害虫の発生生態と防除 (19~24)

(1) イチジク黒葉枯病の発生生態と防除対策 (21~23)

本病多発ほ場では果実腐敗や枝の一部や枝幹部に枯れ込みが見られたため、接種試験を行った結果、本病原菌は葉枯れ症状だけでなく、枝枯症状及び果実腐敗を引き起こすことが明らかとなった。

前年に本病を接種した場内ほ場で、発生推移を調査した結果、初発は6月中旬頃に観察され、発生は7月上旬から増加し始め、7月下旬から急増し、9月下旬まで増加が続き、10月以降停滞した。病斑下に孢子トラップを設置し、分生子の飛散消長を調査した結果、調査期間中の5月から10月の降雨のたびに観察された。

菌接種を行った小苗を用いて有効薬剤の探索を実施した。その結果、トップジンM水和剤とアミスター10フロアブルに効果があることが判明した。

場内ほ場と現地ほ場で防除体系試験を行った結果、5月下旬~7月下旬にアミスター10フロアブル、トップジンM水和剤、ダコニール1000、コサイドボルドーをローテーション散布する防除体系はイチジク黒葉枯病を抑制できた。また、現地ほ場で枝病斑を切除する耕種的防除を行った結果、発病抑制効果があった。

4 小麦赤かび病によるかび毒蓄積制御技術の開発 (21~24)

(1) 小麦赤かび病かび毒蓄積量予測技術の開発 (21~24)

品種「チクゴイズミ」を用いて開花期における蒴からの赤かび病菌の分離頻度と実際の被害との関係を検討した。接種源として赤かび病菌培養トウモロコシ粒を畝間にまき、開花期前後のスプリンクラーによる散水（5分間/1回）を0、1、2、4回/1日とすることで赤かび病菌の蒴への感染圧を変えた。開花期および2、4、7日後の蒴からの赤かび病菌の分離頻度、開花期25日後の赤かび病の発病率、発病度および収穫した子実のかび毒蓄積量{デオキシニバレノール(以下DON)濃度}を調査した。その結果、蒴からの赤かび病菌の分離頻度と発病率、発病度およびDON濃度との間にそれぞれ正の相関が認められ、特にDON濃度との間の相関が高かった。

5 キク「雪姫」の高品質安定生産技術の確立 (22~23)

(1) ウイロイド感染防止対策技術の確立 (22~23)

花き部が増殖したキク「雪姫」の苗を対象に、キクわい化ウイロイド（CSVd）およびトマト黄化えそウイルス（TSWV）の検定を行い、ウイルス・ウイロイドフリーの親株を約400本確保した。

「雪姫」および「神馬」にCSVdを汁液接種し、試験に用いるCSVd感染株を確保・増殖した。

6 新防除資材による病害虫制御技術の確立 (51~継続)

(1) 新開発農薬の適応性検定 (51~継続) ア イネ紋枯病

BCM091箱粒剤のは種時覆土前50g/箱処理は、イネ紋枯病に対して対照のビルダープリンスグレータム粒剤の移植時50g/箱処理に優る防除効果を示し、実用性は高いと考えられた。育苗初期に生育の抑制が見られたが、その後の生育への影響は見られなかった。

イ イネ紋枯病

BCM092箱粒剤の移植時50g/箱処理は、イネ紋枯病に対して対照のビルダープリンスグレータム粒剤の移植時50g/箱処理に優る防除効果を示し、実用性は高いと考えられた。葉害は認められなかった。

ウ イネのウンカ類・ヨコバイ類

MH-1375粒剤50g/箱の緑化期の育苗箱施用は、セジロウンカおよびツマグロヨコバイに対して中発生条件下で対照のビームアドマイヤースピノ箱粒剤50g/箱と効果が同等で、実用性があると考えられた。トビイロウンカ、ヒメトビウンカに対する防除効果は発生が少なく判定ができなかった。薬害は認められなかった。

エ イネのウンカ類

キラップフロアブル100倍500ml/箱の移植期の育苗箱処理は、セジロウンカに対して中発生条件下で対照のビームアドマイヤースピノ箱粒剤50g/箱より効果が低く、実用性は低いと考えられた。トビイロウンカ、ヒメトビウンカに対する防除効果は発生が少なく判定ができなかった。薬害は認められなかった。

オ キュウリのタバココナジラミ・バイオタイプQ

(7) XI-06010D

本剤の2,000倍、茎葉散布は、対照のスタークル顆粒水溶剤2,000倍、茎葉散布と比較して、タバココナジラミに対する効果は同等であった。また、無処理と比較してタバココナジラミに対する効果はあった。実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

(イ) アグリメック

本剤の1,000倍、茎葉散布は、対照のスタークル顆粒水溶剤2,000倍、茎葉散布と比較して、タバココナジラミに対する効果は劣った。また、無処理と比較してタバココナジラミに対する効果は認められるが、その程度は低かった。効果はやや低いが、実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

(ウ) マハラジャ乳剤

本剤の500倍、7日間隔2回散布は、対照のスタークル顆粒水溶剤2,000倍、1回散布と比較して、タバココナジラミに対する効果は同等であった。また、無処理と比較してタバココナジラミに対する効果はあった。実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

カ キュウリのミナミキイロアザミウマ

(7) モベントフロアブル

本剤の500倍、定植直前ポット灌注処理(50ml/ポット)は、対照のベストガード粒剤2g/株、定植時植穴土壌混和と比較して、アザミウマ幼虫に対する効果が優れた。また、無処理と比較して、アザミウマ幼虫に対する効果が高かった。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

キ キュウリのワタアブラムシ

(7) DAI-1001フロアブル

本剤の2,000倍及び4,000倍、茎葉散布は、対照のモスピラン水溶剤2,000倍、茎葉散布と比較して、ワタア

ブラムシに対する効果は同等であった。また、無処理と比較してワタアブラムシに対する効果は高かった。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

ク イチゴのハスモンヨトウ

(7) アニキ乳剤

本剤2,000倍散布は、散布1日後に死亡虫が確認されたことから、即効性を有すると考えられた。また、対照薬剤のアファーム乳剤と比べ、補正密度指数が低く推移したことから、同等以上の防除効果が得られたと推察された。以上の結果から、ハスモンヨトウを対象とした防除体系の基軸として利用できると考えられる。

ケ イチゴのナミハダニ

(7) ポリオキシシンAL水溶剤

本剤5,000倍散布は、対照区のバロックフロアブルと比べてやや遅効的に作用したものの一定の防除効果は得られた。また、土着天敵に対する影響が少ないことから、本剤は土着天敵を活用した育苗期のIPM体系に適すると考えられる。なお、薬害は認められなかった。

コ イチゴのカンザワハダニ

(7) IK-06

本剤の2頭/株、2回放飼は、無処理と比較して、カンザワハダニに対する効果は認められるがその効果は低かった。効果はやや低いが実用性はあると考えられる。なお、本剤放飼による植物体への影響は認められなかった。

サ イチゴのアブラムシ類

(7) モベントフロアブル

本剤のポット苗灌注500倍、25ml/ポット及び500倍、50ml/ポットは、対照のアドマイヤー1粒剤、植穴土壌混和0.5g/株と比較して、効果が優り、無処理と比較して効果は高かった。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

(イ) BCI-093SL

本剤の1,000倍散布は、対照のウララDF2,000倍散布と比較して、効果はほぼ同等で、無処理と比較して効果は高かった。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

(ウ) ハチハチフロアブル

本剤の1,000倍散布は、対照のウララDF2,000倍散布と比較して効果がやや劣り、無処理と比較して効果は認められるがその程度はやや低かった。効果はやや低いが実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

シ ナスのチャノホコリダニ

(7) モベントフロアブル

本剤の500倍、50ml/株育苗ポット灌注は、対照のピラニカEW2,000倍、茎葉散布と比較して、チャノホコリダニに対する効果は同等であった。また、無処理と比較してチャノホコリダニに対する効果は高かった。実

用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

(イ) AKD-5188FL20

本剤の1,000倍、茎葉散布は、対照のピラニカEW2,000倍、茎葉散布と比較して、チャノホコリダニに対する効果は同等であった。また、無処理と比較してチャノホコリダニに対する効果は高かった。実用性は高いと考えられる。散布5日後に上位展開葉（散布時に展葉初期）に葉やけ症状が発生したが、生育への影響は見られなかったため、実用上問題ないと考えられる。

ス キクのクロゲハナアザミウマ

(ア) スワルスキー

本剤の1週間間隔、3回放飼は、無処理と比較して、クロゲハナアザミウマに対する効果は認められた。スワルスキーカブリダニはキク葉上で定着が確認されたことから、実用性はありと考えられる。薬害は認められなかった。

セ イチゴ炭そ病

(ア) サイド3000ドライフロアブル

本剤の1,000倍希釈液の2回散布は、イチゴ炭そ病多発生条件下において、対照薬剤のセイビアフロアブルの1,000倍希釈液の2回散布と比較して、やや劣るものの防除効果を示した。効果は低いものの実用性はありと考えられる。薬害は認められなかった。

(イ) ビオネクト

本剤の600倍希釈液の2回散布は、イチゴ炭そ病多発生条件下において、対照薬剤のセイビアフロアブル1,000倍希釈液の2回散布と比較して、防除効果がやや劣った。実用性はありと考えられる。薬害は認められなかった。

ソ シュンギク炭そ病

(ア) ベンレート水和剤

本剤の4,000倍希釈液の2回散布は、対照薬剤のアミスター20フロアブル2,000倍希釈液の2回散布と比較して、防除効果がやや劣った。効果は低いものの実用性はありと考えられる。薬害は認められなかった。

タ ナスうどんこ病

(ア) AKD-5188FL20

本剤の1,000倍希釈液の3回散布は、ナスうどんこ病中発生下で、対照薬剤のモレスタン水和剤2,000倍希釈液の3回散布と比較して、同等の優れた防除効果を示した。実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

チ ナシうどんこ病

(ア) S-2200 40SC

本剤の3,000倍散布は対照のベルコート水和剤1,000倍と比較して同等の効果が認められ、無処理と比較して効果が認められた。実用性はありと考えられる。薬害は認

められなかった。

ツ ブドウ黒とう病

(ア) IKF-5411SC400

本剤の1500倍液散布は、対照のデランフロアブルの1,000倍液散布より優れた防除効果を示し、無処理区と比較して防除効果が認められた。実用性はありと考えられる。本剤散布による薬害は認められなかった。

本剤の3,000倍液散布は、対照のデランフロアブルの1,000倍液散布より優れた防除効果を示し、無処理区と比較して防除効果が認められた。実用性はありと考えられる。本剤散布による薬害は認められなかった。

(イ) S-2200 40SC

本剤の3,000倍液散布は、対照のデランフロアブルの1,000倍液散布より優れた防除効果を示し、無処理区と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと考えられる。本剤散布による薬害は認められなかった。

テ キウイフルーツすす斑病

(ア) ベルクート水和剤

本剤の1,000倍散布は8月24日の発病葉率、貯蔵後の発病果率で無処理より少なく、やや効果が低いものの防除効果が認められた。薬害は認められなかった。薬剤の実用性はありと考えられるが、防除期間が5月上旬から7月上旬の4回散布の防除体系では、その効果は不十分で、7月以降にも薬剤散布が必要と考えられた。

(イ) ベンレート水和剤

本剤の2,000倍散布は8月24日の発病葉率、貯蔵後の発病果率で無処理より少なく、やや効果が低いものの防除効果が認められた。薬害は認められなかった。薬剤の実用性はありと考えられるが、防除期間が5月上旬から7月上旬の4回散布の防除体系では、その効果は不十分で、7月以降にも薬剤散布が必要と考えられた。なお、試験区から12菌株を分離し、ベノミルに対する薬剤感受性検定を行ったが、低感受性菌は認められなかった。

ト カキ炭疽病

(ア) MAF-0801SC

本剤の4,000倍散布は、接種条件下において対照のジマンダイセン水和剤400倍より効果が劣り、無処理と比較しても、効果は認められなかった。実用性はないと考えられる。薬害は認められなかった。

(イ) ナリアWDG

本薬剤2,000倍散布は、接種条件下において対照のストロビードライフロアブル3,000倍より効果が優れ、実用性はありと考えられる。薬害は認められず、汚れも少なかった。

(ウ) ストライド顆粒水和剤

本薬剤3,000倍散布は、接種条件下において対照のストロビードライフフロアブル3,000倍より効果は劣り、無処理と比較しても効果は低かった。実用性はないと考えられる。薬害は認められず、汚れも少なかった。

ナ カキうどんこ病

(ア) プロパティフロアブル 3,000倍

本剤の3,000倍液散布は、対照のストロビードライフフロアブルの3,000倍液散布に優る高い防除効果を示し、無処理と比較して高い防除効果が認められた。実用性は高いと考えられる。本剤散布による薬害は認められなかった。

(イ) ダイパワー水和剤

本剤の1,000倍液散布は、対照のストロビードライフフロアブルの3,000倍液散布に劣る防除効果を示し、無処理区と比較しても防除効果が認められなかった。本試験結果では実用性はないと考えられる。本剤散布による薬害は認められなかった。

ニ ナシのシンクイムシ類

(ア) XI-0801SE

本剤2,500倍の3回散布は、主にナシヒメシンクイの中発生条件下で対照のスミチオン水和剤40の1,000倍と比較して効果はやや劣るが無散布区と比較して防除効果が認められることから、実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

(イ) フェニックスフロアブル

本剤4,000倍の3回散布は、主にナシヒメシンクイの中発生条件下で対照のスミチオン水和剤40の1,000倍と比較して効果がやや劣り、無散布区と比較して効果がやや低いことから、実用性はあるがその程度は低いと考えられる。薬害は認められなかった。

ヌ ナシのケムシ類（アメリカシロヒトリ）

フェニックスフロアブル

本剤4,000倍散布は、接種条件下において無処理区と比較して防除効果が高いことから、実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

ネ ブドウのチャバネアオカメムシ

ダントツ水溶剤

本剤2,000倍の散布は、接種条件下において対照のスタークル顆粒水溶剤2,000倍と比較して防除効果は同等、無処理区と比較して効果が高く、実用性は高いと考えられた。薬害は認められなかった。

本剤4,000倍の散布は、接種条件下において対照のスタークル顆粒水溶剤2,000倍と比較すると防除効果はやや劣るものの、無散布区と比較すると効果が認められた

ことから、実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

ノ ブドウのフジコナカイガラムシ

オリオン水和剤40

本剤1,000倍の散布は、接種条件下において無処理区と比較して防除効果が認められたことから、実用性はあると考えられる。薬害は認められなかった。

ハ ブドウのチャノキイロアザミウマ

コルト顆粒水和剤

本剤3,000倍の散布は、少発生条件下の試験のため効果は判然としなかった。薬害は認められなかった。

ヒ ブドウのハスモンヨトウ

XI-0801SE

本剤5,000倍の散布は、接種条件下において対照のコテツフロアブル2,000倍と効果が同等で、実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

フ カキのカンザワハダニ

(ア) NNI-0711フロアブル

本剤2,000倍の散布は、少発生条件下の試験のため効果は判然としなかった。薬害は認められなかった。

(イ) スターマイトフロアブル

本剤2,000倍の散布は、少発生条件下の試験のため効果は判然としなかった。薬害は認められなかった。

ヘ カキのフジコナカイガラムシ

MTI-446水溶剤（顆粒）

本剤2倍液80ml/樹の樹幹塗布1月処理、2月処理は、接種条件下において3月処理と同等以上の高い効果が認められ、無処理区と比較していずれも効果が高く、普及性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

ホ カキのチャバネアオカメムシ

キラップフロアブル

本剤2,000倍の散布は、接種条件下において対照のアクタラ顆粒水溶剤2,000倍と比較して高い防除効果が認められたことから、普及性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

マ カンキツのアブラムシ類

ME5343顆粒水和剤

本剤2,000倍の散布は、ミカンクロアブラムシの中発生条件下において対照のアドマイヤー顆粒水和剤10,000倍と効果が同等で、実用性は高いと考えられる。薬害は認められなかった。

ミ カンキツのアメリカシロヒトリ

ロディー乳剤

本剤2,000倍の散布は、中齢幼虫接種条件下において無散布区と比較して防除効果が高く、実用性は高いと考

農産部

〔水稻育種チーム〕

えられる。葉害は認められなかった

ム カンキツのケムシ類（アメリカシロヒトリ）

ア フェニックス顆粒水和剤

本剤4,000倍の散布は、中齢幼虫接種条件下において無散布区と比較して防除効果が高く、実用性は高いと考えられる。葉害は認められなかった。

イ マブリック水和剤

本剤2,000倍の散布は、中齢幼虫接種条件下において無散布区と比較して防除効果が高く、実用性は高いと考えられる。葉害は認められなかった。

メ サクラのアメリカシロヒトリ

GG291水溶剤

本剤2倍液1ml×10cm間隔の樹幹注入は、老齢幼虫接種条件下において無処理と比較して高い防除効果が認められたことから、実用性は高いと考えられる。葉害は認められなかった。

また、本剤2倍液2ml×20cm間隔の樹幹注入は、老齢幼虫接種条件下において無処理区と比較して効果は認められるがその程度はやや低いことから、実用性は低いがあると考えられる。葉害は認められなかった。

1 省資源低投入・低コスト稲作に向く品種の育成 (21~25)

(1) 交配

極良食味に高度いもち耐性および縞葉枯病抵抗性およびトビイロウンカ抵抗性を付与した品種、高温登熟性の優れた品種、多収品種、酒造適性の優れた品種等の育成を主な育種目標として、81組合せの交配を行い、75組合せについて所定の種子を採種した。

(2) F₁ 養成

83組合せのF₁を圃場で養成し、102組合せについて種子を採種した。

(3) 雑種集団養成

27組合せ(F₂)を冬春期に温室で養成し、所定の種子を採種した。

(4) 個体選抜試験

28組合せのF₃集団（各組合せ450~1800個体）を供試し、熟期、草型等を主な指標として選抜した。

(5) 系統選抜試験

単独系統として、32組合せ、1,197系統を供試し、固定度、草状、玄米品質、穂発芽性、いもち耐病性及びアミロース含有率等を主な指標として26組合せ98系統を選抜した。

後代系統として、77組合せ、1,007系統を供試し、固定度、草状、玄米品質、穂発芽性及びいもち耐病性等を主な指標として、23組合せ、65系統を選抜した。

(6) 生産力検定予備試験

29組合せ、260系統を1区制で供試し、草状、収量性、玄米品質、穂発芽性、テクスチュロメーターによる食味評価等により17組合せ、61系統を選抜した。

(7) 生産力検定本試験

22組合せ、66系統を2~3区制で供試し、育成地における収量性、外観調査、耐病虫性及び食味評価等により9組合せ、18系統を選抜した。昨年度、有望とした系統（ちくし系統）の判定は次のとおりである。

ア 極早生

「夢つくし」を対象品種として、食味、収量性が同程度かそれ以上で、高温登熟性が優れ、外観品質がそれ以上の系統を中心に選抜した。「ちくし74号」は外観品質がやや劣るものの、いもち病抵抗性および食味が優れることから、継続検討とした。

イ 早生

早生については、平成22年に検討した有望系統はない。

ウ 中生

中生についても、平成22年に供試した有望系統はない。

エ 晩生（中生の晩含む）

収量性が「ツクシホマレ」と同程度かそれ以上、食味が「つやおとめ」と同程度かそれ以上で、外観品質と高温登熟性が優れる系統を中心に選抜した。「ちくし72号」と「ちくし73号」は収量、食味、品質がバランス良く優れる特徴があるが、「ちくし72号」は高温登熟性が十分でない点、「ちくし73号」は現地試験において低収であったことから打ち切りとした。また「ちくし79号」は熟期が「あきさやか」よりも遅いことから打ち切りとした。

なお、本年の新配布系統は、収量、外観品質、食味等の形質を重視して、以下の2系統とした。

1)ちくし80号（ちくし36号／夢つくし）

極早生。「夢つくし」と比較して、出穂期、成熟期が同程度で、稈長、穂長はやや長い。玄米千粒重は大きく、収量性はやや優れる。葉いもち病圃場抵抗性は“中”で、高温登熟性は“やや強～中”である。DNAマーカーによる判定で縞葉枯病抵抗性遺伝子“Stvb-i”を持つと推定される。「夢つくし」より腹白の発生がやや多いが、心白、乳白の発生が少なく、玄米の外観品質は優れる。「夢つくし」より優れる良食味である。

2)ちくし81号（西海250号／夢つくし）

極早生。「夢つくし」と比較して、出穂期が同程度、成熟期が2日遅い。玄米千粒重はやや小さく、収量性は同程度である。葉いもち病圃場抵抗性は“弱”で、穂発芽性は“やや易”で、高温登熟性は“やや強”である。「夢つくし」より心白、乳白の発生が少なく、玄米の外観品質は優れる。「夢つくし」と比較して同程度～やや優れる良食味である。

(8) 品種特性試験

交配母本に利用するために、全国で育成された127品種、系統の特性を調査し、種子を保存した。

(9) 特性検定試験

育成系統を選抜する際の指標とするため、葉いもち圃場抵抗性(1,500品種、系統。以下、品種)、高温登熟性(350品種)、縞葉枯病抵抗性(1,000品種)、穂発芽性(350品種)、食味官能試験(150品種)、アミロース含有率及びタンパク質含有率等の理化学的特性(500品種)を調査した。

3 デンプン構造変異系統を用いた 米粉用育種素材の育成 (20～24)

主食用途としての米の消費量は漸減傾向にあり、新たな用途開発が課題となっている。しかし、主食用の品種はデンプンのアミロース含量が低く粘りが強いいため、パン、麺、菓子等への用途には向かないとされている。そこで、九州大学で育成されたデンプン構造変異系統(EM10)を交配母本として、米粉に適した実用的な育種素材の育成する目的で、交配を行い、所定の交配種子を得た。同時に世代促進および個体選抜を実施し、EM10よりも収量性に優れる有望個体が得られた。

4 水稻奨励品種決定調査 (昭16～継続)

本県に適した優良品種を選定するため、場内の基本調査（予備調査、生産力検定調査）および現地調査を実施した。

(1) 予備調査

極早生3系統、中生の早5系統、中生の晩4系統、晩生3系統の合計15系統3系統を供試した。6月10～21日に機械移植を行い、標準栽培とした。次年度に生検へ編入する系統はなかった。

(2) 本調査

極早生の「ちくし74号」、中生の晩の「ちくし72号」「ちくし73号」を供試した。6月10～21日に機械移植を行い、標準栽培とした。

極早生の「ちくし74号」は熟期がやや遅く、高温登熟性が不十分であったが、良食味でいもち病抵抗性に優れることから継続検討とした。中生の晩の「ちくし72号」は高温登熟性が「ヒノヒカリ」と同等であること、「ちくし73号」は現地試験において収量性が劣っていたことから、両系統ともに打ち切りとした。

(3) 現地調査

現地5ヶ所で「ちくし74号」を、5カ所で「ちくし72号」「ちくし73号」を供試した。「ちくし74号」はいもち病抵抗性に優れ、良食味であることが認められたが、外観品質が概して劣っていた。「ちくし72号」は短稈で収量性に優れていたが、外観品質が低下する地点が認められた。「ちくし73号」は収量性が対照品種「ヒノヒカリ」よりも劣っていた。

5 DNAマーカー利用による効率的育種技術の開発

(1) 高温寡照条件下の登熟性に関するDNAマーカーの開発 (20~22)

近年、特に九州地域では水稻の登熟期間中が高温寡照で経過し、心白米、背白米および乳白米等の未熟粒(以下、白未熟粒)や充実不足米が多発し、玄米の外観品質が著しく低下している。そこで、高温条件下で登熟しても玄米の外観品質が低下しにくい品種の効率的な育成に必要な、DNAマーカーによる優良系統の選抜技術を開発するために、高温登熟性に関与する遺伝的領域等について検討した。

つくしろまん(白未熟粒多)/ちくし52号(白未熟粒少)の交雑後代に由来するRI系統を用いて、白未熟粒発現に関する遺伝的領域の解析を行い、背白米の発生に関するQTL(量的形質遺伝子座)を第8染色体上に、乳白米の発生に関するQTLを第4染色体上に各々見出した。

〔麦類育種チーム〕

1 高醸造適性・多収・耐病性の暖地向き醸造用二条大麦品種の育成 (18~22)

西日本地域を対象とした、早生・良質・耐病・強稈・多収の醸造用二条大麦品種を育成する。

播種後~1月中旬の気温は、概ね平年並で経過した。1月下旬~3月下旬の気温は平年より高く推移した。その後は寒暖を繰り返し、4月中下旬および5月下旬は平年を下回った。日照時間は、全期間を通じて多照・寡照を交互に繰り返した。12月上旬中旬、2月中旬~3月中旬、4月中旬は平年を大きく下回り、4月下旬~5月中旬は多照であった。降水量は全期間を通じて多く推移し、特に3月以降は多雨傾向で推移した。3月は低温の日が観測され、3月10日には約10cmの積雪があり、3月26、27日には最低気温が氷点下近くまで下がった。

出芽は良好であった。1月中旬まで気温は平年並であ

ったが、その後高く推移したため生育は進み分けつは旺盛となった。しかし、3月以降の降雨により有効穂数が少なくなった。出穂期は平年より2日程度早かったものの、その後の低温により成熟期は平年より2日程度遅くなった。穂数が少なかったことと、登熟期の降雨により枯れ熟れ傾向で生育したため、粒の充実が十分でなく千粒重や整粒歩合は低下したことにより低収となった。被害粒の発生は平年よりやや少なかったものの、充実不足により外観品質は平年よりやや劣った。

(1) 交配

早生、安定多収、高醸造適性、外観品質良、被害粒発生無、高整粒歩合、大麦縞萎縮病(I~III型)抵抗性、うどんこ病抵抗性を主要な育種目標として111組合せの人工交配を行い、所定の種子を採種した。

(2) F1養成

前年度に交配した多収、高醸造適性、耐病性、被害粒発生無を主要な育種目標とする76組合せのF₁を養成し、全組合せから所定の種子を採種した。このうち、27組合せについては温室を利用して世代促進させ、すべての組み合わせから所定の種子を採種した。

(3) 雑種集団養成及び選抜試験

大麦縞萎縮病・うどんこ病抵抗性、高醸造適性、早生・多収、被害粒発生無などを主要育種目標とした76組合せのF₂集団を供試して、51組合せを全刈り収穫した。F₃集団では50組合せを供試し、49組合せから合計18,620穂を選抜した。

(4) 派生系統選抜試験

派生系統1年目のF₄の50組合せ19,000穂系統を供試して、44組合せから171系統を選抜した。派生系統2年目のF₅は40組合せ329系統を供試して、24組合せ45系統を選抜した。

(5) 特性検定試験

大麦縞萎縮病抵抗性(栃木農試栃木分場、山口農試、作物研、福岡農総試で検定、以下同じ)、赤かび病抵抗性(福岡農総試)、うどんこ病抵抗性(長崎総農林試)、湿害抵抗性(三重科技センター)、秋播性、被害粒抵抗性、穂発芽抵抗性(以上福岡農総試)の特性検定試験を行い、選抜の参考とした。

(6) 生産力検定予備試験(1)

系統選抜を経てきた34組合せ51系統の生産力を1区制で検定し、被害粒の多少、耐病性、収量性、立毛、外観品質及び醸造適性が優れた5組合せ7系統を選抜した。

(7) 生産力検定予備試験(2)

5組合せ10系統を供試し、被害粒の多少、栽培特性、収量性、立毛、外観品質及び醸造適性が優れた2組合せ4系統を選抜した。そのうち、2組合せ2系統を次年度の系比系統(「吉系88」、「吉系89」)として、残りの2系統は継続検討とした。

(8) 系統適応性検定試験

当場で育成した9系統を岡山、山口、佐賀、大分の各農業試験場に配付し、地域適応性の検討を行った。

(9) ビール大麦合同比較試験

ア 系統比較試験

当場育成の5系統、栃木農試栃木分場育成の5系統、ビール会社育成の6系統に比較の3品種を含めた、合計19品種、系統を供試した。当場の育成系統のうち、「吉系83」を次年度「九州二条23号」として、「吉系85」、「吉系86」、「吉系87」は継続系統として選抜した。また、「吉系84」は大麦縮萎縮病抵抗性遺伝子をrym3のみ持っていることから廃棄した。

イ 品種比較試験

当場育成の2系統、栃木農試栃木分場育成の3系統、サッポロ社育成の1系統に比較の6品種を含めた、合計12系統・品種を供試した。当場の育成系統「九州二条20号」、「九州二条22号」は継続とした。

(10) 赤かび病抵抗性特性検定試験

供試した試験系統の赤かび病発病程度は、VR(極強)、R(強)、M(中)、S(弱)、VS(極弱)がそれぞれ43品種(36%)、28品種(24%)、38品種(32%)、10品種(8%)、0品種(0%)であった。

(11) ビール用、焼耐用二条大麦の高品質・雨害耐性系統の作出

高温処理による退色粒検定法を確立し、雨害耐性で製麦加工適性の優れる吉系78、82、筑系A1431、DH51-5を有望な系統として選定した。

2 省力・資源低投入に適した小麦優良系統の育成 (21~25)

穂揃期追肥を行わなくても原料の高品質化やランク区分に対応した蛋白含量を安定的に確保可能な省力・資源低投入栽培に適した小麦有望系統を育成する。

本年度の気象及び生育概況は大麦の項と同様であり、出穂期は平年より早かったものの、その後の低温により成熟期は遅くなった。穂数が少なく、粒の充実が十分でなく千粒重や整粒歩合は低下したことにより低収となり、充実不足により外観品質は平年よりやや劣った。

(1) 交配

硬質、早生、安定多収、病害抵抗性を主要な育種目標として17組合せの人工交配を行い、所定の種子を採種した。

(2) F₁ 養成

9組合せのF₁を養成し、全ての組合せから所定の種子を採種した。

(3) 雑種集団養成及び選抜試験

15組合せのF₂集団を供試して、13組合せを全刈り収穫した。また11組合せのF₃集団を供試して、10組合せから249穂を選抜した。

(4) 派生系統選抜試験

22組合せ、243系統を養成し、系統あたり1~3株の個体選抜を行った。脱穀後は赤かび病抵抗性、未熟粒、外観品質、硬軟質性を調査し、最終的に6組合せ15系統選抜した。

(5) 特性検定試験

赤かび病抵抗性及び穂発芽抵抗性の特性検定試験を行い、選抜の参考とした。

(6) 生産力検定予備試験

16組合せ23系統を供試し、早生、多収、高タンパク、高整粒歩合、外観品質良、製粉性・加工適性良、縮萎縮病抵抗性・赤かび病抵抗性、検査等級良を育種目標に3組合せ、3系統を継続検討とし、そのうち「筑系W1260」を次年度「ちくしW34号」とした。

(7) 生産力検定試験

2組合せ、2系統を供試し、1組合せ、1系統を継続検討とした。

(8) 半数体育種法による試験

1組合せの硬質小麦F₁とトウモロコシ花粉を交配し、合計2系統の半数体倍加系統を作出した。

2組合せ、117系統の半数体倍加系統を養成し、早生、短稈、耐倒伏性強、外観品質、硬質性により、11系統を選抜し、次年度の生産力検定予備試験に供試することとした。

〔栽培品質・大豆育種チーム〕

1 大豆新品種の育成 (22~26)

福岡県における大豆作付面積の99%は中生の「フクユタカ」であるが、播種適期が梅雨期間中と重なるため、播種の遅延を余儀なくされることから、比較的天候の安

定した6月に播種できる早播適性の高い品種が求められている。そこで、競争力の高い土地利用型農業を構築するため、機械収穫に適し、多収で早播適性に優れた早生で高品質な大豆品種を育成する。

(1) 交配

早生、安定多収、耐倒伏性強、外観品質良を主要な育種目標として4組合せの人工交配を行い、505粒を採種した。

(2) F₁ 養成

1組合せの雑種第1代を養成し、採種した。

(3) 世代促進、雑種集団養成及び選抜試験

平成21年の冬に3組合せの雑種第1代を世代短縮温室において養成し、F₂種子を得た。そのF₂種子を平成22年の春にさらに世代促進しF₃種子を得た。

夏に3組合せのF₂集団を養成し、等莢収穫し、5071粒を採種した。また、6組合せのF₃、F₄集団を養成し、173個体を選抜した。

(4) 派生系統選抜試験

1組合せ、171系統を養成し、33系統を選抜した。

(5) 大豆の早播における青立ちと各生育関連形質との関係

機械化適性に優れた青立ちの少ない品種の育成に資するため、既存品種・系統の青立ち程度を調査するとともに、フクユタカ/サチユタカのF₅世代系統において青立ちと各生育関連形質との関係について検討した。その結果、大豆の開花期が早い品種ほど青立ちが多くなる傾向が見られた。また、青立ちが多い系統は、開花期が早く、主莖長が短く、m²当たり粒数や収量が少ない傾向が認められた。

2 普通作物の品質評価と栽培法に関する研究

(1) ラーメン用小麦新品種「ちくしW2号」の栽培技術の確立 (18~23)

ア 緩効性肥料によるタンパク質含有率向上対策

「ちくしW2号」の普及定着には、安定した高い品質(タンパク質含有率12%以上目標)が必要である。そこで、穂揃期追肥(窒素5kg/10a)効果を確認するとともに、

省力・低コストを目指した施肥法として1回目の追肥における緩効性肥料の実用性について検討した。その結果、本年の気象条件において、穂揃期追肥4kgN/10a以上でタンパク質含有率12%以上が確保された。いずれの緩効性肥料タイプもタンパク質含有率12%以上を確保できたが、穂揃期5kgN追肥区と比べると0.3~1.1%低かった。

イ 浸漬処理や成熟期後の降雨による硬質粒率の低下が品質へ及ぼす影響

平成21年産「ちくしW2号」では、降雨後に収穫した子実において、硬質粒率が極端に減少する事例が見受けられた。そこで、全天候ハウス降雨制御施設を活用し、品種やタンパク質含有率が異なる材料を供試して、成熟期の降雨が硬質粒率および品質へおよびす影響を検討した。その結果、硬質粒率は浸漬処理や成熟期後の降雨により低下し、容積重は浸漬時間が長いほど軽くなったが、千粒重およびタンパク質含有率に差は認められなかった。

ウ 平成22年産「ちくしW2号」の産地ごとの品質評価および栽培管理の実態

平成22年産の「ちくしW2号」について、産地ごとの品質評価や栽培管理の実態を調査し、品質向上のための課題を検討した。その結果、平成22年産「ちくしW2号」は目標タンパク質含有率12%以上を達成できなかった。タンパク質含有率は産地や生産者によってばらつきがみられ、タンパク質含有率が低い産地や生産者の底上げが重要で、①穂揃期追肥の徹底、②適期播種および施肥等の基本技術の励行が重要であると考えられた。

エ 小麦枯れ熟れ様障害の発生要因と収量および品質への影響

一部の現地ほ場で「ちくしW2号」の枯れ熟れ様障害(以下、枯れ熟れ)の発生が認められた。このため、枯れ熟れ程度の異なるほ場の調査を行い、発生要因と収量および品質への影響について検討した。その結果枯れ熟れ発生要因としては、大豆作により水田を畑地化したことに伴う土壌の物理性の変化が考えられ、多発ほ場では土壌が乾きやすい状態であった。枯れ熟れ多発ほ場の麦はタンパク質含有率は高かったものの、屑麦が多く30~50%程度減収となった。前作水稻ほ場では収量、千粒重およびタンパク質含有率とも安定して優れた。

(2) 温暖化における暖地水稲の水田輪作等、 現地実態に適応した高品質安定生産技術 の開発と実証 (22~26)

ア 水稲品種「元気つくし」の高温耐性機構 の解明

水稲品種「元気つくし」の高温耐性機構の解明を目的とし、出穂後に温度条件が異なるファイトトロン施設内で「元気つくし」と「つくしろまん」をポット栽培し、高温ストレスが外観品質および理化学性におよぼす影響や品種間差を検討した。また、高温ストレス条件下における登熟期間中の乾物動態、物質生産（非構造化炭水化合物）および稈・葉鞘の遺伝子発現の誘導、籾内部の遺伝子発現や貯蔵タンパク質の反応の品種間差異を検討することで、「元気つくし」の高温耐性が優れる要因をシンク（玄米側）・ソース（茎葉側）能力の両面から検討した。

その結果、「元気つくし」では処理区にかかわらず検査等級が1等に格付されたのに対し、「つくしろまん」の高温処理区では、3等～規格外に格付された。検査等級が1等と優れた「元気つくし」の高温処理区では、一次枝梗の白未熟粒の発生はほとんど認められなかった。「元気つくし」では、「つくしろまん」と比べて光合成同化産物（NSC）の転流がスムーズであり、高温ストレス条件下ではより活発になることが示された。これら転流が優れる要因の一つとしてショ糖トランスポーター遺伝子の発現の誘導の影響が考えられた。さらに、「元気つくし」は「つくしろまん」と比べて高温ストレスによる遺伝子発現の誘導が緩慢であった。高温ストレス条件下において、「つくしろまん」では貯蔵タンパク質の一つであるプロラミン合成に関与する遺伝子発現が減少し、成熟した玄米のプロラミン蓄積量も大幅に減少した。

イ 温暖化に対応した「ヒノヒカリ」の 高品質生産技術の開発と実証

近年の温暖化による玄米外観品質低下を回避するためには、光合成促進の観点から籾数等のシンク容量を抑え、ソース（茎葉）側の同化産物供給力を向上させる技術開発が重要である。しかし、本年の県内「ヒノヒカリ」の1等米比率は高温の影響により20%を下回った。一方で、農総試ほ場内では1等に格付された試験区もみられた。そこで、本年および高温の影響が少なかった平成21年産「ヒノヒカリ」について、籾数と収量、検査等級および外観品質の結果から温暖化に対応する適正な籾数を検討した。さらに、籾数制御（穂肥時期を遅らせる）および稲体窒素栄養条件（穂肥回数）の違いが収量およ

び品質に及ぼす影響について検討した。その結果、温暖化に対応するためには籾数を抑えることが重要で、整粒歩合75%以上、収量530~550kg/10aを目標とした場合の「ヒノヒカリ」の目標籾数は28,000粒/m²程度と考えられた。

本年のような高温年では、穂肥1回目の時期を遅らせることで、籾数が抑えられ白未熟粒が減少する傾向が認められた。この場合、収量に影響しない施用時期は出穂前7日頃であった。

(3) 北部九州水田輪作地帯における省力低 コスト生産技術の体系化と現地実証 (22~23)

九州北部における水田作は古くからイネ・ムギ類の二毛作が広く行われてきたが、近年はダイズ作が急激に拡大している。しかし、ダイズは梅雨による播種遅延等のため作柄が不安定で、安定生産が強く望まれている。また、栽培面積の拡大や大規模化に伴い、播種、収穫期幅の拡大や作業の省力化が求められている。そこで、イネ直播栽培等と組み合わせたイネ・ムギ類・ダイズの省力低コスト生産技術体系を提示するため、大豆の多湿条件における安定播種技術や中耕培土技術および水稲乾田直播を現地実証した。その結果、アップカッターロータリーや部分浅耕一工程播種での大豆の出芽率は安定しており、収量は標準播に比べ優れた。大豆の中耕培土では、ディスク式中耕除草機の培土成功率が高く、株損傷率も低く中耕培土性能は優れた。また、点播による水稲乾田直播は生育量が確保され、収量も移植の3%減と良好であった。雑草の発生も除草剤を3回処理することで軽微であった。

3 作物の品種に関する研究 (56~継)

(1) 大豆種子の長期保存法 (56~継)

大豆種子は低温貯蔵が行われていないため、年次によっては種子が不足し計画的な大豆生産に支障をきたしている。水稲や麦類種子は約15℃の恒温倉庫で貯蔵されており、大豆もこの倉庫で貯蔵することが計画されている。1年間の貯蔵では発芽率や生育に問題ないことを明らかにしたが、年産の異なる種子を長期間貯蔵した場合の発芽能力や倉庫から出庫した後の貯蔵条件の影響については明らかではない。そこで、年産が異なる大豆の貯蔵条件と発芽能力について検討した。その結果、平均温度15℃以下、相対湿度60~70%で1年間貯蔵したフクユタカの種子は、年産が異なっても、出庫から9月までは発芽率が80%以上であり、種子として問題ないことが

明らかとなった。

4 雑草防除及び生育調節（48～継続）

(1) 稲麦用新除草剤及び生育調節剤の適用性

検定試験

ア 水稲用除草剤の適用性検定試験（48～継続）

新開発の水稲用除草剤10剤の除草効果と葉害を調査して本県における適用性を明らかにした。供試した初期・初中期一発処理剤9剤、中後期剤1剤、何れの除草剤も葉害は軽微で実用上の問題は認められなかった。

イ 麦用除草剤の適用性検定試験（48～継続）

新開発の麦用除草剤4剤の除草効果と葉害を調査して本県における適用性を明らかにした。供試した4剤とも高い除草効果が認められ、葉害も問題にならなかったことから実用化可能と判断された。

5 普通作物の作況試験（継続）

(1) 稲・麦・大豆作況試験

ア 水稲作況試験（42～継続）

移植後～7月3半旬までの平均気温は平年より1℃程度高く、日照時間は平年より20%少なく降水量が多かった。梅雨明け（7月17日頃）後は好天が続き、8月4半旬までの平均気温は平年より2～3℃程度高く、日照時間は平年より多く著しい高温で経過した。

7月14日時点の水稲の生育は、移植後の曇天による高温寡照の影響で、軟弱徒長気味であった。梅雨明け後は生育が回復し、草丈および茎数とも平年並であった。

出穂期は、夢つくしでは平年並、つくしろまんでは前6年比より3日早く、ヒノヒカリでは平年より2日早かった。8月5半旬以降の気温は平年より1～3℃程度高く経過した。日照時間は9月6半旬までは多照で推移し、その後は平年並～やや寡照で推移した。

出穂後20日間の平均気温は、夢つくしでは29.7℃と高く（前10年平均差+2.3℃）、元気つくしおよびつくしろまんでは29.3℃（前10年平均差+2.8℃）、ヒノヒカリでは27.9℃（前10年平均差+2.8℃）であった。出穂後20日間の積算日照時間は前10年平均より22～38%多かった。成熟期は、夢つくしでは平年より4日早く、つくしろまんでは前6年と比べて6日早く、ヒノヒカリでは2日早かった。

夢つくしでは、千粒重が平年よりやや軽かったため、収量は平年より4%少なかった。つくしろまんでは、前6年と比べてm²当たり籾数および登熟歩合がやや優れた

ため、収量は前6年と比べて4%多かった。ヒノヒカリの収量は平年並であった。

検査等級（相当）は、夢つくしは2等中で、つくしろまんは2等下、元気つくしは1等中～下で、ヒノヒカリは1等下～2等上であった。2等以下の格付理由は、乳白、心白粒および基部未熟粒の発生であり、登熟期の高温の影響によるものと考えられた。病害虫の被害はみられなかった。

本年は、梅雨による日照不足で初期の分けつが抑制されたものの、梅雨明け後は好天が続き記録的な高温多照年となった。このため、生育初期に茎数を十分確保できなかった熟期（極早生品種）やほ場では収量が低下した。また、登熟期の高温の影響により外観品質が著しく低下した。

イ 麦作況試験（49～継続）

播種期から1月中旬までの平均気温は平年並で、日照時間は平年より20%、降水量は平年より50%程度少なかった。1月20日現在の生育は、小麦では、草丈は平年より低く、茎数は平年並であった。大麦では、草丈は平年より高く、茎数は平年より少なかった。

1月下旬～2月下旬までの平均気温は平年より2.6℃高く、日照時間は15%程度多く、降水量は15%程度多かった。3月1日時点の麦の生育は、小麦、大麦とも草丈は平年より高く、茎数は平年より12～14%多かった。

3月以降は曇や雨の日が多く、3月上旬～4月上旬までの平均気温は平年より1.3℃高く、日照時間は平年より12%少なく、降水量は平年より28%多かった。3月19日時点の麦の生育は、小麦、大麦とも草丈は平年より高く、茎数は小麦では平年より22%多く、大麦では平年より14%多かった。出穂期は小麦は平年より3日早く、大麦は平年並であった。3月27日早朝の低温による凍霜害が発生したが被害は軽微であった。

出穂期以降、4月下旬までは降雨が多く低温寡照で推移し、5月以降は高温多照で推移した。成熟期は小麦は平年より6日遅く、大麦は平年より3日遅かった。病害の発生はみられなかった。

3～4月の多雨による影響で、小麦、大麦とも穂数および粒数は平年より少なく、千粒重は平年より軽く、収量は平年と比べて少なかった。

小麦では、穂数が平年より4%少なく、m²当たり全粒数が6%少なく、千粒重は9%軽かった。このため、収量は平年より14%少なかった。倒伏は微程度発生した。検査等級（相当）は1等であった。

大麦では、穂数が平年より10%少なく、m²当たり全粒数が12%少なく、千粒重は7%軽かった。このため、収

野菜育種部

〔野菜育種チーム〕

量は平年より23%少なかった。倒伏は無であった。ビール大麦としての検査等級(相当)は「ほうしゅん」が等外上、「しゅんれい」が2等であった。

ウ 大豆作況試験 (60～継続)

播種後、記録的な高温で経過した。降水量は7月3半旬に400mmを超える集中豪雨があったものの、7月4半旬から8月2半旬の降水量は著しく少なく乾燥状態が続いた。播種から9月5半旬までの平均気温は平年より2.4℃高く、日照時間は24%長く、降水量は41%多かった。

9月21日時点の生育は7月9日播で、平年に比べ開花期は2日遅く、主茎長および主茎節数は平年並であった。莢数は平年より23%多く、地上部乾物重は5%重かった。

7月26日播では、開花期は8月31日で、7月9日播に比べ主茎長は短く、主茎節数は少なかったが、莢数は14%多く、地上部乾物重は12%重かった。

9月6半旬以降も高温で経過し、平均気温は平年より約2℃高かった。日照時間は平年より少なく、降水量は10月1～4半旬が少なく、ほ場の乾燥状態が続いた。

7月9日播の成熟期は平年並であった。成熟期における主茎長および主茎節数は平年並で、分枝数は平年より24%少なかった。台風の襲来はなかったものの、9月23日および27日の大雨により倒伏が少～中程度発生した。登熟期の乾燥により稔実莢数は平年比93%、整粒数は平年比88%と少なく、百粒重は平年比96%と軽くなり、子実重は32.1kg/aと平年に比べて12%少なかった。検査等級は大粒および中粒ともに1等と優れた。

7月26日播の成熟期は、7月9日播に比べて4日遅く、主茎長は短く、主茎節数は少なく、百粒重は軽かったが、稔実莢数および整粒数は多く、子実重は31.5kg/aと7月9日播と同程度であった。検査等級は大粒および中粒ともに1等と優れた。

病害虫による被害は、葉焼病と紫斑病が少程度で、カメムシ類は少程度であった。

1 イチゴ新品種の育成

(1) イチゴ次世代「あまおう」の育成 (20～24) ア 気候温暖化に対応した新品種の育成

近年の気候の温暖化に対応して、炭疽病に対する抵抗性が強く、早生性、花房の連続性及び果実品質が優れる促成栽培用のイチゴ品種を育成するために以下の試験を実施した。

前年度の一次選抜で得られた237系統をランナーで増殖、育苗した後、ほ場で栽培し、早生性や果実形質を指標にして54系統を二次選抜した。なお、一次選抜により炭疽病抵抗性を示した系統は、ランナーで増殖させた苗による評価でも抵抗性を示し、前年度の炭疽病抵抗性選抜は有効であった。

また、前年度に上記同様に二次選抜した53系統をランナーで増殖、育苗した後、ほ場で普通ポット促成作型により栽培し、早生性、花房の連続性および果実形質を指標にして、さらに2系統を三次選抜した。

次年度以降、これら選抜系統のほ場選抜を継続する。

2 特産野菜新品種の育成

(1) ナス新品種の育成 (16～22)

ナスの促成栽培における省力的生産を図ることを目的に育成した単為結果性ナスF1系統「福岡なす10号」について場内試験および現地適応性試験を実施した。

「福岡なす10号」は栽培期間を通して安定した単為結果性を示し、着果促進処理を省略できた。一方、着果促進処理を行った「筑陽」と比較した場合、収穫果数は10%程度少なかったものの、果実重が重く、総収量は同程度であった。また、上物品率は10%程度高かった。一方、収穫果数を増加させる技術として、主枝3本仕立ての検討を行ったところ、慣行の主枝4本仕立てと比較して、収穫果数が2～8%増加した。

これらのことから、「福岡なす10号」を有望と判断し、品種登録に向けた準備を進める。

野菜栽培部

〔イチゴ栽培チーム〕

1 イチゴの高品質安定生産技術の 確立 (20～22)

(1) イチゴ「あまおう」出荷量平準化技術の確立 (20～22)

ア 定植後のかん水制限 (20～22)

「あまおう」において、腋果房の花芽分化を安定的に早進化するため、定植前に妻部を解放して天井ビニルを被覆したハウスを用いてかん水制限と寒冷紗被覆の影響を検討した。①かん水小量区(かん水開始pF値1.5)、かん水中量区(同 p F2.0)、かん水多量区(同 p F2.5)、②寒冷紗(遮光率60%)被覆の有・無を組み合わせた処理を定植後5日目から25日間実施し、慣行の栽培法(対照区)と比較した。

ビニル被覆後かん水制限や寒冷紗被覆区では対照区に比べて草高や葉柄長の低下など生育抑制が認められた。かん水制限区は、第一次腋果房の花芽分化は早くなり、頂果房と第一次腋果房の果房間葉数は少なかったが、出葉速度が遅くなり、第一次腋果房の開花日に差はみられなかった。寒冷紗被覆では第一次腋果房の花芽分化や開花日が早まり、かん水制限と寒冷紗被覆を行った区ではこれらの傾向が大きかった。1～2月の商品果収量は寒冷紗被覆区で多かったが、かん水制限だけの区は慣行と差はみられなかった。以上のことから、かん水量の制限は花芽分化を促進し、果房間葉数を減少させるが出葉速度が遅くなるため開花期の早進化効果は不安定になった。

イ 寒冷紗被覆、クラウン部加温の組み合わせ (20～22)

これまでに確立した腋果房の花芽分化早進化技術である定植後の寒冷紗被覆と冬季の生育促進技術であるクラウン部加温の組み合わせ効果について、土耕および高設栽培で検討した。また、より省力的で低コストな局部加温法を確立した。

「あまおう」の土耕栽培では、寒冷紗被覆によって第一次腋果房が、局部加温によって第二次、第三次腋果房が早進化し、1月以降の収量および総収量が増加した。また、寒冷紗被覆は、月別収量の変動を小さくし出荷量が平準化した。電熱線を2株おきにピンで固定する簡易局部加温法は、電熱線を1株ずつ結束する慣行法と比べ

て生育促進、増収効果が同等以上で電力消費量が89%、電熱線敷設にかかる作業時間が1/3となった。

高設栽培では、寒冷紗被覆は腋果房に対して生育促進効果がなかったが、月別収量の変動が小さくなり出荷量が平準化した。局部加温では、葉の伸長や展葉の促進、第二次～第三次腋果房間の葉数の減少が認められ、2月以降の収量が増加した。条間に1本電熱線を敷設して保温シートで被覆する簡易局部加温法は、慣行法と同等の生育促進や増収効果があり、資材費が44%、電気代が30%、合計のコストが38%削減できた。

(2) イチゴ「あまおう」の厳寒期多収どり作型の 開発 (22～24)

ア 厳寒期多収どりのための育苗技術の確立 (22～24)

厳寒期多収どり作型では、超密植に必要な多量な苗の育苗面積の削減と定植作業が省力となる育苗容器の小型化を目標としている。本年は、花芽分化が安定し頂果房が多収となる育苗容器、採苗時期、施肥量について検討した。

その結果、育苗容器が大きく、採苗時期が早く、施肥量が多いほどクラウン径が大きく、乾物重の重い苗となった。6cm や 7.5cm ポット苗でも 6 月中旬までに鉢上げすれば、クラウン径が約 10mm で着花数が約 10 花/株の苗が育成された。また、小型ポットでも 2～3 粒施肥すると、クラウン径が 10mm 以上で着花数が約 10 花/株の苗が育成された。7.5cm や 6cm ポットは 9cm ポットと比べ、低温暗黒処理前の葉柄長が長く、処理有効株率は低くなった。その要因と考えられる苗の充実度を示す徒長指数と処理有効株率に高い正の相関があった。

イ 厳寒期多収どりのための作型の開発 (22～24)

「あまおう」において、高単価であるが収量が少ない11月～2月に多収穫を実現するため、密植によりこの時期に集中して収穫する新作型を開発する。本試験では11月～2月に高品質で多収穫になる栽植様式を明らかにする。

試験区の構成は、栽植株数①12,300株(畝幅90cm、株間18cm)、②14,800株(畝幅90cm、株間15cm)、③18,500株(畝幅90cm、株間15cm)、④6,670株(対照 畝幅90cm、株間15cm)。耕種概要は6月28日に3号ポリポットに鉢受けし、低温暗黒処理(9/1～9/21)を行った苗を、9/1に2条内なりで定植した。黒ポリマルチを定植前に被覆し、無電照、暖房設定温度5℃で管理した。その結果、10a当たり定植株数が14,800株と18,500株で2月までの収量は各々2.18t、2.43tになり、慣行の1.8倍、

2倍の収量が得られた。1果重は慣行区で重く、特に12月の果実で重かった。12,300株～18,500株では差はみられなかった。果実品質は硬度、糖度、酸度に影響はなかったが密植により黄種の発生が多くなった。

ウ 厳寒期多収どり栽培技術の確立 (22～24)

密植栽培における頂果房多収のための基肥施用量を明らかにするとともに、電照や暖房コスト等を極力削減した省エネ型栽培技術を検討した。

「あまおう」の土耕栽培において9月21日にマルチ後定植で密植(株間15cm、14,800株/10a)する場合、とよのか専用肥料では10a当たり基肥窒素量10～20kgの範囲で収量に差がなかった。しかし、20kgでは生育が劣ることから10～15kgが適当と考えられた。無電照栽培をしても減収はしないが、平均果重は軽くなった。

〔野菜栽培チーム〕

1 野菜の高品質安定生産技術の確立 (22～23)

(1) トマト促成長期栽培における網入り果の発生抑制技術の確立 (22～23)

促成長期栽培における網入り果は春季(4月下旬から5月中旬)に多く発生し、小型の子室が多く、果皮が薄いため、果実硬度が低いことを平成21年に明らかにした。本年は、冬季における昼温の違いが春季の網入り果発生に及ぼす影響について、ファイトトロンおよび本圃で検討した。

その結果、網入り果は1月～2月に昼温を20℃としたファイトトロン内で生育させると、4月下旬～5月上旬に発生割合が高まるが、昼温を24℃以上とすることで軽減できることが明らかとなった。子室数が増加する等、果実の形態形成が正常に行われないことが要因であると推察された。促成長期栽培において、1月～2月のハウス内の昼温を加温することにより20℃以上で管理すると、4月下旬～5月中旬の網入り果の発生を軽減できることが明らかとなった。また、この処理により規格外果の発生割合が低下し、商品果収量が約3割増加した。

(2) プライミング処理による葉ネギの安定生産技術の確立 (22～23)

葉ネギ栽培における夏季の高温による発芽率の低下、生育不揃いの対策として、粉碎もみ殻を利用した種子プライミング処理技術を開発する。本年度はプライミング

処理の最適温度と処理日数の解明および本ぼでの栽培実証を行った。

その結果、ネギ種子「FDH」0.5g、粉碎もみ殻1.5g、蒸留水0.55mLの混合割合の場合、処理温度15℃では8日間、20℃では6、8日間、25℃では6日間行くと35℃の高温条件下での発芽促進効果が最も高くなることが明らかになった。また、本方法を用いて葉ネギ新品種「夏元気」を7月28日に播種した結果、発芽率の向上、発芽日数の短縮、初期生育の促進効果が認められ、増収することが明らかとなった。

(3) トマト袋培地栽培における安定生産技術の確立 (22～23)

トマト袋培地栽培システムは、導入コストが比較的安価なため普及が進んでいるが、ハウス内気温の影響を受けやすいため、最低気温を通常の土耕栽培より高めている。そこで厳寒期の草勢維持による安定生産を目的に、培地加温の有効性を検討した。

ハウス内最低温度を12℃とし、培地加温区として設定温度を15℃、18℃、21℃の3区で行った。また、対照区に培地加温無しの最低温度が15℃の区を設けた。

開花果房茎径は、各区とも有意な差はなかったが、培地加温15℃区は1月末に対照区と比べてやや細くなった。各果房平均開花日は8段果房以降、培地加温区は対照区に比べいずれも遅れたが、加温温度が高いほど早い傾向にあった。12～4月の商品果収量は対照区と比べて培地加温15、18℃区で減収したが、21℃区は同等であった。

2 野菜に対する新植物調節剤の利用 (継続)

(1) 野菜に対する新植物調節剤の効果 (継続)

イチゴおよび葉ネギの定植、播種前土壌くん蒸処理剤(トラベックサイド油剤)の効果判定した。

中ネギの生育期、雑草発生始期の畝間・株間処理剤(AKD-7164水和剤)の効果判定した。

葉ネギの播種前土壌くん蒸処理剤(TMZ-9911液剤)の効果判定した。

レタスの定植後、雑草発生前、全面土壌処理剤(アグロマックス水和剤)の効果判定した。

イチゴ「あまおう」におけるクロルピクリン錠剤のうね立て後6錠/m²処理の効果判定した。この処理により、定植後の初期生育は旺盛になるが各花房の花芽分化は遅れなかった。10a当たり基肥窒素量が5kg(標準量)～2.5kg(1/2量)の範囲でクロルピクリン処理により展葉

速度が速まり、第一次腋果房の収穫期が早くなることで2~3月の収量が増加し、果数の増加と商品果率の向上により4月までの総収量が28%増加した。

3 野菜における新しい農業生産資材の实用化 (継続)

(1) 野菜に対する新しい農業生産資材の効果 (継続)

ア 高温期の葉菜類における炭酸カルシウムの土壤表層施用効果 (22~23)

夏季高温期の地温上昇を抑制するため、炭酸カルシウムを主成分とした資材の効率的な土壤表層への局所施用方法を確立する。本年は、生育初期が高温となる葉菜類の秋出し栽培において、炭酸カルシウム資材による地温上昇抑制が生育、収量や土壤環境に及ぼす影響を検討した。

液剤及び粉剤の炭酸カルシウム処理は無処理と比べ、播種後7日間は土壤の白色度が1.3~1.5倍となり、日射の反射が増加することで35以上の高地温遭遇時間が短くなった。また、品目により差はあるが、発芽率が5~22%高く、収量も10~20%多くなった。また、粉剤の処理は液剤の処理に比べ、作業時間の短縮が可能で、同等の処理効果が期待できた。

イ 促成果菜類における除湿器の効果 (20~22)

促成ナスおよび促成トマト栽培における多湿性病害「灰色かび病」の発生抑制を目的として、顕熱交換除湿空調ユニット「ドライFAN」の除湿効果、灰色かび病発生果率および商品果収量に及ぼす影響について評価した。

その結果、3月上旬における夜間のハウス内相対湿度が対照区ハウスでは約95%で推移するのに対して、除湿区ハウスでは約85%まで低下した。ナス、トマトともに灰色かび病発生果率が除湿区ハウスでは対照区ハウスに比べて有意に低下した。このため、ナス、トマトともに除湿区ハウスで商品果率が高くなり、商品果収量も増加した。一方、本除湿器は顕熱交換式のため熱交換率が100%ではないので除湿区ハウスの方が暖房用燃料は対照区ハウスに比べて13%増加した。

ウ 高温期における被覆資材への炭酸カルシウム塗布処理法と施設内環境の変化 (22~23)

高温期のハウス内温度の上昇を抑制するため、被覆資材への炭酸カルシウム資材の効率的な塗布処理方法を確立し、資材の塗布処理が施設内環境に及ぼす影響につ

いて明らかにした。

試験資材は基準通りの塗布濃度で約25%の遮光率となった。試験資材の光線透過率は、塗布直後は対照資材より低くなったが、降雨による剥離が早く、約100mmの降水量で無処理と同等となった。試験資材の処理により施設内気温は無処理と比べ、約2℃低くなり、地温は約4℃低くなった。その結果、トマト及びコマツナの生育は無処理と比べ良好となり、乾物重が重くなった。また、試験資材の処理作業は非常に短時間で可能であり、簡易な遮光方法として利用可能であると考えられた。

4 野菜新品種適応性

(継続)

(1) 新品種の地域適応性

(継続)

全日本野菜品種審査会においてコマツナ(雨よけ夏どり)21品種およびキャベツ(冬出し)22品種を評価した。

その結果、コマツナでは「C0-024」、「TTU-471」、「TRI-K802」、「試交832」が、キャベツでは「KA793」、「冬藍」、「N-258」、「冬系513」が高い評価となった。

花き部

1 オリジナル品種の育成と栽培技術の確立 (15～25)

(1) 夏秋白輪ギク新品種の育成 (18～25)

高温期に奇形花の発生が少ない夏秋ギク品種を育成することを目的とし、夏秋ギクの交配実生から高温に遭遇する作型（9月出し栽培）において、奇形、側枝が少なく、開花の早い白色5系統を選抜した。同じく、9月出し栽培で前年に実生から選抜した7系統を挿し芽で栽培し、3系統を選抜した。

(2) トルコギキョウ新品種の育成 (15～24)

ア 秋冬出し栽培に適した新品種の育成 (15～24)

本県の気象条件に適し、花色、花型など優れた形質を有するオリジナル新品種を育成する。本年度は、白色母系統間の交配組み合わせで得られた17系統の開花検定を実施したところ、11のF₁雑種系統が白色・八重咲きの形質を発現した。また、白色母系統間で交雑を行い、F₁雑種系統125系統を獲得した。

イ 作型適応性の検討と栽培技術の確立

(16～24)

上記11系統について、品種特性の把握と作型適応性を23年度に検討する。

(3) トルコギキョウ低コスト冬春出し栽培技術の確立 (19～22)

ア 開花促進による栽培期間短縮技術の確立 (19～22)

本県では冬春出しの出荷量が少ないことから、周年を通した安定出荷が求められている。そこで、開花を促進し、栽培期間を短縮するとともに、低コストな冬春出し栽培技術を確立する。今年度は、光源にLEDを用いて低コストな開花促進技術を検討した。

青色LEDは、開花促進効果が認められたが、収穫日の促進までには到らず、一次分枝数の減少など品質低下が見られたため、トルコギキョウには活用できないと思われた。次に、現在冬春出しで使われている白熱灯よりも開花促進可能なLED光源を検討した。これまでの知見から、同じ光量であれば、遠赤色の光量が多いほど開花が促進することがわかっていたが、遠赤色の光量を白熱灯の10倍に高めたものは、収穫は早くなったものの分枝数

の低下が生じ、白熱灯より品質面で劣った。白熱灯よりも開花を促進し、かつ白熱灯と同等の切り花品質を確保するには、むしろ全体の光量を2倍にしたものが良かった。しかし、現在販売されているLED電球でそのような光質を再現することは困難であることから、白熱灯と代替可能なLED電球の探索を行った。その結果、DPDL-F R-9wおよびDPDL-R-FR-3/6-9w（鍋清（株）製）が白熱灯よりも電気代が1/7程度と低コストで栽培でき、白熱灯と同等の生育及び品質を確保できた。

(4) 種間交雑等によるアジサイの品種育成

(16～22)

21年度に実生選抜した青色・八重咲き10系統の中より、装飾花数がガク咲き系統より3倍以上多く、半手まり咲きの1系統を有望系統として選抜した。本系統は、開花初期の花色は、装飾花の周辺部が青色・中心部が白色の複色咲きで、開花盛期は中心部を含め全体が青色に着色し、以後緑色に変化する。

本県育成の「筑紫ルビー」および「筑紫の舞」の小鉢（4号鉢）栽培技術を確立するため、促成期のわい化剤処理方法を検討した。ダミノジット8,000ppmとパクロブトラゾール200ppmの1回処理では、樹高のわい化は同程度であったが、花序はパクロブトラゾール処理区のほうが小さくなった。

2 キク「雪姫」の高品質安定生産技術の確立 (22～24)

(1) ウイロイドフリー苗の育成技術の確立

(22～24)

RT-RANP法によりCSVdを、DAS-ELISA法によりTSWVを検定し、「雪姫」の無病苗を3,000本、許諾先に配布した。

(2) 栽培管理技術の確立

(22～24)

「雪姫」の斑点症等の発生要因の解明については、土壌酸性度、土壌マンガン濃度、長日処理期間中の温度および光条件を調査し、斑点症等の発生にこれらは直接的には影響しないことを明らかにした。

また、「雪姫」の草丈不足の防止技術確立のため、莖伸長に水分管理と電照管理が影響するかを調査し、これらが草丈に影響することを明らかにした。

3 高能率生産システムと環境に配慮した生産技術の開発 (18~22)

(1) 洋ラン類の高能率生産システムの開発 (18~22)

閉鎖型苗生産装置は、環境を制御した密閉空間で人工光によって植物を栽培することで、外部の気象条件等に変動されず高品質・安定生産を可能とする装置である。太陽光の開放型ハウスとは異なり、閉鎖型では明期/暗期を自由に設定することが可能であるが、CAM植物で暗期に炭酸ガスを吸収する洋ランにおいては、最適な明期/暗期の長さが解明されていない。そこで、20℃、炭酸ガス1,000ppm条件下で、明時/暗期を16/16、12/12および8/8(h)で処理を行った結果、12/12(h)の苗の生育が早く、栄養成長から生殖成長への転換も早かった。

4 花きの植物生育調節剤等の利用

(1) 生育調節剤、除草剤実用化 (継続)

除草剤NC-622 (グリサホートカリウム塩48%)について、畝間茎葉処理によるキクへの適用性の検討を行った。その結果、いずれの区も除草効果が高かった。

除草剤NC-622 (グリサホートカリウム塩48%)について、畝間茎葉処理によるキクへの薬害を調査した。その結果、通常量、倍量区ともに薬害の発生は見られず、また、切り花品質・収量への影響も認められなかった。

植物生育調節剤NGR-081水溶剤(イソプロチオン0.01%)について、切り花カーネーション「紫香の舞」における発根促進効果を調査した。その結果、処理による発根促進効果は不明瞭であった。

植物生育調節剤NGR-081水溶剤(イソプロチオン0.01%)について、切り花キク「雪姫」における発根促進効果を調査した。その結果、処理による発根促進効果は不明瞭であった。

(2) 出願品種特性調査 (継続)

種苗登録申請中のストック8品種、対照品種16品種および標準品種3品種を栽培し、品種特性を調査した。その結果、8品種のいずれも対照・標準品種と明らかな区別性が認められた。

1 ブランド果樹新品種の育成と選定 (16~25)

(1) 温暖多雨地帯における施設ブドウ育種 ア 良食味・耐病性の大粒品種育成 (18~22)

自然状態で種なしで皮ごと食べられ、省力栽培できる紫赤色ブドウ「秋鈴」を育成した。また、短梢せん定栽培下で花穂着生・結実が良く、ジベレリン処理によって種なし化でき、「巨峰」より収穫期が早く、灰色かび病・うどんこ病抵抗性が「巨峰」並みの「福岡15号」を育成した。さらに、高温環境下でも「巨峰」より安定着色する大粒・良食味の黒色ブドウ3系統と赤色ブドウ1系統を予備選抜した。指定試験による施設ブドウ育種事業は平成22年度を以て終了することとなった。

(2) 種なし完全甘ガキ品種の育成 (19~23)

「福果2号」の結果母枝当たり着蓄数は8.0で、「富有」より少なかったが、「太秋」より多かった。また、「太秋」と比較して下位節まで着蓄が見られた。「福果2号」の開花盛期は5月26日で、早期落果は満開8日後頃から始まった。10月25日~11月10日に収穫した「福果2号」の果重は339~369gで、果実糖度は16.3~18.6%であった。赤道部の果皮色は4.6~5.3であった。一部、軽微なヘタスキと果頂裂果がみられた。日持ち性は18.5日で「太秋」と同等であった。カキ「秋王」として品種登録出願手続きを行い、出願公表となった。

(3) 着色が良く糖度が高い極早生温州の品種開発 (16~25)

「原口早生」等の珠心胚実生から成熟が早いことで選抜した「福果1号」は、着色の進行為「日南1号」同等に早く、9月下旬で糖度は10度程度、クエン酸含量は1.0g/100ml以下となった。高接ぎ樹においても同様の品質であることが確認された。

2 早期開花結実技術を活用した果樹オリジナル品種の開発 (21~25)

(1) 早生赤ナシ新品種の育成 (21~25)

7組み合わせの交雑により得られた約2,500個体の実生について、DNAマーカー等を利用した早期選抜を実施した。選抜された実生から生育が良好な750個体を本圃に定植した。

ナシ種子の発芽特性を検討したところ、1ヶ月以内の低温処理では発芽率が低く発芽後の生育も劣ること、低温未処理の種子に対しては播種床として脱脂綿を用いてBA浸漬処理を行うことで発芽率、生存率が向上することを明らかにした。

3 高品質果実の安定生産技術の開発 (20~24)

(1) 高温環境における高品質温州ミカンの連年安定生産技術の確立 (20~24)

「日南1号」は、日焼け果の発生は樹冠南側の上部での発生が多かった。この部位を中心に摘果する表層摘果によって、収量や果実品質に影響を及ぼすことなく、日焼け果の発生を軽減できることが明らかとなった。

4 省力・軽作業化のための生産技術の開発 (21~25)

(1) カキの樹体ジョイントによる省力・高品質安定生産技術の開発 (21~25)

高さ1.8mの平棚仕立てにおける早期樹体ジョイントには、苗を慣行よりも長く切り返して植え付け、一本主枝に仕立てるのがよいと考えられた。

高さ60cmの低樹高棚仕立てにおいて、株間1m間隔に長さ2.2m程度の苗を定植することで定植時に樹体ジョイントでき、骨格枝を完成することができた。1m間隔で定植した樹体ジョイント樹では新梢の生育が良好となるが、1.5m間隔で定植したジョイント未実施樹では定植1年目の主枝先端枝の生育量が小さいため、主枝先端枝を利用した定植1年後の樹体ジョイントは困難であると考えられた。

5 地球温暖化が農業分野に与える影響評価と適応技術の開発 (22~26)

(1) 果樹、野菜等の園芸作物および茶における影響評価と適応技術の開発

ア ブドウ着色に対する温暖化の影響評価と着色改善技術の開発 (22~26)

7月8日から8月6日の温度・遮光処理の結果、無遮光条件では処理終了時に高温区で果皮色および果皮アントシアニン含量が少ない傾向にあった。遮光処理によって全ての温度区の果皮色および果皮全糖含量が劣った。日積算光量子量1molの減少による果皮色低下量は昼温上

昇0.2℃分に相当し、果皮アントシアニン含量の減少量では昼温上昇0.7~0.9℃分に相当するものと推察された。

寒冷紗および遮熱資材による着色期の被覆処理では、日積算光量子量は減少するものの、果実周辺の温度環境への影響は小さく、着色をはじめとする果実品質への影響は認められなかった。

6 優良品種・系統の適応性検定 (53~継)

(1) ブドウ系統適応性検定 (11~22)

ブドウ第12回系統適応性検定試験では福岡県農業総合試験場育成2系統、果樹研究所ブドウ・カキ研究部育成3系統を定植し、樹体の育成を図った。本年度は開花・結実しないため、調査様式1に基づいて発芽期、葉、巻きづる等の形態的特性の調査を行った。

(2) カキ、ナシ等品種・系統適応性

ア カキ農林水産省育成系統適応性 (第7回) (20~継)

カキ第7回系統適応性検定試験の供試4系統(いずれも高接ぎ3年生)について特性調査を行った。

「安芸津22号」は熟期が「伊豆」に近い時期で、大果でへたすきが少ないなど外観品質は良好であったが、中間台によっては接ぎ木不親和と思われる早期落葉が多発し、やや糖度が低かった。「安芸津23号」は熟期が「松本早生富有」よりやや遅い系統であり、開花数はやや少なかったものの、今年度は最も食味良好であった。「安芸津24号」は熟期が「松本早生富有」よりやや早く、大果で食味は良好であるが、8月上中旬に後期落果が多発し、雲形状汚損が散見された。「安芸津25号」は熟期が「松本早生富有」とほぼ同時期であり、肉質が緻密で食味が良好であるが、樹勢がやや弱い上に条紋や破線状汚損が目立った。以上4系統とも検定を継続することとなった。

イ ナシ農林水産省育成系統適応性 (第8回) および品種適応性 (20~継)

ナシ第8回系統適応性検定試験の供試5系統(いずれも4年生)について特性調査を行った。

「筑波54号」は、熟期が「幸水」より2週間程度早く、肉質は良いものの樹勢が弱い上に日持ち性に難があった。自家摘果性を有する「筑波55号」は、熟期が「幸水」よりやや遅いが、大果で肉質や食味は良好であり、14日程度の日持ち性があった。黒星病に真性抵抗性を有す

る「筑波56号」は、熟期が「豊水」よりやや早く、香気があり糖度は高いが、条溝が目立ち果形不良であった。自家和合性を有する「筑波57号」は、熟期がほぼ「豊水」並みであるが、樹勢が強すぎる上に食味がやや淡泊であった。「筑波58号」は、熟期が「新高」より若干早く、有袋栽培の場合でも果面にさびが発生しやすいものの糖度が14度を超え肉質や食味は良好であった。以上5系統とも検定を継続することとなった。

本年は開花後の低温によりどの品種も平年に比べて果実肥大が不良であった。早生の「なつしずく」は「幸水」より熟期が早い糖度が低かった。中晩生品種で有望な「あきづき」、「王秋」については例年発生するコルク状果肉障害がほとんど見られず食味は良好であった。

ウ スモモ品種適応性 (11～継)

受粉用品種では、「ハリウッド」が「バイオチェリー」と比較し、花粉採取量が多く、花粉発芽率が高かった。「貴陽」において、ジベレリン50～200ppmを満開期と満開25日後の2回散布することにより、結実率は大きく高まった。果実肥大は、人工受粉や自然受粉に比べやや劣る傾向がみられるが、果実品質は同等であり、10a当たり収量は増加すると考えられた。

エ キウイフルーツ品種適応性 (53～継)

福岡県内で主に栽培されている「ヘイワード」および「レインボーレッド」の特性について調査した。

A.chinensis種の「レインボーレッド」は、「ヘイワード」より開花期が21日、収穫期が約1ヶ月早い早生の系統である。果実重が80～100g程度と「ヘイワード」より小さいが、追熟後の糖度は19度前後で「ヘイワード」よりも3～4度高く、クエン酸含量は「ヘイワード」並みであった。

「レインボーレッド」では、3月～7月中旬の雨よけビニル被覆により、開花期が2日程度前進化し、開花不良が軽減される傾向にあった。また、雨よけビニル被覆によって晩霜害が著しく軽減された。

(3) カンキツ品種・系統適応性 (55～継)

カンキツ第9、10回系統適応性検定試験の7系統について樹の生育と収量、果実品質を調査した。「興津58号」は1月収穫の良食味系統で、露地栽培では着色や耐寒性に課題があった。「興津60号」は2月収穫の系統で「興津58号」より着色やはく皮性が優れる良食味系統だが、ややクエン酸含量が高く成熟期が遅かった。「口之

津50号」は年内成熟系統で、果皮色が赤橙色で外観が優れた。

県内で導入が進んでいる「北原早生」は「日南1号」比べ着色が遅いものの、10月中旬成熟で「上野早生」と同程度の品質であった。

「カラタチ」、「ヒリュウ」の2倍体、4倍体（果樹苗木分場育成）を台木とした「福岡3号」の生育は、同一台木間では4倍体が2倍体に比べて樹冠が小さく、1樹当たり収量も少なかった。果実品質は倍数性の違いによる差は明らかでなかった。

7 植物生育調節剤および除草剤の利用 (45～継)

(1) 植物生育調節剤および除草剤の利用技術の確立 (45～継)

ア ニホンナシ「幸水」果実に対する1-メチルシクロプロペン (1-MCP) くん蒸剤の鮮度保持効果 (22)

収穫当日の「幸水」果実に対し1-MCPくん蒸剤を1,000ppbの濃度で15時間暴露させ、貯蔵中の果実品質を経時的に調査した。1-MCP処理果実は無処理果実よりも果実品質が維持されたことから1-MCPくん蒸剤は鮮度保持に有効であった。

イ カキ「早秋」に対する1-メチルシクロプロペン (AF-3) くん蒸剤の貯蔵性向上効果 (22)

「早秋」に1-MCP(AF-3)を処理することで、収穫7～12日後のへた部の着色の進行が遅くなった。また、果肉硬度の低下が抑制され、収穫14日後の果肉硬度が無処理区と比べて高かった。収穫7日後から果実軟化が見られ始めたが、収穫12日後以降、AF-3処理区で果実軟化率が低く推移し、AF-3の暴露処理によるカキ「早秋」に対する日持ち性向上効果が認められた。

ウ カンキツに対するAKD-8147水溶剤の摘果効果 (22)

中晩柑「天草」、「清見」、「伊予柑」、「せとか」、「はるみ」に対し、満開後15日にAKD-8147水溶剤(ターム水溶剤)1,000倍を散布して果実の落果効果について検討を行った。いずれの品種においても、90%以上の落果率であり摘果効果が認められた。

家畜部

〔工学・養豚チーム〕

1 牛の高度胚移植技術による効率的胚生産技術および受胎率向上技術の確立 (19～22)

(1) 牛卵子の保存および体外受精胚の低コスト生産 (20～22)

高能力牛からの経膈採卵は一回で採取される卵子数は少ないため、採取の度に高価な凍結精液を使用して体外受精しなければならない。そこで、複数回にわたって採取した卵子を保存蓄積し一度の体外受精で胚を効率的に生産する技術について検討した。

その結果、FV法のナイロン糸を支持体として2ステップで前平衡後にガラス化保存し、集合して体外受精することにより、省力的に体外受精胚が生産できることが判明した。

しかし、胚発生率は新鮮卵子と比べて低いため、向上技術について検討が必要と思われた。

(2) 胚操作技術を活用した牛胚生産技術および受胎率向上技術 (20～22)

胚の透明帯の一部を切開するアシストハッチング(AH)が、凍結・融解後の生存性および移植後の受胎率に及ぼす影響について検討した。

その結果、性別バイオブシー用金属刃を使用することにより、牛胚の透明帯を簡易に切開でき、牛体外受精胚をAH後に凍結保存することにより、融解後の生存率が向上することが判明した。

また、凍結保存AH胚を2胚移植すると双子率が多く、1回移植あたりの産子数が増える傾向にあった。

(3) P糖タンパク質を増強した受胎性の高い牛体外受精胚の作出技術 (22～24)

牛体外受精胚の生体防御関係膜タンパク質(P糖タンパク質)を効率的に増強して胚発生率や耐凍性等を評価することにより、耐凍性および受胎率を向上させる体外受精胚作出技術について検討した。

21年度までに、牛体外受精胚の発生培地へリファンピンを添加すると、胚発生率は変わらないが、胚で発現するP糖タンパク質の量が増加し、作出した胚盤胞の凍結融解後の生存性が向上することが判明した。

22年度には、発生培地にリファンピンとフォルスコリ

ンを同時に添加することにより、胚で発現するP糖タンパク質の量がさらに増加し、作出した胚盤胞の凍結融解後の生存性が向上することが判明した。

2 高度繁殖技術を用いた産子生産技術の確立 (21～24)

(1) 子宮内免疫反応制御による人工授精技術の開発 (21～24)

豚人工授精における注入精子数の削減を目的として、子宮内の免疫反応を制御して人工授精する手法について検討した。

検討の結果、希釈液内にカフェインを10mM添加した場合に無添加に比べ、凍結融解精子の運動性が向上した。

また、フローサイトメトリーにより解析した結果、生存率および先体反応率に差は認められなかった。

〔乳牛チーム〕

1 暖地における飼料イネ等を基軸とした発酵TMRの生産・利用技術の開発 (18～22)

(1) 麦焼酎粕濃縮液を用いた発酵TMRの給与技術の開発と実証 (18～22)

ア 泌乳前中期における発酵TMRの給与実証、体重及び乳量・乳成分率の経時変化、繁殖成績への影響 (20～22)

泌乳前期牛を対象として、飼料イネを粗飼料の主体とし、麦焼酎粕濃縮液を乾物当たり10%程度混合した発酵TMRの給与試験を行った。

麦焼酎粕濃縮液を混合した発酵TMRの嗜好性は良好で、体重、乳量・乳成分率及び分娩後の初回発情に問題はなく、飼料原料費を乾物1kg当たり6.4円低減させることができた。

2 新技術を用いた乳房炎の精密診断・治療技術の開発 (18～23)

(1) 乳房炎の分娩前診断および治療技術の確立 (21～23)

乳牛の乳房炎は分娩後の発症が多いことから、分娩前に乳房炎を診断・治療することで生乳出荷のない期間に治癒させることが望ましい。近年は乳汁の粘度とCMT所見で乳房炎診断した事例が報告されているが、酪農家

や関係者の多くは分娩前に乳汁を採取することが無い
ため、正常な乳汁の所見すら不明で乳房炎を見分けるこ
とが困難なのが現状である。今後、酪農家自身による予
防的診断法として普及させるには、乳汁の外見から正常
と異常を段階的に分類できるマニュアルが必要である。

そこで、分娩前7～10日前に採取した乳汁の外見を体
系的に分類することによる乳房炎診断技術を開発する。

現在、分娩前7～10日の乳汁を採取し、その色と粘り
具合およびCMT凝集反応を判定することにより乳房炎
が診断できることが明らかとなった。色が血乳、白～淡
黄色で粘りが水状、初乳状の乳汁は乳房炎の疑いが強い
のでCMTによる検査が必要である。

3 キノコ廃菌床を活用した泌乳牛用 発酵TMR給与技術の開発 (22～24)

(1) 発酵TMRに混合するキノコ廃菌床の混合 割合が乳量・乳成分に及ぼす影響 (22～24)

酪農経営において生産コストの大半を占める飼料価
格の低減を目的として、県内で大量に発生しているキノ
コの菌床を有効利用した発酵TMR飼料について検討し
た。

コーンコブを主体としたエノキタケ廃菌床を、乾物で
10%混合した発酵TMRを用いホルスタイン種泌乳牛
へ給与試験を実施した。エノキタケ廃菌床発酵TMRの
給与は、廃菌床を含まないTMR給与(対照区)と比べ
て乳量が29kg程度で同程度であり乳成分率も同様であ
ったものの、乾物摂取量が23kg/日と対照区の26kg/日と
比べやや低かった。

しかしながら、TDNは両区とも充足しており、エノ
キタケ廃菌床を乾物で10%程度混合した発酵TMR給与
は有効であると推測された。

4 飼料米品種の選定と省力多収生産 技術の開発 (20～22)

(1) 西南暖地向け飼料米品種を用いた飼料米の 乳牛への給与技術確立 (20～22)

ア 飼料米の乳牛への給与技術開発 (20～22)

輸入穀物代替え飼料として飼料米を乳牛へTMR給与
した場合の問題点を明らかにするとともに、乳生産や乳
質への影響、繁殖成績に及ぼす影響等を調査した。

蒸気加熱圧ぺん米と玄米を給与飼料の0%、10%、20%
混合したTMR飼料を泌乳中後期牛に給与し、乳量・乳
成分への影響を検討した。

その結果、蒸気加熱圧ぺん米では乳タンパク質の低下
が見られ、玄米では、MUNの増加が見られた。これら
のことから飼料米の加工形態によってはタンパク質の
不足やエネルギー不足が懸念された。しかし、泌乳中後
期牛では飼料米混合給与による、乳量への影響はほとん
どなかった。

〔肉用牛チーム〕

1 交雑種牛肥育期の粗飼料増給によ る高品質牛肉安定生産技術 (19～22)

現状の交雑種肥育においては、肥育期の濃厚飼料多給
により代謝障害等が発生して生産効率や枝肉品質に影
響を及ぼしている。

そこで、強化哺育した交雑種去勢肥育素牛について、
育成期の栄養水準および肥育期の粗飼料給与量が、発育
および枝肉成績に及ぼす影響について検討した。

その結果、育成期の増体量が1.15kg/日となるように
飼料給与量を制限することにより、肥育期の増体量およ
び枝肉成績が向上した。また、肥育期に粗飼料を増給す
ることにより、肥育後期まで飼料摂取量が低下しないこ
とが判明した。

2 乳用種去勢肥育牛の低コスト 超早期出荷技術 (21～24)

乳用種去勢牛の肥育経営は近年の輸入穀物の価格変動、
枝肉価格の低迷により非常に厳しくなっており、肥育期
間短縮等、生産コストの低減が求められている。

そこで、哺育期に初期発育性を向上させる強化哺育を
実施することが、肥育期の増体、枝肉成績に及ぼす影響
を明らかにすることにより、超早期に出荷できる技術に
ついて検討した。21年度に乳用種雄子牛12頭を導入し、
22年度には育成期および肥育期の調査を実施した。

また、23年度以降の地域飼料資源活用技術の参考とす
るため、県内肥育農家における発酵飼料調製・給与状況
を調査した。

3 強化哺育・粗飼料多給型育成による 高能力肥育素牛生産技術 (22～25)

県内で生産された黒毛和種子牛を用いて、強化哺育後
に粗飼料多給による育成を実施することにより、体格お
よび肥育成績が良好な肥育素牛を生産する技術につい

て検討した。

22年度には、県内から6頭の黒毛和種子牛を導入して哺育・育成期の試験を実施した。

4 黒毛和種体内受精胚の生産 (19～継続)

黒毛和種雌牛に過剰排卵処理・人工授精を実施した後、子宮頸管經由子宮灌流法により体内受精胚を採取した。22年度には20回の胚採取を実施した結果、総採取数211個、正常胚61個を生産した。

採取した胚は、雌雄産み分け試験等の処理を実施した後に凍結保存し、県内農家における移植試験に供試した。

【家きんチーム】

1 地域特産鶏の効率的飼養管理技術 (6～23)

(1) 特産肉用鶏における飼料要求率の改善 (21～23)

輸入穀物の高騰傾向による特産肉用鶏のコスト上昇対策として、Early feeding（孵化直後の早期餌付け）による幼雛の代謝活性化効果と、照明時間および給餌時間の制限を組み合わせることによって、はかた一番どり{(BP×WR)×WR}の飼料要求率改善を図る。

22年度夏期から2回にわたり、①孵化ピーク後20時間対36時間、②孵化ピーク後15時間対32時間の2設定で、Early feedingの発育改善効果を検討した。

しかし、7週齢体重におけるEarly feeding区の向上効果は2%以内とごく小さく、また3週齢までの飼料要求率に改善は認められなかった。

この結果からEarly feedingは実施コストに見合う効果がないと考えられたため、以降は給餌時間制限と夜間消灯の効果を検討する。

2 地域特産鶏の作出 (19～22)

(1) 新しい県産地どりの作出 (19～22)

従来型「はかた地どり」（シャモ×WRチャンキー系）の喧噪性と胸肉の過剰な固さを改善し、より生産・販売力の高いブランドとしてモデルチェンジを図るため、雄種鶏に2系統、雌種鶏に5系統を用いて新交雑種の試作と検討を行う。

22年度初頭までに9交雑種による性能比較の結果、雄

にシャモ×BP、雌にWRチャンキーを交配した交雑種は、喧噪による傷付きが従来型の1/4に減少し、生産指数も良好であった。また、むね肉剪断力も従来型より低く、イノシン酸量は有意に9%向上した。

これらの結果から（シャモ×BP）×WRチャンキーを新型「はかた地どり」に決定した。22年8月に知事発表し、9月から生産販売の切り換えを行った。

さらに今後の新「はかた地どり」の販売力強化策として、仕上げ期の飼料用米給与と、出荷直前の高CP高ME飼料給与による食味の向上効果を検討した。飼料用米給与では食味評価の変化は認められなかったが、出荷前1週間にCP20%ME3,280kcal/kg飼料を給与すると、肉およびスープ中のグルタミン酸量が21～23%増加し、食味評点も上昇し、うま味強化策として有効であった。

3 飼料用米を基軸とする特産肉用鶏生産技術の確立 (22～26)

(1) 特産肉用鶏における効率的飼料用米給与技術の確立 (22～26)

世界的なトウモロコシの急騰による配合飼料価格の上昇に対して、トウモロコシに替えて国産の飼料用米を主原料とした飼料によって県特産肉用鶏を効率的に育成する技術を確立する。

22年度は、秋冬の適温期に「はかた一番どり」{(BP×WR)×WR}が全粒の玄米およびモミ米を摂取可能なステージの確定を行った。全粒玄米およびモミ米を30%配合し、CP・ME・必須アミノ酸が通常トウモロコシ飼料と同等となる飼料を「はかた一番どり」の4週齢および6週齢から給与した。

鶏の発育は、玄米・モミ米の違いや給与開始時期の違いにかかわらず良好であり、いずれの飼料および給与開始時期においても、9週齢出荷時には通常飼料区と全く同等の成績であった。

この結果から、適温期の「はかた一番どり」では、4週以降の全期間で全粒の飼料米を問題なく摂取し消化できることが判明した。

4 原原種・原種鶏の維持生産 (5～継)

(1) 横斑プリマスロックの改良・維持 (5～継)

「はかた一番どり」原原種鶏として利用する横斑プリマスロック（BP）系統の改良と維持のため、体重増加方向への選抜を連年実施している。

22年度群として21年12月24日および22年1月7日に雄

畜産環境部

〔環境衛生チーム〕

88羽、雌325羽を餌付けし、90、120日齢時の個体別体重を測定した。120日齢体重の上位個体から雄48羽、雌136羽を選抜した。22年度群の120日齢時平均体重は雄3.75kg、雌3.06kgとなり、20年度と比べて雄は90g低下したが、雌は250gの向上となった。

(2) シャモの維持・生産 (5～継)

県産ブランド鶏肉として販売中の「はかた地どり」の原々種鶏に用いるシャモ系統について、産肉能力の維持を図っている。22年度群は22年1月20日および22年4月7日に雄241羽、雌225羽を餌付けし、120日齢体重が上位の個体から雄60羽、雌141羽を選抜した。120日齢時平均体重は、雄3.45kg、雌2.38kgとなり、雌雄とも21年度とほぼ同様であった。

1 栄養制御と微生物資材による低コスト悪臭防止技術の確立 (19～25)

(1) 低級脂肪酸低減微生物の選抜と資材化 (22～25)

養豚で問題となる悪臭物質のうち低級脂肪酸は拡散しにくく、低濃度でも強い臭気強度を示す特徴を持ち、豚舎内で顕著に発生する物質であるが、その発生を抑制できる資材は流通していない。近年、工業技術センターが分離し、(株)九州メディカルが商品化した菌株B1144株は低級脂肪酸の抑制効果があることが明らかとなった。そこで豚房内に本菌株を散布した結果、夏季において無散布区と比較して約80%低減した。また、日増体重も多くなった。

2 未利用資源を活用した発酵床豚舎管理技術の開発 (21～23)

(1) 発酵床豚舎に適した木質系未利用資源調製技術の確立 (21～22)

豚発酵床の敷料として街路樹剪定残さは豚発酵床資材として活用できるが、通気性のある堆肥バッグに30日程度保管することで、水分がオガクズ並みの30%以下に低水分化し、飼養中に発生する泥濘化を防止することができた。また、病原性微生物も検出されなかった。使用後の敷料を12週間堆肥化することで有機物が減少し、農地への還元が可能な資材となった。

(2) 資材混合による発酵床豚舎に臭気および抗酸菌症減少効果 (21～23)

飼養経過とともに敷料からのアンモニアガス濃度が上昇するが、オガクズを使用する場合と同等であった。また、抗酸菌は開始時の敷料等からは検出されなかったが、試験終了時の杉樹皮、心材チップの敷料および一部の豚から分離され、と畜検査において消化器一部廃棄となった。

3 地域内未利用資源を原料とする 発酵肥料の開発 (21~23)

(1) 未利用資源を混合した発酵肥料の調製 (21~23)

肥料高騰により施肥量の節減や化学肥料に代わる資材、資源の利用の必要性が高まっている。そこで、旅館や飲食店から排出される食品残さを主原料とした発酵肥料の肥料特性と野菜に対する施用法を明らかにする。

発酵肥料原料として食品残さ、米ぬか、鶏ふんを配合した場合、鶏ふん配合を多くすると窒素、リン酸、加里が増加する。発酵期間は肥料成分に大きく影響しないため、5週間以内でよい。

〔飼料チーム〕

1 飼料作物の優良品種選定 (継続)

(1) 飼料作物の奨励品種選定 (継続)

ア ソルガムの奨励品種選定 (継続)

平成22年5月20日に、市販6品種を播種した。

栽培期間中の気象概要は、6月から10月まで記録的な猛暑であった。降水量は集中豪雨以外では平年値を下回る期間が多かった。また、台風による強風は無かった。

奨励品種である雪印ハイブリッドソルゴーと比較した場合、タキイのハイブリッドソルゴーは、乾物収量がやや高く、ブラウントウミツは同様の乾物収量であった。また、TDNソルゴーはやや乾物収量が低かった。

子実型の2品種は、稈長は低いものの、ある程度の乾物収量が得られ、耐倒伏性が高いと考えられた。2品種を比較すると、メートルソルゴーが有望と考えられた。

麦角病の被害は甚大で、一番草では全ての品種で、二番草では子実型の2品種を除き罹病した。

イ トウモロコシの奨励品種選定 (継続)

平成22年4月8日に、市販7品種を播種した。

平均稈長は211cm(対前年比86%)、着雌穂高は88~105cmであった。

早生品種では、SH4681の乾物総重は、奨励品種であるKD640と同等であった。

中生品種では、ZX7956が最も多収であり、奨励品種であるゆめそだちの乾物総重と比べ約1割多かった。KD731もゆめそだちより多収であったが、有効雌穂割合が87.5%と低く、乾物雌穂重がゆめそだちと比べ約1割少なかった。

また、平成22年8月12日に、2期作用の市販3品種を播種した。

乾物茎葉重は奨励品種である30D44が最も高く、乾

物雌穂重はKD640が最も高かった。乾物総重は30D44が最も高く、他の2品種と比べ約1.3倍の収量があった。KD640には、さび病が広範囲で見られた。

ウ スーダングラスの奨励品種選定 (継続)

平成22年5月21日に、市販4品種を播種した。

奨励品種であるヘイスーダンと比較した場合、おいしいスーダンは、乾物収量が同等で、ハイブリッドスーダンとまきまきスーダンは乾物収量が低かった。しかし、まきまきスーダンは生育が緩慢で、刈遅れの恐れが少なくと考えられた。また紫斑点病の被害も少なかった。

エ イタリアンライグラス (継続)

平成21年10月20日に、市販6品種を播種した。

1番草の乾物収量は平均1,239kg/10a(対前年比110%)、2番草の乾物収量は平均370kg/10a(対前年比96%)であり、1、2番草の合計乾物収量は1,609kg/10a(対前年比106%)となり、平年並みであった。

品種別の合計乾物収量は、早生品種では、「優春」が「タチワセ」に比べ約1割低かった。中生品種では、「タチサカエ」は「タチムシャ」と同程度の収量であったが、「さつきばれ」は「タチムシャ」に比べ約1割低かった。

極早生品種の「あかつき」は、出穂期が早生品種と比べ、1番草では約10日、2番草では6日早かった。

耐倒伏性は、極早生品種の「あかつき」が全供試品種中で最も強かった。中生品種の「タチサカエ」と「さつきばれ」は耐倒伏性が全供試品種中で最も弱く、「タチサカエ」は1、2番草とも倒伏が見られた。

2 近赤外分析計による高泌乳牛飼養 管理のためのタンパク質分画成分の 迅速測定技術開発 (22~26)

(1) 飼料用麦類・ソルガムサイレージの飼料成分 迅速測定技術 (22~26)

近赤外分析計で飼料用麦類の一般成分、各種の繊維成分と蛋白質成分、および、ソルガムサイレージの各種蛋白質を測定するための検量線を開発する。

平成22年度は麦類21点、ソルガム44点を収集した。集めたサンプルは飼料成分分析を実施中である。

3 飼料用米品種の選定と省力多収 生産技術の開発 (20~22)

(1) 西南暖地向け飼料米品種を用いた乳牛への 給与技術の確立 (20~22)

ア 飼料米の飼料特性解明 (20~22)

「ミズホチカラ」は6月移植では疎植・多肥にしても

倒伏の少ない多収で倒伏しにくい品種である。

籾米の加工処理別飼料成分は、籾殻を剥離した玄米は粗繊維、中性デタージェント繊維、酸性デタージェント繊維含量が低く、糖・デンプン部分の可溶性無窒素物含量が高くなる。さらに、可消化養分総量は挽割り、圧ぺん処理により向上し、特に、玄米ではトウモロコシと同等の栄養価となる。

また、籾米中の粗蛋白質含量は穂揃期前追肥により、約7%まで高くなり、ルーメン内で利用される分解性蛋白質も増加する傾向を示す。

4 栄養収量を重視した自給粗飼料の生産技術 (22~24)

(1) 夏作飼料作物の省力多収と消化性向上を 目指した栽培技術 (22~24)

夏作の高収量・高栄養型の飼料作物生産体系としては、2期作トウモロコシがあるが、播種の省力化を図る方法としてトウモロコシ・ソルガム混播栽培がある。混播栽培に消化性を高めるbmr遺伝子を持つソルガム類を使い、その収量性と栄養特性を検討した。

乾物収量はbmr区、標準区が2期作区と同等で低稈区はやや低かった。bmr区はソルガムの収量割合が高く、トウモロコシの乾物収量が他の区と比べ約20%減収したが、ソルガムの倒伏割合が高くなった。低稈区の乾物収量は低かったが倒伏割合は低かった。

また、夏作ロールバールラップ体系についても高収量・高栄養化を目的に、bmr遺伝子を持つソルガム類について栽培試験を行い、その収量性と栄養特性を検討した。

飼料価値の指標を摂取可能TDN量とした場合、bmrソルガムはヘイスーダンより優れていた。

刈取時熟期が進んだ場合、スーダングラスではNDF消化率、TDN含量、摂取可能TDN量は有意に減少したが、bmrソルガムでは低下しなかった。

適期区のTDN収量において、1番+2番草ではbmrソルガムとヘイスーダンとの間に有意差は無かった。

5 飼料用稲一麦二毛作体系を基軸とした飼料生産技術の実証 (22~26)

(1) 温暖多雨な圃場条件に適した飼料用稲一 飼料用麦二毛作体系 (22~26)

暖地水田二毛作体系に適した品種を選定し、その飼料特性把握ならびに多収を維持しつつ適期作業を可能とする作期・作型を検討・実証する。また、地力を維持しつつ多収を得る家畜ふん堆肥を組み込んだ肥培管理技術を検討・実証する。

乾物収量および耐倒伏性について極晩生品種「タチアオバ」、早生品種「まきみずほ」、中生品種「モグモグあおば」が優れていた。

早生品種「まきみずほ」では5月下旬の早期移植ー9月下旬の黄熟期収穫の体系が、極晩生多収品種「タチアオバ」の6月下旬の普通期移植ー10月下旬の黄熟期収穫の体系と同様な多収量と栄養収量が得られる傾向が認められた。

「まきみずほ」の窒素施用量ではN0kg区に比べてN16kg区及びN12kg区は穂重・茎葉重ともに増加する傾向であるが、その差は小さかった。この要因についての解析は現在検討中である。二作目の飼料用麦類は、湿害軽減対策として圃場外周に額縁明渠を整備後、畝立て同時播種機により排水溝を設けつつ播種した。現在調査中。

豊前分場

〔野菜水田作チーム〕

1 新たな地域特産野菜の優良品種 育成と生産技術 (17～継続)

(1) 若掘りゴボウの新品種育成 (19～23)

県内産の若掘りゴボウで1月下旬～2月上旬どりに用いる「てがる」は根の形状が悪く、す入りや裂根が多いなど品質上の問題がある。そこで、厳寒期でも根の外観や品質が優れる市場性の高い新品種を育成するため、これまで育成した優良系統の中から選抜を行った。その結果、「渡辺早生」×「てがる」の雑種後代の中から、トンネル被覆しなくても厳寒期に地上部が枯死せずに根重が重く、食味評価の高い2系統を選抜した。

2 豊前地域における野菜の高品質 生産及び省力化技術の確立(4～継続)

(1) イチゴ高設栽培のかん水制御による安定 生産技術の確立 (21～22)

イチゴ「あまおう」の高設栽培の早期作型における安定生産技術を確立するため、定植後の遮光処理と第1次腋果房の花芽分化までのかん水制御が収量に及ぼす影響を検討した。低温暗黒処理による早期作型は、定植後から10月中旬まで遮光して10月上中旬にpF2.0でかん水管理すると、第1次腋果房の収穫期が早く1～2月の収量が多くなり、収量の増減も小さくなることが明らかになった。

3 県北部における普通作物の高品質 安定生産技術の確立 (19～継続)

(1) ラーメン用小麦品種の高品質安定生産技術 の確立 (19～23)

ラーメン用小麦「ちくしW2号」の県北部における生育、収量およびタンパク質含有率等の品質が向上する栽培技術を確立するため、最適な播種期や、施肥法について検討した。

「ちくしW2号」の播種適期は、収量が多くかつ年次変動が小さい11月下旬であった。11月中旬播は茎立期が2月上旬と早く踏圧可能期間が2月上旬までと短い上、凍霜害を受けて収量の年次変動が大きかった。12月上、中旬播は11月下旬播と比べてやや収量が少なく、タンパク

質含有率が低い傾向にあった。施肥では、穂揃期の追肥を標準窒素量4kg/10aから5kgに増やすことで、タンパク質含有率が目標の12%に近づき、また緩効性肥料ではエムコートとIBを混合することにより収量が増加する傾向が見られた。

(2) 温暖化や水田輪作に対応した水稲、小麦の 高品質生産技術の開発と実証 (20～22) ア 温暖化に対応した水稲「夢つくし」品質 向上技術の現地実証 (20～22)

地球温暖化に伴う気温上昇により、「夢つくし」の品質低下が問題となっている。そこで、現地の実態調査を行って品質低下の要因を解析するとともに、品質向上対策を確立するため、高温条件に適した緩効性肥料等について検討した。

現地実態調査の結果から、22年度の「夢つくし」の品質低下要因は主として登熟期における高温であった。移植期は、登熟気温が28℃以下となる8月3半旬以降に出穂するように設定し、施肥窒素量を8kg/10a程度まで増やすことで白未熟粒の発生が抑制されることが示唆された。また、高温年において5月下旬に移植する「夢つくし」に適した緩効性肥料は100日溶出タイプであるが、側状施肥と全層施肥では緩効性肥料の窒素溶出パターンの異なることが示唆された。

4 作物の品種選定と特性評価 (15～継続)

(1) 麦・大豆奨励品種決定調査 (15～継続) ア 麦類奨励品種決定調査

本調査として小麦1系統、ビール大麦1系統、予備調査として小麦2系統、ビール大麦1系統、食糧用大麦1系統、裸麦2系統を供試した。

イ 大豆奨励品種決定調査

本調査として小粒1品種、予備調査として中粒4系統、小粒1系統を供試した。

小粒では「すずおとめ」および「九州163号」が有望であったが、中粒は指標品種の「フクユタカ」に優る系統がなかったため、すべて試験終了となった。

(2) 大豆系統適応性検定試験 (15～22)

育成系統10系統を供試した。

その結果、「フクユタカ」と比較して「九系436」は成熟期が2日早く、粗タンパク質含有率が高く、また「九

系448」の成熟期が5日早く、ともに比較的有望な系統であり、再調査が必要と考えられた。

5 新開発農業資材の利用技術 (15～継続)

(1) 新開発除草剤等の適用性検定 (15～継続)

ア 水稻用新開発除草剤の適用性検定試験

一発処理剤3剤を供試して適用性を検討した。

BCH-051フロアブル、NH-061 1kg粒剤、SL-0602 1kg粒剤はいずれも除草効果が高く、薬害もみられず、実用化が可能であったが、ノビエ3.0葉期になると除草効果が劣ったため、処理時期が遅れた場合の効果の再確認が必要である。

〔果樹チーム〕

1 イチジクの新品種育成 (18～22)

(1) 日持ち性の優れる品種の育成 (18～22)

果実品質や日持ち性の優れる良食味品種を育成するため、平成16年～20年に交雑を行って得られた各家系30～60個体を圃場に定植した。

果重が70g以上で糖度が17.0以上の個体は20系統であり、その中で果重が100g以上のものは2系統、糖度20以上のものは3系統あった。果頂部の目の小さな系統「HIG-5」は果皮色が淡緑色で果実品質が優れ、収穫前日から降雨があっても腐敗果の発生が少なく、10℃で貯蔵した場合の日持ちも3日程度あった。

2 イチジクの生産安定技術の確立 (19～22)

(1) 「とよみつひめ」の品質安定技術の確立 (22～24)

「とよみつひめ」は水管理の相違により果実品質が不均一となる場合があり、品質の高位平準化を図るため土壌水分管理技術の確立が課題である。そこで、マルチ被覆による土壌水分コントロールが果実品質に及ぼす影響を検討した。「とよみつひめ」の収穫期間中に透湿性反射マルチで樹冠下を被覆し、土壌水分がp F2.0を超えた時点でかん水すると、p F2.4を目安としたかん水に比べて果実の着色、糖度に差はないが、果実重が大きくなって収量が増加するのに対し、土壌が乾燥しすぎた場合は成熟異常果が発生しやすくなることが明らかにな

った。

(2) 防疫・省力・高品質機能を合わせ持つ革新的 イチジク樹形の開発 (19～22)

イチジク「柵井ドーフィン」の一文修整枝は主幹が低いため春季に晩霜害を受けやすい。そこで本県が育成したイチジク台木品種「キバル」に接ぎ木した樹と自根樹について、晩霜害が発生した場合の被害程度を比較した。自根樹は晩霜の被害程度が大きく、芽が枯死するなどして結果枝が確保できずに収穫開始が遅れ、果重も小さくなって収量が激減した。一方、「キバル」を台木とすることで晩霜害が著しく軽減され、晩霜が発生しなかった場合と同等の収量が確保できた。

3 果樹の品種、系統適応性(54～継続)

(1) モモの品種・系統適応性 (54～継続)

ア モモの品種適応性 (54～継続)

モモの早生3品種(対照2品種)中生2品種(対照1品種)、晩生2品種(対照2品種)について、生育や収量、果実品質など特性調査を行った。その結果、早生種では有望品種がなかったが、中生種の「暁星」および「紅国見」は対照品種「あかつき」より収穫期が早く、着色良好で糖度が高く有望であった。また、中晩生種では「なつおとめ」が「あかつき」と「川中島白桃」をつなぐ品種として有望であった。

イ モモ第9回系統適応性 (13～継続)

独法農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所で育成した「筑波127号」、「筑波128号」、「筑波129号」、「筑波131号」の適応性検定を22年度から開始した。各系統とも22年春に苗を3本植え付けて生育を促進した。成葉の形状は「筑波127号」、「筑波131号」は広葉、「筑波128号」、「筑波129号」は中葉で、花芽の形状はすべて複芽であった。

4 果樹における生産資材の利用 (61～継続)

(1) 防除薬剤及び植物生育調節剤の利用 (61～継続)

モモの灰星病、黒星病等に対する新農薬8剤の病害防除効果試験を実施した。MAF-0801SCは、灰星病、黒星病に対して対照薬剤のダコレート水和剤と同等またはやや高い防除効果が認められ、薬害は発生しなかった。

また、灰星病ではパスポート顆粒水和剤、黒星病ではS-2200 40SCもダコレート水和剤と同等またはやや高い防除効果が認められ、葉害も発生せず実用性があると考えられた。

筑後分場

〔水田高度利用チーム〕

1 水田高度利用を前提とした米、麦、大豆の高位安定生産技術（18～26）

(1) 輪作体系におけるラーメン用小麦の高品質安定栽培法（18～21）

「ちくしW2号」における生育、収量および品質と播種時期、播種量、窒素施用量及び前作の違いの関係について検討した。

播種時期：収量は早播（11月13日）、標準播（11月24日）、遅播（12月6日）の順に高くなった。苗立ち本数：収量・品質において100本と150本の間には差はみられなかった。窒素施用量：穂揃期追肥（N5～6kg/10a）をすることでタンパク質含有率が高まり、目標タンパク質含有率12%以上を達成した。

大豆後作では、目標苗立本数が150本/m²、窒素施用量が3+4+2+4及び3+4+2+5kg/10aで、収量、品質ともに優れた。枯熟れ様症状が発生し、標準播（12月1日）では収量、品質が大きく低下した。

(2) 温暖化環境に対応した水稲安定生産技術（22～26）

肥沃地における大豆後作の「ヒノヒカリ」栽培は基肥窒素を0kg/10aに減らし早期中干しによりm²当たり籾数を抑制することができた。幼穂形成期以降は稲体窒素濃度を適正に保つことにより品質向上の可能性が示唆された。

晩生品種「あきさやか」では現地調査で緩効性肥料を用いた事例で籾数過剰による収量、品質低下が認められた。そのため基肥窒素施用量を3kg/10aに減じると籾数抑制に、穂肥施用時期の後進は籾数抑制及び登熟歩合向上に効果がみられた。さらに早期落水は収量、品質を低下させることが確認された。

(3) 水稲－麦体型におけるリン酸、加里施肥量削減が小麦の収量、品質に及ぼす影響（20～22）

リン酸及びカリの施用量削減が麦の生育、収量及びリン酸、カリの収支に及ぼす影響について検討した。リン酸及びカリの投入量から子実による吸収量を差し引いた値はリン酸、カリ無施用では負の値となった。しかし土壌の可給態リン酸、交換性カリは麦作の前後で減少し

なかったことから、前作の水稲栽培による供給が示唆された。麦の収量、品質に対する影響も認められなかった。試験は次年度も継続する。

(4) 麦浅耕播種による除草剤抵抗性スズメノ

テッポウの防除法 (21~23)

水稲後作では、浅耕播種および晩播は、慣行の播種法に比べてスズメノテッポウの発生量が減少することが明らかになり、麦の生育に差はみられないことから、浅耕と晩播を組み合わせることにより、一般圃場と同程度の収量、品質を確保できる見込である。しかし、一般的な麦の播種適期である11月下旬播種では、防除効果が不十分であった。大豆後作では、大豆作の畦を崩しながら浅耕播種することは可能であり、麦の生育は慣行播種と同等であった。また、水稲後作に比べてスズメノテッポウの発生量が少なかった。

2 筑後南部地域における普通作物 及びいぐさの作況調査及び優良品種 選定 (42~継)

(1) 水稲・麦・いぐさの作況調査

ア 普通期水稲 (42~継)

「ヒノヒカリ」、「あきさやか」を供試した。移植後、梅雨による日照不足で初期分けつが抑制されたものの、7月17日の梅雨明け後は好天が続き、平均気温が平年より2~3℃高い、記録的な高温多照で経過した。

水稲の生育は、生育期前半は茎数が少なく、主稈葉数もやや少なかった。「ヒノヒカリ」では出穂期は1~2日早かった。m²当たり籾数は平年より9%少なく、登熟歩合は平年並みであったが、収量は5%少なかった。検査等級は1下~2上であった。「あきさやか」の収量は平年並みで検査等級は1中~1下であった。倒伏はほとんどなく、病害虫の被害もなかった。

イ 麦 (51~継)

「シロガネコムギ」、「ニシノチカラ」、「はるしずく」を供試した。1月下旬から出穂までの平均気温は平年より高く、降水日数は平年より多く日照時間は短かった。3月1日時点の茎数は小麦が平年並み、大麦が平年よりやや多かったが、穂数はいずれもやや少なくなった。出穂期は平年より、「シロガネコムギ」が4日早く、「ニシノチカラ」が1日早かった。登熟期間は、4月は降雨が多く低温寡照、5月以降は高温多照で経過したため、枯れ熟れ気味に成熟した。「シロガネコムギ」ではm²当

り粒数が平年より少なく、収量は減少した。「ニシノチカラ」ではm²当たり粒数が平年よりやや少なく、収量は平年より減少した。倒伏や病害虫の発生は少なく、検査等級は全て1等であった。

ウ いぐさ作況調査 (47~継続)

筑後みどりの茎数及び茎長は、3月の気温が高かったため4月1日ではそれぞれ平年比109%、116%であったが、5月中旬の先刈り以降平年並みで経過した。5月下旬以降7月中旬の収穫期まで曇りや雨の日が多く日照時間が短かったため、収穫期の茎数は平年比106%とやや多かったものの、120cm以上の「長い」の割合は低くなった。また茎の太さがやや細く1m乾茎重が減少したため、収量は平年比95%と少なくなり、120cm以上収量は平年比72%と減収となった。

品質面では先枯歩合は少なかったが、部分変色率及び花序着生率は高かった。硬度はやや硬かった。

(2) いぐさ系統適応性検定試験 (6~継続)

熊本県農業研究センター一業研究所(いぐさ指定試験地)が育成した44系統を供試し、7月刈り栽培で実施した。「筑後みどり」を基準品種とした。この中で、「CO336003」は多収で、茎色が良、茎は太さがやや細でやや硬く、部分変色率が少なく、やや有望と評価した。

3 新開発農業資材等の利用技術 (51~継)

(1) 新開発除草剤の適用性検定 (51~継)

稚苗移植用一発処理剤として、BCH-031-1kg粒、MIH-101-1kg粒、NC-626-1kg粒、S-9058ジャンボ粒、S-9421ジャンボ粒、SB-596-1kg粒、SL-0601-1kg粒及びSYJ-157Hジャンボ粒の8剤の除草効果と薬害について検討した。いずれの薬剤とも各草種に対して除草効果は極大であった。その中で、NC-626-1kg粒、S-9421ジャンボ粒およびSB-596-1kg粒の3剤で薬害が微程度認められたが、回復は早く実用上問題なかった。その他の薬剤では薬害は認められなかった。

緑地管理除草剤として、SB-583フロアブル、SL-160顆粒水和剤、GG-145粒剤、GG-175粒剤、GG-200粒剤、SB-916EW、SB-924EWおよびSB-929EWの8剤の除草効果について検討した。いずれの薬剤とも対象雑草群に対して除草効果は極大であった。

(2) 新開発資材等の適用性検定 (19～継)

福岡県みやま市瀬高町の促成ナス生産者所有の南北方向単棟ビニルハウス 2 棟において、最低温度を 9℃に制御したハウスに株元温風温湯加温システムを設置して株元温風温湯加温区、最低温度を 11℃に制御したハウスを無処理区として実証試験を実施した。その結果、株元温風温湯加温区、無処理区における商品果収量は同等で、株元温風温湯加温システムの導入により最低温度を 2℃低下することが可能となり、燃料消費量を 44%削減、重油価格を 70 円/L で試算すれば 10a 当たり 230,440 円の省エネ効果が得られた。一方、温湯加温は曇天日や夜間に外気気温が高い日を除いてほぼ終日、通水ポンプが稼働しており、電力料金 17 円/kWh で試算すると導入が想定される 12～3 月で 10a 当たり 32,023 円の電気代がかかる。したがって、燃料費削減額の 10a 当たり 230,440 円から新たにかかる電気代を差し引いた結果、10a 当たり 198,417 円の省エネ効果が見込まれた。

〔野菜チーム〕

1 筑後地域におけるイチゴの高位安定生産技術 (22～23)

(1) イチゴ「あまおう」の第 1 次腋花房誘導苗による新作型開発 (22～23)

イチゴ「あまおう」の促成作型において問題となっている 1～2 月の収穫の中休みを解消するための第 1 次腋花房誘導苗の育成技術を検討した。第 1 次腋花房を誘導するために頂花房分化処理後に実施する育苗期の施肥条件、遮光処理の効果について検討したところ、施肥については IB 化成 S1 号を株あたり 2 ないし 3 粒施用すると、1、2 月の収量は慣行の 2 倍以上となった。特に 2 月の収量は、遮光区の方が高い傾向が認められた。

2 筑後特産ナスの高位安定生産技術 (22～24)

(1) 炭酸ガス施用による収量向上技術の開発 (22～24)

温度条件と光合成との関係および炭酸ガスの施用時間帯が収量に及ぼす影響を検討した。また、柳川市のナス生産農家圃場で、炭酸ガスの施用時間帯を変えた場合のガス濃度の推移実態を調査した。ナスの個葉の光合成および蒸散速度は葉周辺の気温が高いほど上昇した。ハウス内気温が高い午後の時間帯に炭酸ガスを施用すると、収穫果数が増えて収量が増加した。農家ハウスにおいて暖房用ダクトを使わずにガス施用を行っても、ハウ

スの両端まで炭酸ガスは拡散した。炭酸ガスを 14～15 時に施用したが、ハウス内の濃度は 600ppm までしか上昇しなかった。

3 新たな地域特産野菜の開発 (20～22)

(1) 博多蓄菜の栽培技術の確立 (20～22)

単価の高い小・中規格の収量増を目的とした摘心処理について検討した。また、10 月下旬定植で問題となっている異常側芽対策としてトンネル、べたがけ被覆による低温回避の効果についても検討した。

10 月 4 日定植で本葉 10、15 枚時に摘心をすると、小・中規格収量が無処理、5 枚摘心株より重くなった。また、10 月 28 日定植で 11 月 15 日～12 月 16 日トンネル被覆すると異常側芽の発生が少なくなった。一方、べたがけ被覆での異常側芽の発生率は無処理と同程度だった。

八女分場

〔茶チーム〕

1 環境反応特性を活用した玉露など 覆い下茶の高品質・安定生産技術の 開発 (21~23)

(1) 茶の光反応特性を活用した品質向上技術の 確立 (21~23)

覆い下茶の遊離アミノ酸含量2割増加を目標とした夜間電照技術を確立するため、電照時間帯(深夜、早朝、間欠でそれぞれ合計3時間電照)が新芽に及ぼす影響を検討した。新芽1.5葉期から摘採期までの間、遮光率90%資材による間接被覆及び光量子束密度 $4.5\mu\text{mol}/\text{m}^2\cdot\text{s}$ での夜間電照(極大波長465nmのLED、(株)トリコン製)を行った。各区の一番茶収量に有意差はなかったが、早朝電照区の遊離アミノ酸が他区より2割程度高かった。一番茶の荒茶官能評価は、深夜と早朝の区で無処理より高い傾向であった。二番茶では各区の調査項目に明確な差はなかった。

(2) 被覆棚を活用した新たな高品質・安定生産 技術の確立 (22~23)

玉露等高品質茶の安定生産に資するため、樹勢の維持・向上を目的に、高温期である夏秋期に玉露棚を利用した被覆を行った。晴天時の樹冠面の気温は露地で日中 35°C 以上になるが、60%遮光では最大 5°C 、80%遮光では最大 8°C 低くなった。被覆した区では秋芽の展開葉が大形化したが、秋芽の性状は試験区で異なる傾向を示した。秋芽2葉期に被覆した区の秋整枝量は少なく、2葉期及び4葉期に被覆した区の整枝面の枝条数は少ない傾向がみられた。

2 被覆栽培茶に適したIPM体系の確立 (21~24)

(1) 物理的手法による病害虫防除技術 (21~24)

ア 水散布と被覆を組み合わせたクワシロ カイガラムシ防除技術 (21~24)

被覆栽培下での水散布によるクワシロカイガラムシ防除技術について検討した。10日もしくは14日間の水散布とその期間の被覆を組み合わせることで、クワシロカイガラムシの発生量を減少できた。また、土着天敵であるチビトビコバチやタマバエ類、秋芽の生育に対する悪

影響はみられなかった。

(2) 玉露栽培における総合防除体系の実証 (22~24)

玉露栽培において、黄色ナトリウム灯と水散布(散布期間中は被覆)を取り入れることで、化学農薬の使用量を削減してもチャ主要害虫の発生量を抑制できる可能性が示唆された。ただし、秋芽においてコミカンアブラムシやチャノホコリダニの被害が増加するため、防除対策が必要である。

3 チャの病害虫の発生生態と防除 (22~24)

(1) チャの新害虫ミカントゲコナジラミの防除 対策 (22~24)

ミカントゲコナジラミの天敵であるシルベストリコバチ等を活用したIPM体系を確立するため、ミカントゲコナジラミやシルベストリコバチの発生消長およびシルベストリコバチに対する各種薬剤の感受性を調査した。ミカントゲコナジラミ成虫の発生ピークは5月上~中旬(越冬世代)、7月中~下旬(第1世代)、9月上~中旬(第2世代)、10月下旬(第3世代)の年4回観察された。シルベストリコバチ成虫の発生ピークは、ミカントゲコナジラミ成虫の越冬世代~第2世代では発生ピークと同時期および発生終息後の2回、観察されたが、第3世代では判然としなかった。有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤、合成ピレスロイド系殺虫剤など殺虫スペクトルが広い殺虫剤は、いずれも48時間後におけるシルベストリコバチの補正死亡率が90~100%で、シルベストリコバチに対する感受性が非常に高かった。一方、殺ダニ剤、IGR剤、マクロライド剤、IGR剤など殺虫スペクトルが狭い殺虫剤はいずれも48時間後の補正死亡率がいずれも10%程度以下であり、シルベストリコバチに対する感受性が非常に低かった。

4 茶樹優良品種の選定 (33~継続)

(1) 優良品種の選定 (51~継続)

茶樹の新品種や新系統の本県における適応性を検討するため、立毛の状況や一・二番茶の収量・品質等を調査した。

ア 系適第11群(平成17年挿し木、平成19年 定植)

12系統について、定植5年目の生育を調査した。3月中旬から4月下旬の低温や降霜により早生系統を中心に凍霜害を受けた。このような条件下で、埼玉43号、枕

崎33号は収量が多く、宮崎29号は少なかった。また宮崎30号、宮崎31号は凍霜害後の回復が悪く一番茶の収量が少なかった。荒茶の品質は、一番茶については枕崎31号が総合的に優れ、埼玉43号が内質で劣った。二番茶については埼玉43号、埼玉45号、金谷31号が総合的にやや優れ、金谷30号が総合的に劣った。

イ 系適第12群（平成19年挿し木、平成21年定植）

12系統について、定植2年目の生育を調査した。埼玉47号の生育が優れ、続いて埼玉46号、金谷34号、枕崎36号の生育が良好であった。埼玉48号、金谷32号はやや着花が多かった。

ウ 系適第13群（平成22年挿し木）

12系統について、挿し木1年目の生育を調査した。野茶研6号、宮崎36、37号は芽伸びがやや劣った。いずれの系統も生存率が高く、生育障害も特に見られなかった。

5 新資材の利用技術 (35～継)

(1) 新農薬効果試験 (35～継続)

ア 病害虫発生調査 (35～継続)

主要害虫の誘殺調査による発生量を平年と比較すると、チャノコカクモンハマキは平年の5割、ヨモギエダシヤクは4割と少発生であった。チャノホソガは平年よりやや多かった。チャノナガサビダニは一番茶後期から急激に密度が増加し、一番茶の摘採残葉や二番茶新葉に被害がみられた。クワシロカイガラムシの第1世代のふ化最盛期（防除適期）は5/25と平年よりやや遅かった。本年は第3世代の発生量が多かった。チャノミドリヒメヨコバイは8月中旬～10月上旬に多発した。

イ 新農薬効果試験 (35～継続)

新しく開発された茶樹用農薬の主要病害虫に対する防除効果を検討した。ディアナSCとワークワイド顆粒水和剤はチョウ目害虫とチャノキイロアザミウマの同時防除が可能であった。ロディー乳剤とスタークル顆粒水溶剤は新芽加害性害虫に対して効果が高かった。コルト顆粒水和剤はチャノミドリヒメヨコバイに対して効果が高かった。サムコルフロアブルのチャノホソガ防除適期は萌芽期から2葉期と考えられた。プルートMCのクワシロカイガラムシに対する散布当年の防除効果は、中切り更新を行っても効果が高かった。ペフドー水和剤の新梢枯死症に対する効果は、秋芽1葉期であれば防除効果が認められた。

S-2200 40SCは炭疽病に対して効果が高く、実用性があると考えられた。ヨモギエダシヤク、チャノコカクモンハマキ、チャノホソガに対するXI-06010Dの効果は高く実用性は高いと考えられた。チャノナガサビダニに対するクリアオール水和剤、ダニエモンフロアブル、トモノールSの効果は高く実用性は高いと考えられた。チャノミドリヒメヨコバイとチャノキイロアザミウマに対して、クリアオール水和剤やXI-06010Dは効果がみられた。トモノールSのカンザワハダニに対する効果は高かった。ツマグロアオカスミカメに対するコルト顆粒水和剤の効果は高かった。

(2) 施肥合理化試験 (21～23)

ア 有機液肥による点滴施用の効果 (21～23)

慣行施肥(53kgN/10a)に対して、30kgN/10aレベルで、収量・品質の安定生産のため、堆肥を組み合わせた有機質液肥の春夏期重点点滴施肥体系を検討した。一番茶の生葉収量は、6～8%点滴が慣行より多かった。一番茶の荒茶の官能評価は、点滴が慣行に比べやや劣る傾向であった。一番茶の荒茶の化学成分含有率は、点滴が慣行に比べやや劣る傾向であった。うね間土壤中の無機態窒素濃度について、3月から6月にかけて点滴は慣行より低く推移し、7月から9月はやや高く推移し、その間ほとんどが硝酸態窒素でアンモニア態窒素はきわめて低かった。

以上の結果から、点滴施肥は慣行施肥に比べ、一番茶の生葉収量は増加する傾向であるが、荒茶品質はやや劣る傾向であった。

〔中山間地作物チーム〕

1 葉ワサビの高収益生産技術の開発 (20～24)

(1) 葉ワサビの優良系統の選抜と長期安定生産技術の確立 (20～24)

‘島根3号’、‘奥多摩’、‘山口在来選抜’、‘矢部在来1’、‘矢部在来2’の5品種・在来種を、平成20年9月に播種した。これらを、矢部村の標高650mの林床に平成20年12月に定植して平成22年7月に掘り取り収穫した作型と、標高700mの林床に平成20年12月にいったん山上げ定植したのち平成21年11月に掘り上げて標高480mのハウスに定植して平成22年5月に掘り取り収穫した作型で、それぞれ比較した。両作型とも‘奥多摩’在来種は夏季の欠株がほとんどなく、他品種・在来種に比べて葉柄と主茎

根茎が長く、根茎と葉柄の合計収量が大きく、辛味が強かった。また、‘島根3号’に比べて、新葉の光合成速度が高く、中位葉では多日照条件での光合成速度が高かった。

さらに、最適採種時期を判定するために、‘奥多摩’在来種を平成20年8月に播種して同年11月に矢部村の標高435mの露地ほ場に定植し、平成22年に採種する株について、開花日と登熟日数が採種数と発芽率に及ぼす影響を調査した。種子は主に4月4～15日に開花した花から得られ、花茎ごと採種する場合、発芽率の高い種子が最大数採種できる時期は、4月4日開花の花で登熟日数53日、4月8～15日開花の花で登熟日数39～46日を経過した、5月17～31日の範囲にあることが明らかとなった。この時期は、開花始期後61～75日目に相当した。また、種子の休眠打破のための低温処理を3℃一定で、45日間と70日間とで比較したところ、低温処理終了時の発芽率は、処理45日では5%未満であったが、70日では50%以上で胚軸が伸長して播種困難となった。

果樹苗木分場

〔果樹苗木チーム〕

1 果樹ウイルス・ウイロイド検出のための診断技術の開発 (22～24)

(1) 温州萎縮ウイルスグループによる感染被害の解明とウイルス無毒化技術の開発 (22～24)

温州萎縮ウイルスグループによる感染被害の解明では、県内において温州萎縮病症状を示す「原口早生」、「日南1号」からウイルス遺伝子の解析により、それぞれ温州萎縮ウイルスと温州萎縮ウイルスグループであるカンキツモザイクウイルスを検出した。また、温州萎縮ウイルスの診断でクロマトキットがELISA法より優れることを明らかにした。

ウイルス無毒化技術の開発では、1mm程度の茎頂でも断続熱処理によりカンキツトリステザウイルスが無毒化できることを明らかにした。

2 機能性果樹台木の開発・利用 (21～24)

(1) キウイフルーツ優良台木の育成 (21～24)

キウイフルーツ改植時の生育不良対策として、土壌へのキウイフルーツの根の添加がマタタビ属実生苗の生育に及ぼす影響を調査した結果、苗の生育には品種間差がみられた。現地において改植時に植え穴に活性炭等を施用して苗木を植え付け、その後の生育を調査した結果、植え付け後の晩霜害により新梢が枯死するなどしたため、樹体間の生育差が大きかった。新梢長では処理による差はみられなかったものの、副梢長は活性炭等を施用した一部の区で長い傾向がみられた。

(2) 「キバル」台イチジク苗木の早期育苗技術の開発 (22～23)

イチジクの株枯病抵抗性台木「キバル」を用いた接ぎ木育苗試験として、接ぎ木方法や時期の検討を行った結果、3月末～4月中の接ぎ挿しにより、揚げ接ぎと同等の苗が1年で育成できた。また、緑枝接ぎをする際は、台木の葉を2枚程度残した台木に腹接ぎすることで活着率が向上した。

3 果樹ウイルス検査事業 (62～継続)

〔花木チーム〕

(1) カンキツ及びブドウのウイルス検査 (62～継続)

福岡県苗木農業協同組合と全農福岡県本部の依頼により、県内の採穂母樹を対象にカンキツでは温州萎縮ウイルス (SDV) 2,780点、リンゴステムグルーピングウイルス (ASGV) 2,780点、ブドウではブドウリーフロールウイルス等5つのウイルスについて55点の検査をエライザ法により行った。

その結果、カンキツでの保毒率は、SDVが5.8%、ASGVが0%であった。ブドウでの保毒率は、調査したいずれのウイルスも0%であった。

4 果樹ウイルスフリー苗木供給推進事業 (62～継続)

(1) 常緑及び落葉果樹のウイルスフリー苗木の育成 (62～継続)

果樹のウイルスフリー苗木の生産と普及を目的に、ウイルスフリー母樹の育成に取り組んだ。平成22年度は、カンキツの県内育成系統や新品種の内、8品種・系統について、熱処理、熱処理後の茎頂接ぎ木及びウイルス検定等を行った。

福岡県果樹ウイルスフリー苗木供給推進会議運営要領に基づき、ウイルスフリー化した2品種を配布した。

5 果樹苗木に対する植物生育調節剤等の利用 (16～継続)

(1) 果樹苗木に対する植物生育調節剤、除草剤、防除薬剤等の実用化 (16～継続)

果樹苗木用除草剤SB-211、212フロアブルの作用性について検討した。両薬剤とも、試験設定量の範囲内において除草効果が認められ、作物に対する影響は認められなかった。

カンキツに対する防除薬剤としてNT-8008 (かいよう病)、ダントツ水溶剤 (各種害虫類) について検討した。NT-8008のかいよう病に対する防除効果は、供試樹でのかいよう病の発生が少なく判然としなかった。ダントツ水溶剤の株元処理による各種害虫類に対する防除効果は、ミカンハモグリガでは顕著な被害抑制効果が認められたが、アブラムシ類、アゲハ類では判然としなかった。

1 花木新品種の育成 (16～25)

(1) スモークツリー新品種の育成 (17～22)

葉色が紫や黄色と鮮明で、花付きが良く、開出毛のボリュームが優れる新品種の育成に取り組んだ。

スモークツリーの有望系統として、①黄色葉が鮮明で開出毛が大きく、花付きが良い系統、②紫葉が鮮明で開出毛が大きく、定植後の初期生育が優れる系統、③花付きが極めてよい3系統を選定した。

また、スモークツリーは難発根性の植物であるため、挿し木時期の検討を行った。品種により異なるものの、5月中旬から6月上旬の範囲が挿し木適期であること、挿し木期間中が高温となる7月に挿し木した場合、基部が腐敗する割合が著しく増加し、発根率が低下することが明らかとなった。

(2) ツバキ新品種の育成 (16～24)

香りのある大輪のツバキ品種育成では、平成17年度交配39系統の内、10系統が交配4年後 (発芽3年後) に開花した。平成22年度に開花した系統では、花色の変異は小さく、有望系統は認められなかった。

早咲きツバキ品種育成では、‘ハイダウン’とヤブツバキ系品種、ミニツバキ品種との交雑実生の中には、12月に開花を開始する個体が存在したが、花の品質に優れる個体はなかった。

平成21年に現地実証試験に供試した4系統のうち、最も有望な系統「UN-3」は、接ぎ木活着率が高く、生育良好であった。

(3) 環境浄化型シャリンバイ系統の選定 (22～25)

平成21年度に、シャリンバイ交雑系統の二酸化窒素吸収速度を測定し、高い値を示した9系統を用いて、周年における能力を検定するために、夏、秋期における吸収速度を測定した。

9系統の二酸化窒素吸収速度は、全体に夏期の方が秋期より高い傾向にあった。また、いずれの時期においても、気孔伝導度と二酸化窒素吸収速度に正の相関がみとめられた。

夏期、秋期ともに最も高い値を示した系統は、二酸化窒素吸収速度が、通常沿道に植栽されている「タチシャリンバイ」と比較して、夏期に約1.2倍、秋期に約1.4倍高い値を示した。

2 花木に対する植物生育調節剤の 利用 (16～継続)

(1) 新開発除草剤の適応性検定 (16～継続)

花木類用除草剤GG-180粒剤(ツツジ類)、およびSYJ-175液剤(サクラ、ハナミズキ)の除草効果と薬害について検討した。GG-180粒剤、SYJ-175液剤いずれにおいても、試験設定量の範囲内において除草効果が認められ、作物に対する影響は認められなかった。

Ⅲ 試験研究以外の業務概要

Ⅲ 試験研究以外の業務概要

1 作物の原原種の採種

主要農産物種子法に基づき原原種種子の生産を行った。

種 類	品 種	採 種		採種量	採種場所
		系統数	面 積		
水 稻	夢つくし	1	a 3	kg 85	農 産 部
麦 類	しゅんれい	1	11	125	
	ニシノホシ	1	14	250	
	ちくしW2号	1	9	180	
	ニシホナミ	1	11	360	
大 豆	フクユタカ	1	15	210	

2 作物の原種の採種

主要農産物種子法に基づき原種種子の生産を行った。

種 類	品 種	面 積	採種量	採種場所
水 稻	つくしろまん 山田錦 ヒヨクモチ	a	kg	豊 前 分 場
		10	400	
		10	480	
	20	800		
	元気つくし ツクシホマレ	40	1,440	筑 後 分 場
		5	220	
麦 類	しゅんれい	60	1,500	豊 前 分 場
	イチバンボシ ちくしW2号	20	330	筑 後 分 場
		30	780	

3 種苗等の配布

(1) いぐさ

種 類	品 種	数量 (株)	栽培場所	配 布 先
いぐさ	筑後みどり	600	筑後分場	JA全農ふくれん い業センター

(2) 野菜 (イチゴ)

種 類	品 種	数量 (株)	栽培場所	配 布 先
イチゴ無病苗原原苗	福岡S6号	165	野菜育種部	全国農業協同組合連合会福岡県本部

(3) 花き

種 類	品 種	数量 (株)	栽培場所	配 布 先
キク	「雪姫」	2,000	花き部	全国農業協同組合連合会福岡県本部
キク	「雪姫」	300	花き部	佐賀県農業協同組合
キク	「雪姫」	700	花き部	全国農業協同組合連合会山口県本部
キク	「雪姫」	10	花き部	全国農業協同組合連合会福岡県本部
キク	「月姫」	200	花き部	全国農業協同組合連合会福岡県本部
アジサイ	「青手鞠」	180	花き部	久留米花卉園芸農業協同組合
アジサイ	「筑紫ルビー」	840	花き部	久留米花卉園芸農業協同組合
アジサイ	「筑紫の舞」	220	花き部	久留米花卉園芸農業協同組合

(4) 果樹

種 類	品 種	数量 (本)	栽培場所	配 布 先
イチジク	とよみつひめ	2	豊前分場	福岡農業高校
イチジク	とよみつひめ	40	果樹苗木分場	全国農業協同組合連合会福岡県本部
ブドウ	秋鈴	480 (芽)	果樹部	福岡県苗木農協
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	株式会社 インドウ
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	株式会社 天香園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	有限会社 芦沢農園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	有限会社 菊地園芸
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	有限会社 中山ぶどう園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	有限会社 マルカン農園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	株式会社 植原葡萄研究所
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	有限会社 前島園芸
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	斉藤農園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	岡山農園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	株式会社 山陽農園
ブドウ	秋鈴	60 (芽)	果樹部	精農園
カキ	秋王	700 (芽)	果樹部	福岡県苗木農協

(5) 種豚配布

種 類	種 豚 (W)			備 考
	育成雌豚 (頭)	育成雄豚 (頭)	子 豚 (頭)	
配 布 先				
福岡県うきは市	10	1	0	大ヨークシャー種
計	10	1	0	

(6) 種鶏の配布

種 類	数 量 (羽)	配 布 先
横 斑 フ° リマスロック	50	(株) 久留米孵卵場
軍鶏×横斑フ° リマスロック	320	(株) 九州孵卵
計	370	

4 飼料検査

「飼料の安全性の確保及び品質改善に関する法律」（飼料安全法）に基づいて、市販流通飼料の立入収去検査及び収去飼料の分析・鑑定を実施した。

立入収去検査状況

区分 月別	配混合飼料 工 場		動物性蛋白 質飼料工場		単体飼料 工 場		飼料販売 業 者		流通飼料 中継基地		計	
	検査 回数	収去 件数	検査 回数	収去 件数	検査 回数	収去 件数	検査 回数	収去 件数	検査 回数	収去 件数	検査 回数	収去 件数
22年 4月												
5	4	10			1	1					5	11
6												
7												
8												
9												
10	5	11									5	11
11												
12												
23年 1月												
2	1	2									1	2
3												
計	10	23			1	1					11	24

5 家畜衛生

(1) 予防接種

ワクチンの種類	接種日齢及び方法	実施延頭羽数
流行熱・イバラキ病混合	牛 2 ml 筋肉内注射	54
IBR・BVD・PI・AD・RS混合	牛 2 ml 筋肉内注射	62
ヒストフィルス・ハ ^o スツレラ・マンヘミア	牛 2 ml 筋肉内注射	5
炭疽病	牛 0.2 ml 皮下注射	53
牛異常産(AK・KB・AN混合)	牛 3 ml 筋肉内注射	55
計(牛)		229
豚丹毒	子豚 1 ml 皮下注射 35日齢 繁殖豚 1 ml 皮下注射	146 97
日本脳炎・パルボ混合	繁殖豚 1 ml 皮下注射	54
計(豚)		297
マレック病(CVI)	採卵・種・肉用鶏 皮下注射 初生	2,153
鶏痘	採卵・種・肉用鶏 穿刺 初生・90日齢	2,153
ニューカッスル・伝染性気管支炎	採卵・種・肉用鶏 飲水投与 10・28日齢 点眼 60日齢	5,028 296
N B ₂ A C 4種混合	採卵・種鶏 筋肉内注射 90日齢	1,012
計(鶏)		10,642

(2) 診療

科 目	実 施 頭 羽 数 (頭・羽)			
	牛	豚	緬 羊	鶏
伝 染 性 疾 患	0	0	0	0
寄 生 虫 疾 患	0	0	0	0
内 科 疾 患				
呼 吸 器 病	6	12	0	0
消 化 器 病	27	5	0	0
代 謝 病	6	0	0	0
循 環 器 病	0	0	1	0
中 枢 神 経 病	0	0	0	0
外 科 疾 患				
運 動 器 病	5	2	0	0
消 化 器 病	1	0	0	0
皮 膚 病	0	0	0	0
外 傷	0	0	1	0
乳 房 疾 患	15	0	0	0
生 殖 器 疾 患	42	0	0	0
泌 尿 器 疾 患	0	0	0	0
事 故 ・ そ の 他	1	0	1	0
計	103	19	3	0

(3) 死廃家畜の病因別頭羽数

ア 鶏 : 下表のとおり

区 分 病 名	成 鶏		育 成 鶏		ブロイラー	
	羽 数	(%)	羽 数	(%)	羽 数	(%)
胃 腸 疾 患						
肝 臓 疾 患						
卵 黄 遺 残					4	5.0
卵 墜 ・ 卵 泌 症	17	4.7				
脱 肛	3	0.8				
脚 弱 ・ 脱 腱	2	0.6	6	7.8	1	1.3
創 傷			23	29.9		
カンニバリズム			10	13.0		
衰 弱 死	9	2.5			4	5.0
腹 水 症						
熱 射 病	7	1.9			7	8.9
そ の 他	288	79.8	7	9.0	19	24.1
不 明	35	9.7	31	40.3	44	55.7
計	361	100.0	77	100.0	79	100.0

6 依頼分析

(1) 飼料

「福岡県飼料分析手数料条例」に基づき、飼料の依頼分析を受けた。

項目 飼料名	件数	水分	有機酸	粗蛋白質	粗脂肪	粗繊維	粗灰分	リン	カルシウム	計
混合飼料	1	1	0	1	1	1	1	0	0	5
単体飼料	23	23	13	23	23	17	19	3	3	124
計	24	24	13	24	24	18	20	3	3	129

IV 研究成果の公表及び指導

IV 研究成果の公表及び指導

1 刊行物

(1) 研究報告

福岡県農業総合試験場研究報告第30号発刊：平成23年3月

執筆者氏名	論文名	頁
稲田 淳・浅田研一・磯崎良寛	ホルスタイン種去勢育成牛へのTMR給与が発育性および骨格筋発育関連遺伝子の発現に及ぼす影響	1～6
石橋正文・野方 仁	イチジク「とよみつひめ」の結果枝斜立誘引による傷果発生軽減について（短報）	7～9
清水信孝・手柴真弓	ジノテフラン水溶剤樹幹塗布の数種ブドウ害虫に対する防除効果	10～13
石井貴明・嶽本弘之・上田重文・花田 薫	福岡県に発生したトマト黄化葉巻ウイルスに対する抗血清を用いた DAS-ELISA 法および Tissue Printing-immuno assay 法による検出	14～17
宮崎真行・吉野 稔・内川 修・岩渕哲也・荒木雅登・石塚明子・小田原孝治	水稻新品種「元気つくし」の移植時期および2回目穂肥の有無が収量、品質および食味におよぼす影響	18～24
末吉孝行・山下貞士・下村克己・古賀 武・三井寿一・浜地勇次	夏出し用葉ネギ新品種「夏元気」の育成	25～29
井手 治・龍 勝利・國武みどり・小熊光輝・奥 幸一郎	高温期のトマト低段密植栽培における積算日射量を指標とした遮光方法	30～33
水上宏二・平田祐子・森山友幸	北部九州地域でのイチゴの高設栽培における CO ₂ 施用効果と品種に適した施用法	34～39
小熊光輝・奥 幸一郎・龍 勝利・井手 治・國武みどり	促成トマト土耕栽培における局部加温の障害果発生抑制効果（短報）	40～42
村本晃司・井樋昭宏・大倉英憲・松本和紀・牛島孝策	極早生ウンシュウミカンの高糖度果実生産のための TDR 土壌水分計を用いた測定法と土壌水分管理	43～47
藤島宏之・千々和浩幸・白石美樹夫・牛島孝策・松田和也	カキ「富有」の超低樹高一文字整枝が作業性、収量性、果実品質に及ぼす影響	48～55

執筆者氏名	論文名	頁
笠正二郎・山口昇一郎・上田修二・森美幸	捕獲イノシシのと殺後冷却が肉冷蔵中の脂肪酸化ならびに呈味成分に及ぼす影響	56～59
田中良幸・姫野修一・田中浩平・林田達也	イチゴ「あまおう」の高設栽培における定植時の株間が生育、収量および品質に及ぼす影響	60～65
姫野修一・渡邊敏朗・田中浩平・田中良幸	セル苗移植によるサツマイモ栽培の塊根形成における品種間差異	66～73
牛島孝策・渡邊辰彦・藤島宏之・松田和也	スモモ「貴陽」における雨除け栽培と人工受粉が結実と果実品質に及ぼす影響	74～78

福岡県農業総合試験場特別報告第32号発刊：平成23年3月

執筆者氏名	論文名	頁
田中 浩平	高温条件における水稻の生育予測、生育診断および品質向上に関する研究	1～66

(2) 成績書

部署名	資料名	発行部数
食品流通部	平成22年度経営マーケティングチーム研究成果概要書 平成22年度流通加工試験研究成績書	50部 10部
バイオテクノロジー部	平成22年度バイオテクノロジー部試験成績概要書	100部
土壌・環境部	平成21年度土壌保全対策事業調査成績抄録 平成21年度試験成績概要書	130部 20部
農産部	平成22年度水稻育種試験成績書 平成21年度秋冬作試験成績概要書 平成22年度春夏作試験成績概要書 平成20年度二条大麦育種試験成績書 平成21年度麦関係除草剤試験成績書 平成22年度水稻関係除草剤試験成績書	50部 120部 120部 70部 20部 150部
野菜育種部・野菜栽培部	平成21年度野菜関係試験成績書	50部
果樹部	平成21年度果樹関係試験成績書	CD-ROM 50枚
家畜部・畜産環境部	平成21年度畜産関係試験成績書 第27号	8部＋CD-ROM19枚
豊前分場	平成22年度水稻除草剤適用性試験成績書 平成21年度試験研究成績書（野菜・水田作、果樹）	150部 20部
筑後分場 水田高度利用	平成22年度水稻関係除草剤試験成績書	140部
八女分場 茶 中山間地作物	平成22年度茶試験成績書 平成22年度中山間地作物試験成績書	CD-ROM 60枚 CD-ROM 20枚
果樹苗木分場	平成21年度果樹関係試験成績書	CD-ROM 50枚

(3) 農業関係の試験研究成果

資料名	発刊年月
農業関係試験研究の成果（平成22年度前期に取りまとめた成果）	22. 9
〃（平成22年度後期に取りまとめた成果）	23. 3

(4) 技術指導資料

資 料 名	部 名	発 行 元	発刊年月
福岡県水稻・麦施肥基準	土 壌・環 境 部 農 産 部 豊 前 分 場 筑 後 分 場	福岡県農林水産部 農林水産物安全課	23.3
平成23年度普通作病虫害・雑草防除の手引き	病 害 虫 部 筑 後 分 場 農 産 部	福 岡 県	HP 22.12
平成23年度野菜病虫害・雑草防除の手引き	病 害 虫 部 野 菜 栽 培 部	〃	〃
平成23年度果樹病虫害・雑草防除の手引き	病 害 虫 部 果 樹 部 果 樹 苗 木 分 場	〃	〃
平成23年度花き花木病虫害・雑草防除の手引き	病 害 虫 部 花 き 部	〃	〃
平成23年度茶・いぐさ病虫害・雑草防除の手引き	八 女 分 場 筑 後 分 場	〃	〃
福岡県野菜推奨品種一覧表	野 菜 育 種 部 野 菜 栽 培 部 豊 前 分 場 筑 後 分 場 八 女 分 場	福岡県農林水産部 園芸振興課	23. 3
畜産状況レポート「飼料用米・稲WCS利用の現状」	畜 産 環 境 部	福岡県畜産協会	23. 3

(5) その他

誌 名	発刊年月	発刊部数
平成21年度福岡県農業総合試験場年報	22. 8	290 部
福岡県農総試ニュース 第61号	22. 8	600 部
福岡県農総試ニュース 第62号	23. 2	600 部
平成22年度に取りまとめた主要な研究成果	23. 3	400 部

2 研究成果の公表

(1) 学会等研究発表

ア 食品流通部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
食農資源経済学会 第4回大会	九州北部米麦二毛作地帯における集落営農組織の動向と地域的特徴	中原秀人	22. 9

イ バイオテクノロジー部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
園芸学会平成22年度秋期大会	トランスクリプトーム解析によるイチゴ交雑後代のうどんこ病抵抗性識別	平島敬太・龍俊輔・榎本亜紀子・平田千春・黒川小百合・田代康介・平川英樹・片山貴雄・柴戸靖志・池上秀利・内村要介・山本潔・久原哲	22. 9
園芸学会平成22年度秋期大会	イチジク花成関連遺伝子の光周期反応	池上秀利・野方仁・平島敬太	22. 9
園芸学会平成23年度春期大会	薬培養によるイチゴの半数体	内村要介・佐伯由美・平島敬太	23. 3

ウ 土壌・環境部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
2010年度日本土壌肥料学会北海道大会	水田転換畑におけるカドミウム高吸収イネ品種を用いたファイトレメデイエーション	茨木俊行・黒柳直彦	22. 9
2010年度日本土壌肥料学会北海道大会	第三紀堆積岩を母材とする樹園地土壌におけるpH低下にともなうカリウム溶脱の可能性	藤富慎一・黒柳直彦・茨木俊行	22. 9
2010年度日本土壌肥料学会北海道大会	有機物施用および作付来歴の異なる水田転換畑土壌の細菌叢解析	荒木雅登・福田和正・谷口初美	22. 9
園芸学会平成22年度秋季大会	イチジク‘とよみつひめ’の結果枝斜立誘引による傷果軽減について	石橋正文・野方仁	22. 9

エ 病害虫部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
第81回九州病害虫研究発表会 (春季大会)	フジコナカイガラムシの土着天敵寄生蜂を誘引する下草植物の選定とカキ園内への導入の可能性	清水信孝・手柴真弓・堤 隆文・菊原賢次・柳田裕紹・森田茂樹	23. 1
〃	キュウリにおける各種殺虫剤のウリ類退緑黄化ウイルス感染抑制効果の検討	石井貴明・森田茂樹	23. 1
〃	スワルスキーカブリダニ放飼体系のキュウリ退緑黄化病に対する防除効果	森田茂樹・柳田裕紹・石井貴明	23. 1
〃	コムギ「チクゴイズミ」においてコムギ赤かび病菌によるデオキシニバレノール汚染を低減する防除時期	浦広幸・菊原賢次・石井貴明	23. 1
第54回日本応用動物昆虫学会大会	スワルスキーカブリダニの飢餓耐性	森田茂樹・柳田裕紹	23. 3
〃	福岡県内で農薬使用頻度が低いカンキツ園で多くみられる生物種	清水信孝・手柴真弓・堤隆文・柳田裕紹・森田茂樹	23. 3
〃	促成ナスにおけるスワルスキーカブリダニの害虫防除効果と普及上の課題	森田茂樹・柳田裕紹・石井貴明 他	23. 3
第20回天敵利用研究会	土着天敵を活用したイチゴ育苗期におけるIPM体系の検討	柳田裕紹・森田茂樹	22.11

オ 農産部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
第28回日本植物細胞分子生物学会大会	ビール大麦における凸腹粒に関するプロテオーム解析	甲斐浩臣・高田衣子・塚崎守啓・馬場孝秀	22. 9
第73回九州農業研究発表会	大豆「フクユタカ」の晩播に適した狭畦栽培技術	内川修・田中浩平・宮崎真行・岩渕哲也	22. 8
	浸漬処理によるコムギ硬質粒の紛質化の要因と品質への影響	宮崎真行・内川修・岩渕哲也・馬場孝秀	22. 8
	新型RVA「ライスマスター」のソフトウェアを用いた米飯の食味評価指標	井上敬・坪根正雄・和田卓也	22. 8
日本育種学会第118回講演会	パキスタン由来の大麦遺伝資源系統PK23-2における大麦縞萎縮病抵抗性遺伝子について	甲斐浩臣・高田衣子・塚崎守啓・馬場孝秀	22. 9
	高温および寡照条件で発生する乳白粒に関するQTL解析	坪根正雄・和田卓也・井上敬	22. 9
北陸作物・育種学会第47回講演会	不織布を用いた水稻ポット苗の平床育苗法	和田卓也・坪根正雄・井上敬・尾形武文	22. 7
日本水稲品質・食味研究会第2回講演会	登熟期間中の乾物動態および物質生産からみた「元気つくし」の生育特性	宮崎真行・荒木雅登	22.10
	高温および寡照条件で発生する乳白粒に関するQTL解析	坪根正雄・和田卓・井上敬	22.10
	炊飯米の食味に関するQTLの同定と実証	和田卓也・井上敬・坪根正雄・尾形武文・松江勇次	22.10
日本育種学会第119回講演会	イネ玄米の背白粒と基白粒発現に関するQTL解析	坪根正雄・園田純也・和田卓也・井上敬	23. 3

カ 野菜育種部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
園芸学会秋季大会	シャロットの第8染色体を一对有するネギ重複異種染色体添加系統とネギF ₁ におけるシャロット第8染色体の伝達個体の同定方法	末吉孝行・塚崎光・山下謙一郎・若生忠幸・下村克己・古賀武・執行正義	22. 9

キ 野菜栽培部

学会名等	課題名	発表者	年月
園芸学会九州支部会	イチゴの高設栽培におけるCO ₂ 濃度および施用方法の違いが収量に及ぼす影響	水上宏二・平田祐子・森山友幸	22. 9
園芸学会九州支部会	イチゴの高設栽培における日射比例給液制御および生育初期の液肥濃度が収量に及ぼす影響	龍勝利・満田幸恵・北島伸之	22. 9
園芸学会九州支部会	キュウリ抑制栽培における水溶性ケイ酸肥料利用による施肥量削減	奥幸一郎・荒木雅登・國武みどり・小熊光輝・近見幸男	22. 9
園芸学会秋季大会	アスパラガス半促成長期どり栽培栽培における貯蔵根Brixと若茎Brixの関係	水上宏二・平田祐子・森山友幸	22. 9
園芸学会秋季大会	促成ナスの施設内温度管理方法と株元加温が収量に及ぼす影響	奥幸一郎・森山友幸・小熊光輝・黒岩善治・伏原 肇	22. 9
園芸学会秋季大会	イチゴひな壇2段高設栽培システムの栽培槽の位置が作業性と収量・品質に及ぼす影響	井上恵子・北島伸之・佐藤公洋	22. 9
園芸学会春季大会	粉碎もみ殻を用いた葉ネギのプライミング処理期間中の数種の温度条件における最適処理日数	小熊光輝・井手治・國武みどり・龍勝利	23. 3

ク 花き部

学会名等	課題名	発表者	年月
園芸学会秋季大会	閉鎖型苗生産システムにおける光量および底面給水がファレノプシス苗の生育に及ぼす影響	中村知佐子・松野孝敏・谷川孝弘・山田明日香・巢山拓郎・佐伯一直	22. 9

ケ 果樹部

学会名等	課題名	発表者	年月
第73回九州農業研究発表会	キウイフルーツのアレロパシー活性と活性炭の添加効果	朝隈英昭・草野成夫	22. 9
第73回九州農業研究発表会	・シングルシントロメロ台利用によるカンキツ‘はるみ’の生育および収量	松本和紀・藤島宏之・大倉英憲	22. 9
園芸学会平成22年度秋季大会	ニホンナシ種子の成長および発芽力の獲得時期	渡邊辰彦・石坂晃・牛島孝策	22. 9
園芸学会平成22年度秋季大会	生食用ブドウ育種におけるDNAマーカーを用いた果皮着色の有無の早期選抜	白石美樹夫・村本晃司・千々和浩幸	22. 9

コ 家畜部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
平成22年度日本暖地畜産学会 大分大会	麦焼酎粕濃縮液の混合割合の違いが泌乳性に及ぼす影響	森永結子	22.10
平成22年度日本産業動物獣医学会 九州地区学会	捕獲イノシシ肉の放血状態および貯蔵過程における呈味成分の推移	笠正二郎・山口昇一郎・ 上田修二・森美幸	22.10

サ 畜産環境部

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
平成22年度日本獣医三学会 九州地区学会	<i>Bacillus</i> 属微生物菌液散布による豚舎内低級脂肪酸の抑制効果	浅田研一・尾上武	22..10
日本暖地畜産学会第3回大会	街路樹剪定枝堆肥化物を敷設した発酵床養豚の臭気および肥育成績	小山太・尾上武・ 福原絵里子・浅田研一	22..10
日本暖地畜産学会第3回大会	オカクズおよび街路樹剪定枝を粉碎、堆肥化した物を敷設した豚発酵床微生物叢の推移	浅田研一・福原絵里子・ 小山太	22..10

シ 豊前分場

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
日本作物学会第231回講演会	福岡県における秋播型小麦の播種期と生育特性	石丸知道・田中浩平	23.3
〃	秋播型小麦における凍霜害被害の実態	石丸知道・田中浩平	23.3
園芸学会平成22年度秋季大会	イチジク‘蓬莱柿’のH型整枝の作業性および果実生産性	野方仁・栗村光男・ 石橋正文	22.9
〃	イチジク一文字整枝における接木樹と自根樹の晩霜被害について	井上義章・野方仁・ 石橋正文	22.9
〃	イチジク‘とよみつひめ’の結果枝斜立誘引による傷果軽減について	石橋正文・野方仁	22.9

ス 筑後分場

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
園芸学会平成22年度秋季大会	ネギのネギハモグリバエ抵抗性の品種間差異と抵抗性機作	下村克己・末吉孝行・ 浦広幸・古賀武・ 浜地勇次	22.9
日本作物学会九州支部会87回講演会	前年夏作に大豆を栽培した圃場において基肥窒素量が水稻の生育に及ぼす影響	吉野稔・石塚明子・ 小田原孝治・浜地勇次	22.9

セ 八女分場

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
平成22年度日本茶業技術研究発表会	新芽生育初期に東霜害を受けた‘さねみどり’のせん枝が収量や品質に及ぼす影響	中園健太郎・吉岡哲也・福山昭吾・久保田朗	22..10
第55回日本応用動物昆虫学会大会	クワシロカイガラムシ防除における薬剤散布量削減の取り組み	吉岡哲也・塚田輝貴・中園健太郎・福山昭吾・久保田朗	23. 3
第55回日本応用動物昆虫学会大会	チャ寄生性ミカントゲコナジラミの天敵シルベストリコバチに対する各種農薬の影響	福山昭吾・吉岡哲也・中園健太郎・久保田朗	23. 3

ソ 果樹苗木分場

学 会 名 等	課 題 名	発 表 者	年 月
日本植物病理学会九州部会	ブドウ‘安芸クイーン’に発生したルゴースウッド症状とRupestris stem pitting-associated virus の検出	草野成夫	22.11
園芸学会平成22年度秋季大会	スモモ‘貴陽’におけるジベレリン処理濃度の違いが結実、果実品質、花芽形成に及ぼす影響	牛島孝策	22. 9
平成22年度日本植物病理学会大会	カンキツに発生するリンゴステムグルーピングウイルスを迅速・簡易に診断するイムノクロマト・キットの作製	草野成夫	22. 4

(2) 業績発表

ア 研究成果発表会

部 門	期日・場所	発 表 テ ー マ	発 表 成 果	発 表 者
花 き	23. 3.11 八仙閣	花き試験研究成果発表会	○閉鎖型苗生産装置を活用したファレノブシス苗生産技術 ○オンシジウム切り花の春出し栽培技術 ○電照栽培用黄色系秋ギク「月姫」の育成 ○トルコギキョウ白八重F1品種の育成 ○種間交雑等によるアジサイ新品種の育成	中村 知佐子 佐伯 一直 山田 明日香 巢山 拓郎
畜 産	22. 9.10 福岡リーセントホテル	新「はかた地どり」発表会	○新「はかた地どり」の開発と改良点について	西尾 祐介

イ 講演会等

名 称	期 日	発 表 課 題	所 属・発 表 者
ふくおか IST 「IST 産学官事業」 成果発表会	22.10.29	超小型センサを利用した農産物用資材の 機能性評価と新資材の開発	食品流通部・馬場 紀子
福岡いちじく産地改革推進研究会	23. 3.24	イチジクの流通と輸送対策	食品流通部・法村 奈保子
農業担当教員研修会	22.11.27	農業総合試験場の現状とラーメン用小麦 の育成について	バイオテクノロジー部・ 古庄 雅彦
福岡県農業青年クラブ連絡協議会 研修会	22. 7.13	有機物施用による土づくり	土壌・環境部・黒柳 直彦
久留米市三潴町農業担い手連絡協 議会土づくり研修会	22. 8.20	有機物施用による土づくり	土壌・環境部・黒柳 直彦
農業生産資材協会技術研修会	22. 9. 2	福岡県における診断システムを利用した 効率的な施肥管理技術	土壌・環境部・黒柳 直彦
九農研土壌肥料研究会	22.10. 4	飼料米生産における鶏ふんの利用と問題点	土壌・環境部・黒柳 直彦
第14回 日本バイオリジカル コントロール協議会 講演会	22.10.7 ～8	性フェロモンを利用したフジコナカイガラ ムシの交信攪乱効果	病害虫部・手柴 真弓
”	22.10.7 ～8	促成イチゴの本圃における化学農薬を半減 するIPMシステム	病害虫部・柳田 裕紹
J A全農ふくれん普通作物部会 全体研修会	22. 8. 9	新品種の開発状況	農産部・尾形 武文
採種事業研修会	22. 9. 7	高温登熟条件下での種子生産と高温耐性 品種「元気つくし」の特性	農産部・尾形 武文
こめこめ研修会	22.12.22	最近の米づくりの課題および対策について	農産部・尾形 武文
福岡県米麦品質改善協会朝倉支部 採種農家研修会	23. 1.20	気象変動に対応した優良種子生産について	農産部・尾形 武文
J Aふくおか嘉穂特別栽培米部 会研修会	23. 2.28	元気つくしの栽培管理技術の向上について	農産部・宮崎 真行
九州沖縄の地球温暖化対応策事例	23. 1.17	高温耐性水稻品種「元気つくし」	農産部・尾形 武文
地球環境温暖化影響・適応策情報 共有会	23. 1.31	暑さに強く安定生産できる小ネギ「夏元気」 の品種開発	野菜育種部・末吉 孝行
J A全農ふくれん園芸部会連絡 会議研修会	23. 3. 4	県農業総合試験場の野菜の試験研究成果	野菜栽培部・山本 幸彦

名 称	期 日	発 表 課 題	所 属・発 表 者
井川ブドウ協会西日本支部講演会	22.12. 2	ブドウの品種動向について	果樹部・白石 美樹夫
J A全農ふくれんブドウ部会女性研修会	22.12.14	ブドウ安定生産に向けた取り組み	果樹部・村本 晃司
J A全農ふくれん園芸部会長研修会	23. 3. 4	福岡農総試果樹関連の試験研究の取り組み	果樹部・矢羽田 二郎
J Aにじ柿部会研修会	23. 3.24	種なし甘ガキ品種「秋王」の育成	果樹部・千々和 浩幸
第1回県酪協筑後事業所飼料イネ WCS共励会・講習会	23. 1.21	乳牛への稲発酵粗飼料(飼料イネ WCS)の給与技術	家畜部・乳牛チーム 森永 結子
福岡県獣医師会産業動物部会症例検討会	23. 3.17	分娩前乳汁の目視検査による乳房炎診断法とその診断精度	家畜部・乳牛チーム 北崎 宏平
北九州国際技術協力協会集団研修	22. 4.12	廃棄物管理技術および環境教育	畜産環境部・環境衛生 チーム 小山 太
前原市畜産経営環境保全組合研修会	22. 5.21	畜舎・堆肥舎における臭気対策	畜産環境部・環境衛生 チーム 福原 絵里子
養鶏協会筑豊・京築支部研修会	22. 7. 2	養鶏農家における飼養衛生管理の現状	畜産環境部・環境衛生 チーム 浅田 研一
市町村環境担当職員研修会(嘉徳・鞍手保健福祉環境事務所内)	22.10.21	畜産における悪臭問題事例と対策	畜産環境部・環境衛生 チーム 浅田 研一
平成 22 年度自給飼料利用研究会	22.11. 5	福岡県における近赤外分光を用いた飼料分析の実際	畜産環境部・飼料チーム 棟加登 きみ子
北九州国際技術協力協会集団研修	23. 2.21	廃棄物管理技術および環境教育	畜産環境部・環境衛生 チーム 小山 太
志摩畜産経営環境保全組合研修会	23. 3.18	糸島地域における畜産環境と対策について	畜産環境部・環境衛生 チーム 浅田 研一
福岡いちじく産地改革推進研究会	23. 3.24	‘キバル’台木を利用したイチジクの改更新	豊前分場・果樹チーム 野方 仁
野菜茶業課題別研究会	22.11.12	長ナス「筑陽」の省エネ栽培への取り組み	筑後分場・野菜チーム 森山 友幸
J Aふくおか八女茶業部会全体研修会	22.12. 9	・ミカントゲコナジラミの発生活長と防除対策 ・新芽生育初期に凍霜害を受けた‘さえみどり’のせん枝の収量・品質への影響	八女分場・茶チーム 福山 昭吾・中園 健太郎
J Aふくおか八女茶業部会黒木支部研修会	22. 7.22	高品質茶生産のための防除、施肥・土づくり対策	八女分場・茶チーム 吉岡 哲也・久保田朗
京築地域茶業研修会	22. 7.28	高品質茶生産のための肥培管理について	八女分場・茶チーム 久保田朗

(3) 学会誌等投稿

ア 土壌・環境部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
灰色低地土露地野菜畑における施肥由来窒素の動態と溶脱窒素の起源に関する一考察	藤富 慎一 角重 和浩	日本土壌肥料学会誌	82	1	45~51	23. 2

イ 農産部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
Fluorogenic ribonuclease protection (FRIP) analysis of single nucleotide polymorphism (SNPs) in Japanese rice (<i>Oryza sativa</i> L.) DNA for cultivar discrimination	Momoko Kitaoka, Takuya Wada, Takeshi Nishio and MasahiroGoto	Biosci. Biltechnol. Biochem.	74	11	2189~2193	22.11
Starch eluted from polished rice during soaking in hot water is related to the eating quality of cooked rice	Takuya Wada, Takayuki Umemoto, Noriaki Aoki, Masao Tsubone, Takefumi Ogata and Motohiko Kondo	J. Appl. Glycosci.	58		13-18	23.1
Allelic variation at the EF-G locus among northern Moroccan six-rowed barleys	Takahide Baba, Kenichi Tannno, Masahiko Furusho and Takao Komatsuda	Plant Genetic Resource	46		240-242	23.3

ウ 野菜育種部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
ナスにおける単為結果性と収量および収量関連形質との関係	古賀 武 下村 克己 末吉 孝行 三井 寿一 濱地 勇次	園芸学研究	9	3	273~277	22. 7

エ 花き部

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月
Temperature and Day Length Affect Time to Flowering and Abnormal Capitulum Formation in Summer-to-Autumn Flowering Cultivars of <i>Chrysanthemum morifolium</i> Ramat.	Takahiro Tanigawa, Kazunao Saeki, Toshihiro Kunitake, Takatoshi Matsuno, Chisako Nakamura, Asuka Yamada, Takuro Suyama	Journal of Japanese Society for Horticultural Science	79	4	372~376	22.10
胚珠培養および開花調節によるアジサイ種間雑種の育成年限短縮	巢山 拓郎 谷川 孝弘 山田 明日香 松野 孝敏 國武 利浩	園芸学研究	9	4	387~394	22.10

オ 果樹部

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月
Resveratrol production potential of grape flowers and green berries to screen genotypes for gray mold and powdery mildew resistance	白石 美樹夫 千々和 浩幸 藤島 宏之 村本 晃司	Euphytica	176	3	371~381	22.11

カ 家畜部

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月
ナイシンAを利用した酪農分野における牛感染症防除	北崎 宏平 馬場 武志 古賀 康弘	Foods & food ingredients journal of japan	215	4	449~456	22.11
Caffeine, dibutyryl cyclic-AMP and heparin affect the chemotactic and phagocytotic activities of neutrophils for boar sperm in vitro.	Li JC, Yamaguchi S, Kondo Y, Funahashi H	Theriogenology	75	7	1336~1345	23. 2

キ 豊前分場

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月
ハクサイおよびキャベツの結球葉、外葉における化学形態別カルシウム含量	林田 達也 柴戸 靖志 濱地 勇次	園芸学研究	9	2	197~201	22. 4
ハスモンヨトウ抵抗性を持つ大豆系統の生育特性	石丸 知道 渡邊 敏朗 岩淵 哲也 田中 浩平	日本作物学会 九州支部会報		76	25~27	22. 5

ク 八女分場

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月
マシン油乳剤の一番茶萌芽前散布によるチャのカンザワハダニとチャノナガサビダニに対する防除効果と新芽への残留状況	吉岡 哲也 塚田 輝貴 中園 健太郎 仁田原 寿一	茶業研究報告		109	1~12	22. 6
ピリプロキシフェン剤の冬期散布によるチャ寄生クワシロカイガラムシの長期密度抑制効果	吉岡 哲也 塚田 輝貴 中園 健太郎 福山 昭吾	茶業研究報告		110	19~28	22.12
新芽生育初期に凍霜害を受けた'さえみどり'に対するせん枝が一番茶に及ぼす影響	中園 健太郎 吉岡 哲也 福山 昭吾 久保田 朗	茶業研究報告		110	87~90	22.12

ケ 果樹苗木分場

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月
シャリンバイ属品種・系統の秋季における二酸化窒素吸収能力の比較	井樋 昭宏 國武 利浩	園芸学会九州支部 研究集録		18	57	22. 8
カンキツに発生するリンゴステムグルーピングウイルスを迅速・簡易に診断するイムノクロマト・キットの作製	草野 成夫	日本植物病理学会報	76	3	196	22. 8
スモモ'貴陽'におけるジベレリン処理濃度の違いが結実、果実品質、花芽形成に及ぼす影響	牛島 孝策	園芸学研究	9	別2	394	22. 9
ブドウ'安芸クイーン'に発生したルゴースウツド症状とRupestris stem pitting virus の検出	草野 成夫	日本植物病理学会報	77	1	34	23. 2

(4) 雑誌等投稿

ア 食品流通部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
「果のしずく」の加工利用について	法村 奈保子	福岡の果樹	—	521	16～17	22. 7
いちじくの鮮度保持と長距離輸送技術	馬場 紀子	福岡の果樹	—	521	9～11	22. 7
長距離輸送に向けて開発したイチゴ容器	馬場 紀子	福岡の野菜	—	141	41～43	23. 3

イ 病害虫部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
今年のカキの重要害虫の発生予察と防除策	清水 信孝	果実日本	65	4	60～63	22. 4
果樹のカイガラムシ対策	清水 信孝	福岡の果樹		5・6	20～21	22. 5
困った病害虫対策相談室「フジコナカイガラムシ」	清水 信孝	現代農業	89	6	237～239	22. 6
スワルスキーカブリダニを利用した促成および半促成栽培ナスの害虫防除	森田 茂樹	植物防疫	64	7	41～44	22. 7
キュウリにおけるアザミウマおよびコナジラミの防除対策技術	森田 茂樹	技術と普及	47	8	26～27	22. 8
性フェロモンを利用したフジコナカイガラムシの交信攪乱効果	手柴 真弓	バイオコントロール	14	1	6～9	22. 9
促成イチゴの本ぼにおける化学農薬を半減するIPMシステム	柳田 裕紹	バイオコントロール	14	1	10～15	22. 9
促成いちごの本ぼの化学農薬使用を半減するIPMシステム	柳田 裕紹	福岡の野菜	139		37～39	22.10

ウ 農産部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
北部九州におけるパン用小麦「ミナミノカオリ」の栽培技術	岩渕 哲也	研究ジャーナル	3	11	40～43	22.11

エ 野菜育種部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
福岡県農業総合試験場の機関紹介～野菜育種部～	末吉 孝行	福岡の野菜		139	42～43	22.10
夏出し用青ねぎ新品種「夏元気」の育成	末吉 孝行	福岡の野菜		138	24～26	22. 7
公立機関による野菜の品種開発・福岡県	(取材)	種苗界		3月	19～27	23. 3

オ 野菜栽培部

題 名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
トマト黄化葉巻病抵抗性品種に適した台木品種の選定	井手 治	福岡の野菜		137	38～39	22. 4
トマト低段密植栽培における積算日射量に基づく自動遮光方法	井手 治	福岡の野菜		138	24～26	22. 7
第61回全日本野菜新種審査会（小松菜）の開催	井手 治	福岡の野菜		139	40～41	22.10
いちほ多収穫のためのひな壇2段高設栽培システム	井上 恵子	福岡の野菜		140	64～66	23. 1
多収穫のためのイチゴひな壇2段高設栽培	井上 恵子	施設と園芸		151	60	22.10
研究紹介：福岡県農業総合試験場野菜栽培部	(取材)	農耕と園芸	65	6月	90～93	22. 6

カ 果樹部

題 名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
種なし大粒系ぶどうの房づくり	白石 美樹夫	福岡の果樹		520	15～17	22. 5
キウイの連作障害について	朝隈 英昭	福岡の果樹		520	18～19	22. 5
ヒリュウ台高糖系温州の連年安定生産に向けた適正栽植距離と結実・果実品質	大倉 英憲	果樹種苗		118	13～17	22. 5
ぶどう試作品種の特性	村本 晃司	福岡の果樹		521	19～20	22. 7
有望品種を展望する「果のしづく」	松本 和紀	福岡の果樹		522	6～8	22. 9
温暖化がかきの果実品質に及ぼす影響	千々和 浩幸	福岡の果樹		522	21～23	22. 9
シングルシトロメロ台木利用による「はるみ」の果実生産	松本 和紀	福岡の果樹		523	21～23	22.11
品種登録出願公表品種の解説「秋鈴」	白石 美樹夫	果樹種苗		120	21～22	22.11
ぶどう新品種「秋鈴」	白石 美樹夫	福岡の果樹		524	26～27	23. 1
中晩柑の貯蔵方法	藤島 宏之	福岡の果樹		524	28～30	23. 1
ぶどうの着色に対する温暖化の影響評価	村本 晃司	福岡の果樹		525	28～29	23. 3

キ 家畜部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
はかた一番どり －10年間で年産70万羽を達成、さらに 発展を目指して－	西尾 祐介	鶏病研究会報	46	3	198～200	22.11
捕獲イノシシのと殺・放血方法およびと 殺後冷却が肉質に及ぼす影響	笠 正二郎	福岡県獣医師会報		39	54～55	23. 1
暑熱期における種雄豚へのアスタキサン チン含有飼料の給与が精液性状及び精子 活力維持に及ぼす影響	山口 昇一郎	豚の繁殖衛生 セミナー通信		37	61～65	23. 3

ク 畜産環境部

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
<i>Bacillus</i> 属微生物菌液散布による豚舎内低級脂 肪酸の抑制効果	浅田 研一	福岡県獣医師会報		39	39～41	23. 1
低タンパク質飼料給与による豚ふん尿堆肥化 過程での臭気抑制効果	尾上 武	養豚の友			18～20	23. 4

ケ 豊前分場

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
福岡県農業総合試験場の機関紹介 ～豊前分場～	林田 達也	福岡の野菜		141	46～47	23. 3
えぐみが少なくサラダや電子レンジ調理に 適するゴボウ品種	姫野 修一	農耕と園芸	65	9	54～57	22. 9
いちじくの防寒対策	野方 仁	福岡の果樹	45	11	24～26	22.11

コ 筑後分場

題名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
アスパラガスの半促成長期どりにおける 省力的な減化学肥料栽培	平田 祐子	農耕と園芸			125～128	22.10
成ナス栽培の省エネルギー技術	森山 友幸	施設と園芸		149	22～26	22. 4
株元のトンネル保温でナス増収	森山 友幸	現代農業	89	12	168～171	22.12

サ 八女分場

題 名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月
マシン油乳剤の一番茶萌芽前散布による ハダニ類防除	吉岡 哲也	グリーンレポート		491	10～11	22. 5

(5) 著書

ア 家畜部

著 書 名	執筆者	内 容	頁	出版社名	年月
地域食材大百科	西尾 祐介	各地の地場・伝統食材 －銘柄鶏・地鶏 (はかた一番どり)－	490	農文協	22.11

(6) テレビ、ラジオ放送

ア 農産部

番組名	放送内容	出演者	放送社名	年月日
ニュースなっとく福岡	新品種「元気つくし」を種まき体験	尾形 武文	NHK福岡局	22. 6. 7
ぐるぐるアース	「麺めぐり」	尾形 武文	TNC	22. 8. 7
ふくおかインターネット テレビ	ラーメン小麦はとてもうまい！	尾形 武文	コアラ動画班	23. 7.21 (取材日)
報道ステーション	新品種で高温対策「元気つくし」	尾形 武文	テレビ朝日	22. 7.23
めんたいワイド	高温に強いぞ！「元気つくし」	尾形 武文	FBS	22. 8.25
ニュースピア	米SOS	尾形 武文	KBC九州朝日	22. 9. 7
FBSニュース	高温に強かった「元気つくし」	尾形 武文	FBS福岡放送局	22.11. 1
それ行け！福岡探検隊	暑さに強いお米です「元気つくし」	尾形 武文	BSQ	22.10.22
土曜ニュース CUBE	今年の猛暑に勝った「元気つくし」	尾形 武文	TNC	22.10.16
あべちゃんトシ坊のこり ない二人	こりないお天気教室	尾形 武文	RKBラジオ	22.10. 9
めんたいワイド	福岡ブランドのコーナー「ラー麦」	尾形 武文	FBS	22.10.20
九州経済NOW	九州の米を考える「元気つくし」	尾形 武文	TVQ	22.10.23
日本と日本人	「元気つくし」開発秘話	尾形 武文	カンボジアテレビ	22.11.25 (取材日)

イ 野菜育種部

番組名	放送内容	出演者	放送社名	年月日
いのちドラマチック	「あまおう」の育成	柴戸 靖 三井 寿一	NHK	23. 2. 2

ウ 野菜栽培部

番組名	放送内容	出演者	放送社名	年月日
ニュースファイン	ひな壇2段高設栽培システム	井上 恵子	TVQ	22.10.21

エ 花き部

番組名	放送内容	出演者	放送社名	年月日
ふくおかインターネット テレビ農林水産チャンネル	「夏日和」	佐伯 一直	ふくおかインター ネットテレビ	22. 9. 3

オ 家畜部

番組名	放送内容	出演者	放送社名	年月日
農林水産チャンネル	新「はかた地どり」の特長と消費者への アピール点	西尾 祐介	ふくおかインター ネットテレビ	22. 9.14
アサデス	新「はかた地どり」の開発について	西尾 祐介	KBC	22.10.15
ふくおか見聞録	新「はかた地どり」の改良点について	西尾 祐介	RKB	22.12.11
おいしい闘技場	新「はかた地どり」を材料とする料理		NHK	23. 2.18

カ 果樹苗木分場

番組名	放送内容	出演者	放送社名	年月日
福岡見聞録	おいしい果物のひみつ ～果樹苗木の振興～	牛島 孝策	RKB	22. 9.18

(7) 新聞掲載

ア 食品流通部

題 名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月日
「高機能・安価な包装袋を開発」	池田 浩暢	農業共済新聞				22. 6. 9
2010年農林水産研究成果10大トピックス ～電磁波殺菌とナノミストを用いた青果物の 高鮮度輸送技術		全国農業新聞				23. 1.14

イ バイオテクノロジー部

題 名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月日
「イチジクの品種識別技術ーとよみつひめの 判定を確実にー」	池上 秀利	農業共済新聞				22. 7. 7
専用小麦「ラー麦」福岡でデビュー		北海道新聞				22. 4.29

ウ 病害虫部

題 名	執筆者	発表誌名	巻	号	頁	年月日
促成栽培イチゴにおける総合的病害虫管理	柳田 裕紹	日本農業新聞				22. 8.31
福岡県における施設野菜病害虫防除のポイント	柳田 裕紹	新・農林技術新聞社				22.10. 5
福岡県の促成栽培イチゴに発生する病害虫とそ の防除	柳田 裕紹	日本農民新聞				22.10.15
施設野菜（春期）の主要害虫と防除イチゴ	柳田 裕紹	日本農民新聞				23. 2.15

エ 農産部

題 名	執筆者	発 表 誌 名	巻	号	頁	年 月 日
ラーメン用小麦「ちくし W2 号」の育成について		北海道新聞				22. 4.26
福岡独自の大豆へ新品種開発を開始		全国農業新聞				22. 5.28
最近誕生したうどん、ラーメン用国産小麦		全国農業新聞				22. 6.25
注目の新品種「元気つくし」		全国農業新聞				22. 7.23
ラー麦ラーメン		毎日新聞				22. 7.28
ラーメン用小麦を使った即席めん		日本経済新聞				22. 8.23
県産品ノート「ラー麦」		西日本新聞				22. 8.30
ラー麦で即席めん開発へ 糸島市産地 PR		読売新聞				22. 9.20
県産品ノート めし丸元気つくし		西日本新聞				22. 9.20
ラーメン小麦について		AMJ				22.11 月号
ラーメン用の県産小麦 ラー麦の作付け拡大		全国農業新聞				22.10.29
元気つくしの力		月刊「食糧ジャーナル」				22.11 月号
「元気つくし」海外 TV が取材		日本農業新聞				22.11.27
ラーメン小麦開発 1 年		西日本新聞				22.11.10
ラー麦販売好調		日本農業新聞				22.11.11
ラー麦ラーメン登場から 1 年		読売新聞				22.11.23
給食で夢つくし新米		西日本新聞				22.12. 3
ラーメンシンボ開催「ラー麦」		西日本新聞				23. 2. 8
糸島ラーメン開発へ		毎日新聞				23. 2. 8
ラー麦生育順調		日本農業新聞				23. 3. 9
ラー麦育つ市場の芽		日本経済新聞				23. 3.29

オ 野菜栽培部

題 名	執筆者	発 表 誌 名	巻	号	頁	年 月 日
イチゴひな壇 2 段高設		農業共済新聞				22. 9. 8

カ 家畜部

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月 日
はかた地どり「2代目」はおとなしめ		読売新聞				22. 8.24
「はかた地どり」うまみ成分アップ		日本経済新聞				22. 8.25
新はかた地どり うまみ一割増し		朝日新聞				22. 8.28
はかた地どりが新品种開発		食肉速報				22. 8.30
新はかた地どり登場 こく、歯切れよく		日本農業新聞				22. 9.11
新「はかた地どり」発表会開催、 旨味成分が増し更に美味しく		食肉速報				22. 9.13
旨味をアップ！新「はかた地どり」が誕生		全国食鳥新聞				22. 9.15
新「はかた地どり」誕生 さらにおいしく改良		鶏鳴新聞				22. 9.25
はかた地どり“衣替え” うま味増し 肉質軟らかに		西日本新聞				22. 9.25
研究だより 「大豆粕に替え麦焼酎濃縮液」	森永 結子	農業共済新聞				22.10. 6
新「はかた地どり」誕生！		福岡県だより				22.11. 1
新しくなった「はかた地どり」 ーより飼いやすく、うま味も向上ー	西尾 祐介	農業共済新聞				22.11. 3

キ 筑後分場

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月 日
トンネル被覆で株元保温		日本共済新聞				22. 4. 7

ク 八女分場

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月 日
研究だより 「高品質な二番茶の生産」	吉岡 哲也	農業共済新聞				22. 5. 5

ケ 果樹苗木分場

題 名	執筆者	発 表 誌 名	卷	号	頁	年 月 日
カンキツ接ぎ木部異常病の診断 ～ASGVクロマトキットで簡単・迅速～	草野 成夫	農業共済新聞 福岡県版「研究だより」				22.12. 1

3 指導・啓発活動

(1) 研修会等

ア 企画情報部

指導項目	事項内容	実施時期	実施場所	対象者
講習会・研修会 普及指導員研修	農業大学校「農産物の知的財産保護に係る研修会」	22.11.2	農業大学校	27
	知的財産権セミナー	22.12.7	農総試	61
	技術指導力強化研修	22.12.7	農総試	14

イ 食品流通部

指導項目	事項内容	実施時期	実施場所	対象者
講習会・研修会	柳川市認定農業者連絡協議会研修会	22.8.20	柳川市	50
	八女地域集落営農組織リーダー研修会	22.8.27	八女市	75
	朝倉市認定農業者の会女性部会視察研修	22.12.3	筑紫野市	30
普及指導員研修	技術指導力強化研修「水田農業担い手研修」	22.6.15	筑紫野市	11
	〃 「水田農業担い手研修」	22.9.1	福岡市	6
	〃 「水田農業担い手研修」	22.10.15	みやま市	5
	〃 「水田農業担い手研修」	22.12.15	福岡市	11
	基礎技術研修「地域」	22.12.16	筑紫野市	4
	普及指導員調査研究（地域部門）成果発表会	23.2.23	福岡市	21
	試験場研修	23.1.25	農総試	3
	果樹（後期）・茶調査研究成果発表会	23.2.18	福岡市	50
支援・援助	高度技術研修「普及活動における多様なマーケティング支援」	22.7.2	福岡市	18
	福岡県飼料用米推進協議会	22.5.27	福岡市	15
	福岡県飼料用米推進協議会	22.10.14	福岡市	16
	福岡県飼料用米推進協議会	22.11.17	福岡市	15
	福岡県飼料用米推進協議会	22.12.28	福岡市	13
	福岡県飼料用米推進協議会	23.1.25	福岡市	12
	福岡県飼料用米推進協議会	23.3.22	福岡市	18
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22.6.2	福岡市	10
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22.6.30	農総試	16
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22.9.7	行橋市	20
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22.9.13～15	東京都	3
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22.11.8	農総試	14
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	23.2.25	福岡市	20
輸出応援農工商連携ファンド事業	22.6.1	朝倉市	15	
輸出応援農工商連携ファンド事業	22.7.5	朝倉市	15	

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
	輸出応援農商工連携ファンド事業	22. 8. 3	農 総 試	10
	輸出応援農商工連携ファンド事業	22. 9.16	朝 倉 市	15
	輸出応援農商工連携ファンド事業	22.10.21	朝 倉 市	15
	輸出応援農商工連携ファンド事業研修会	22.10.21	朝 倉 市	20
	輸出応援農商工連携ファンド事業	22.12. 2	農 総 試	10
	輸出応援農商工連携ファンド事業	23. 2. 3	農 総 試	15
	輸出応援農商工連携ファンド事業	23. 3.22	朝 倉 市	15
	福岡県果実需要拡大協議会（委員会）	22. 4.19	福 岡 市	10
	福岡県果実需要拡大協議会（イチジク加工委員会）	22. 8.26	福 岡 市	10
	福岡県果実需要拡大協議会（イチジク加工委員会）	22.10.19	福 岡 市	10
	福岡県果実需要拡大協議会（運営会議）	22.11.17	福 岡 市	10
	福岡県果実需要拡大協議会（運営会議）	23. 3.25	福 岡 市	10
	カキの輸出試験	23. 1.11-12	朝 倉 市	7
	航空機用保冷資材試験	22. 6.15	農 総 試	4
	航空機用保冷資材試験	22. 7. 6	農 総 試	3
	航空機用保冷資材試験	22.11.12	農 総 試	4
	航空機用保冷資材試験	23. 3. 2	農 総 試	4
	航空機用保冷資材試験	23. 3.30	農 総 試	4
	いちじく生産対策会議	22. 5.19	福 智 町	50
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22. 5.19	福 智 町	20
	いちじく生産対策会議	22. 7.15	宗 像 市	50
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22. 7.15	宗 像 市	20
	JA 八女イチジク研究会 全体研修会	22. 7.29	八 女 市	50
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22. 9. 9	朝 倉 市	20
	JA 筑前あさくら果実加工企画検討委員会	22. 6. 1	朝 倉 市	10
	JA 筑前あさくら果実加工企画検討委員会	22. 6.29	朝 倉 市	10
	JA 筑前あさくら果実加工企画検討委員会	22. 9. 7	朝 倉 市	10
	JA 筑前あさくら果実加工企画検討委員会	22.11.11	朝 倉 市	10
	JA 筑前あさくら果実加工企画検討委員会	22.12.15	朝 倉 市	10
	JA 筑前あさくら果実加工企画検討委員会	23. 3. 4	朝 倉 市	10
	いちじく中期計画検討会	23. 2.22	福 岡 市	50
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	23. 3.15	飯 塚 市	20
	農産物の加工・輸出等に係る事例調査	23. 3.15	筑紫野市	3

ウ バイオテクノロジー部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
講習会・研修会	九州大学農学研究院生研修	22. 8. 6	農 総 試	11
	大宰府西中学校生徒研修	22.11.24	農 総 試	6
	二日市中学校生徒研修	23. 2. 1	農 総 試	6
普及指導員研修	バイオテック普及指導員研修	23. 1.26	農 総 試	2
	技術指導援助	DNA 解析手法（愛媛県農林水産研究所）	23. 3.24	農 総 試
	キクウイロイド検定技術（JA 八女）	22. 4. 8	農 総 試	4
	リンドウ培養苗順化法（朝倉普及センター）	22. 7.22	農 総 試	1

エ 土壌・環境部

導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
普及指導員研修	技術指導力強化研修（野菜）	22. 6.29	農 総 試	15
	土壌診断研修	22. 6.29~7.2	農 総 試	7
	土壌診断研修	22. 7.27~30	農 総 試	7
	土壌診断研修(土壌断面調査)	22.10.22	豊前分場	16
技術指導資料作成	水稻・麦施肥基準改定検討会議	22. 6.28	農 総 試	5
	水稻・麦施肥基準改定検討会議	22.10. 7	福 岡 市	5
技術指導援助	アスパラガス土壌調査	22. 4. 7	福 岡 市	6
	肥料料実用化展示ほ（麦）現地検討会	22. 4.14	田川市他	13
	肥料実用化展示ほ（水稻）設計検討会	22. 4.21	福 岡 市	10
	肥料試験展示ほ（野菜・果樹）設計検討会および展示ほ設置審査会	22. 4.27	農 総 試	10
	ガーベラ土壌調査	22. 4.28	久留米市	3
	観光振興を目指す食と農の循環研究プロジェクト会議	22. 5.19	宗 像 市	9
	麦枯れ熟れ現地調査	22. 5.21	小 郡 市	5
	麦枯れ熟れ現地調査	22. 6. 3	小 郡 市	4
	畜産経営環境保全推進事業現地実証ほ検討会	22. 7. 7	福 岡 市	20
	肥料実用化展示ほ（野菜・花き）成績検討会	22. 7. 8	福 岡 市	8
	食と農の循環研究プロジェクト現地巡回調査	22. 7.22	宗 像 市	11
	肥料試験展示ほ（麦）成績検討会	22. 8. 9	農 総 試	12
	肥料実用化展示ほ（水稻）現地検討会	22. 8.19	飯塚市他	15
	肥料実用化展示ほ（水稻）現地検討会	22. 8.26	大牟田市他	16
	肥料実用化展示ほ（野菜）現地検討会	22. 9. 9	大木町他	13
	肥料試験展示ほ（茶）成績・設計検討会	22.10. 1	八 女 市	9
	生産資材試験展示ほ設計審査会	22.10. 1	農 総 試	8
	肥料実用化展示ほ（野菜）現地検討会	22.10.21	粕 屋 町	17
	茶園土壌調査	22.10.25	八 女 市	3
	観光振興を目指す食と農の循環研究プロジェクト会議	22.10.28	宗 像 市	9
	肥料実用化展示ほ（野菜）現地検討会	22.11.18	北九州市他	15
	肥料実用化展示ほ（野菜）現地検討会	22.11.26	嘉麻市他	15
	肥料実用化展示ほ（花き）現地検討会	22.11.30	八 女 市	10
	観光振興を目指す食と農の循環研究プロジェクト会議	22.12.13	宗 像 市	9
	アスパラガス土壌診断打合せ会議	23. 1.11	大刀洗町	12
	肥料実用化展示ほ（野菜）現地検討会	23. 1.12	豊 前 市	18
	肥料実用化展示ほ（野菜）成績検討会	23. 1.28	福 岡 市	4
	肥料実用化展示ほ（野菜）成績検討会	23. 2. 2	福 岡 市	17
	肥料試験展示ほ（野菜、果樹）成績検討会	23. 2.15	農 総 試	15
	肥料試験展示ほ（水稻）成績検討会および肥料実用化展示ほ成績（花き）検討会および肥料、その他の資材展示ほ設置審査会	23. 2.18	農 総 試	14
	キク斑点症対策検討会	23. 3.24	八 女 市	8
	リ総研共同研究プロジェクト報告会	23. 3.24	福 岡 市	10

才 病虫害部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
植物防疫事業推進	植防連絡会議	22. 4.27	福 岡 市	10
	〃	22. 8.20	福 岡 市	10
発生子察事業推進	病虫害発生子察情報会議	23. 2. 2	防 除 所	10
	病虫害発生子察情報作成会議 (普通作、野菜、果樹)	22. 4.28	防 除 所	20
	〃 (〃)	22. 5.27	防 除 所	20
	〃 (〃)	22. 6.29	防 除 所	20
	〃 (〃)	22. 7.29	防 除 所	20
	〃 (〃)	22. 8.30	防 除 所	20
	〃 (野菜、果樹)	22. 9.29	防 除 所	12
	〃 (野菜)	22.10.28	防 除 所	6
	〃 (〃)	22.11.30	防 除 所	6
	〃 (〃)	22.12.21	防 除 所	6
	〃 (〃)	23. 1.19	防 除 所	6
	〃 (野菜、果樹)	23. 2.28	防 除 所	12
	〃 (普通作、野菜、果樹)	23. 3.30	防 除 所	20
	植物防疫に係る 対策会議、検討会	病虫害防除対策会議 (果樹)	22. 4.20	防 除 所
〃 (野菜)		22. 6.18	防 除 所	25
〃 (花き)		22. 6.28	防 除 所	25
〃 (普通作)		22. 7.27	防 除 所	25
〃 (果樹)		22.10.15	防 除 所	25
手引き・基準等の 作成	防除の手引き作成方針決定検討会	22. 5.19	福 岡 市	10
	防除の手引き作成会議 (普通作)	22. 6.22	防 除 所	10
	〃 〃	22. 8.17	防 除 所	10
	〃 (果樹)	22. 7. 2	防 除 所	10
	〃 〃	22. 8.26	防 除 所	10
	〃 (野菜)	22. 6.25	防 除 所	10
	〃 〃	22. 8.23	防 除 所	10
	〃 (花き)	22. 7. 2	防 除 所	10
	〃 〃	22. 8.26	防 除 所	10
	防除の手引き説明会	22.12. 3	防 除 所	150
県減・減認証審査、 指導	福岡県減農薬・減化学肥料栽培認証委員会技術 審査会	22. 8.12	福 岡 市	10
	〃	23. 2.14	福 岡 市	10

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
農薬展示圃審査、 指導	農薬展示圃審査委員会 (秋冬作)	22. 7.12	福 岡 市	10
	〃 (春夏作)	23. 2.22-23	福 岡 市	10
	農薬展示圃設計検討会 (秋冬作)	22. 8. 6	福 岡 市	20
	〃 (春夏作)	23. 3.14-15	福 岡 市	20
	農薬展示圃成績検討会 (秋冬作)	22. 6.11	福 岡 市	20
	〃 (春夏作)	22.10.22	福 岡 市	20
生産対策に係る 検討会	ブドウ生産対策会議 (べと病対策)	22.10.25	うきは市	60
	イチジク連絡協議会	22.10.29	うきは市	40
	八女地区農推協果樹部会防除暦検討会	22.11.18	八 女 市	20
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト会議	23. 3.15	飯 塚 市	15
	輸出カキ生産対策検討会	22. 7. 5	朝 倉 市	15
	〃	22. 8. 3	農 総 試	15
	〃	22. 9.16	朝 倉 市	15
	〃	22.10.21	朝 倉 市	15
	〃	22.11.15	農 総 試	15
	〃	22.12. 2	農 総 試	15
	〃	23. 2. 3	農 総 試	15
	〃	23. 3.28	朝 倉 市	15
	キウイフルーツ中期振興計画検討会	23. 3.29	久留米市	10
普及指導員研修	新任者生物診断研修	22. 7. 6 ～8	農 総 試	15
	技術指導力強化研修 (野菜)	22.11.30	久留米市	20
普及指導員調査 研究成果発表会	普及指導員調査研究成果発表会 (果樹)	22.11.12	農 大	40
	普及指導員調査研究成果発表会 (果樹)	23. 2.15	福 岡 市	40
農薬指導士養成 研修	福岡県農薬指導士養成研修	23. 1.21	福 岡 市	80
講習会・研修会	JA 筑前あさくらかき部会研修会	22. 5.10	朝 倉 市	60
	福島県農業総合センター職員研修	22. 5.27-28	農 総 試	1
	福岡県農業青年クラブ連絡協議会研修会	22. 7.28	福 岡 市	50
	「博多のきゅうり」研修会	22. 8.31	福 岡 市	90
	関東東海北陸推進会議病害虫部会	22. 9. 9	長 野 市	60
	JA ふくおか八女なし部会視察研修	22. 9.17	農 総 試	6
	JA ふくおか八女上陽地区青年部研修会	22.10. 1	農 総 試	20
	JA 筑前あさくらかき部会視察研修	22.10. 1	農 総 試	25
	バイオロジカルコントロール協議会講演会	22.10. 7	嬉 野 市	120
	台湾視察研修会	22.11.18	農 総 試	2
	和歌山県農林水産総合技術センター職員研修	23. 2. 1	農 総 試	1
	佐賀県落葉果樹防除研修会	23. 2.16	佐 賀 市	50
	高知県農業技術センター職員視察調査	23 .3. 9	農 総 試	5

カ 農産部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
栽培基準・技術資料の作成	平成 22 年度米麦大豆生産改善情報 1 号編集会議	22.10. 8	福 岡 市	10
	平成 22 年度米麦大豆生産改善情報 2 号編集会議	23. 1.11	福 岡 市	10
	平成 22 年度農薬展示ほ審査委員会	23. 2.26	福 岡 市	10
	元気つくしマニュアル作成会議	23. 1. 5	福 岡 市	10
種子生産における審査、指導、研修	(麦類)			
	麦類委託原種ほ審査指導 (穂揃期)	22. 4.20	久留米市	8
	麦類委託原種ほ審査指導 (成熟期)	22. 5.28	久留米市	6
	麦類委託原種ほ審査指導 (穂揃期)	22. 4.13	朝 倉 市	5
	麦類委託原種ほ審査指導 (成熟期)	22. 5.17	朝 倉 市	5
	麦類委託原種ほ審査指導 (穂揃期)	22. 4.13	太刀洗町	5
	麦類委託原種ほ審査指導 (成熟期)	22. 5.17	太刀洗町	4
	麦類委託原種ほ審査指導 (穂揃期)	22. 4.20	朝 倉 市	6
	麦類委託原種ほ審査指導 (成熟期)	22. 5.28	朝 倉 市	5
	麦類委託原種ほ審査指導 (穂揃期)	22. 4.20	うきは市	6
	麦類委託原種ほ審査指導 (成熟期)	22. 5.28	うきは市	4
	麦類委託原種ほ審査指導 (生産物)	22. 8.24	筑紫野市	5
	(水稲)			
	水稲委託原種ほ (出穂期) 審査	22. 8.25	大刀洗町	5
	水稲委託原種ほ (出穂期) 審査	22. 9. 2	大刀洗町	3
	水稲委託原種ほ (成熟期) 審査	22. 9.15	大刀洗町	3
	水稲委託原種ほ (成熟期) 審査	22. 9.30	大刀洗町	2
	平成 22 年度水稲種子品質向上展示ほ調査・指導	22. 9.10	八 女 市	50
	平成 22 年度水稲種子品質向上展示ほ成績検討会	22. 2. 9	福 岡 市	31
	平成 22 年産水稲原種ほ及び採種ほ設置会議	23. 2.16	福 岡 市	30
	福岡県主要農作物奨励品種選定審査会 (水稲・大豆)	23. 1.18	福 岡 市	32
	(大豆)			
	大豆原種ほ審査指導 (開花期)	22. 9. 6	大刀洗町	8
大豆原種ほ審査指導 (成熟期)	22.11.12	大刀洗町	8	
大豆原種ほ及び採種ほ審査 (生産物)	23. 2.15	小 郡 市	4	
平成 21 年度採種事業研修会 (品改筑後支部)	23. 3.18	柳 川 市	50	
JA 全農ふくれん大豆部会研修会	22. 7. 3	福 岡 市	24	
米・麦・大豆生産振興	「元気つくし」栽培技術研修会	22. 7.27	筑紫野市	80
	福岡県米麦大豆づくり推進協議会事務局会議	22.8. 4	福 岡 市	15
	JA 全農ふくれん普通作物部会全体研修会	22.8. 9	福 岡 市	60
	福岡県米麦大豆づくり推進協議会委員会	22.8.24	福 岡 市	30
	福岡県麦作共励会県審査委員会	22.8.24	福 岡 市	10

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
	「元気つくし」導入実証圃現地検討会	22. 8.31・9.3	田川市他	30
	福岡県米麦大豆づくり推進協議会事務局会議	22.12.21	福 岡 市	16
	福岡県米麦大豆づくり推進協議会委員会	23. 1.12	福 岡 市	16
	福岡県麦大豆づくり生産者研修会	22.10.27	福 岡 市	400
	福岡県産大豆懇談会	22.10.27	福 岡 市	60
	「元気つくし」導入促進実証圃成績検討会	22.12.13	福 岡 市	40
	JA 全農ふくれん麦部会研修会	23. 2. 4	福 岡 市	60
	平成 22 年度普及指導員調査研究成果発表会	23. 2.22	福 岡 市	60
	第 16 回福岡県民間流通地方連絡協議会	22. 11.18	福 岡 市	80
	水稲の作柄情報交換会 ①	22. 8.13	福 岡 市	15
	水稲の作柄情報交換会 ②	22. 9.14	福 岡 市	15
	平成 22 年度農薬展示ほ(水稲除草剤)現地巡回	22. 7.16	宮若市他	10
	水稲の作柄情報交換会 ③	22.10.14	福 岡 市	15
	平成 22 年度農薬展示ほ(春夏作) 審査委員会	23. 2.23	福 岡 市	10
	平成 22 年度水稲・大豆実証展示ほ設置・設計会議	23. 3.18	福 岡 市	20
	福岡県米麦大豆づくり推進協議会拡大推進会議	23. 2. 1	福 岡 市	12
	平成 22 年度普及指導員調査研究成果発表会	23. 2.22	福 岡 市	20
	水稲高温対策会議	23. 3. 1	筑紫野市	30
	J A 全農ふくれん普通作部会主食米部会研修会	23. 3. 8	福 岡 市	43
	共済組合連合会損害評価部会(麦)	22. 7.28	福 岡 市	15
	共済組合連合会水稲技術研修会	22. 8.24	朝 倉 市	23
	共済組合連合会損害評価部会(水稲一筆方式・麦)	22.12.10	福 岡 市	16
	共済組合連合会損害評価部会(水稲品質方式・麦)	22.12.24	福 岡 市	12
	共済組合連合会水稲・麦・大豆品種別収穫量検討会	23. 3.23	筑紫野市	11
	「元気つくし」の田植え体験学習	22. 6.28	筑紫野市	110
	「元気つくし」の稲刈り体験学習	22.10. 6	筑紫野市	110
	平成 22 年度福岡県産米産地懇談会	22.10.22	福 岡 市	52
	平成 22 年度水稲有望系統現地実証ほ設計検討会	22. 3.25	筑紫野市	40
	平成 22 年度水稲有望系統現地実証ほ中間検討会	22. 8. 4	現 地	40
	平成 22 年度水稲有望系統現地実証ほ中間検討会	22. 9. 8	現 地	40
	平成 22 年度水稲有望系統現地実証ほ成績検討会	22.12. 9	福 岡 市	40
	平成 22 年産水稲(夢つくし) 検査統一会	22. 9. 6	筑紫野市	40
	平成 22 年産水稲(ヒノヒカリ) 検査統一会	22.10.14	筑紫野市	40
	福岡県新規採用職員田植え研修	22. 7. 2	筑紫野市	42
	農産連絡会議(第 1 回)	22. 5.25	福 岡 市	20
	農産連絡会議(第 2 回)	22.12.20	福 岡 市	20
	大豆低収産地検討会	23. 3.25	現 地	20

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
	福岡県主要農作物奨励品種選定審査会（麦）	22. 8.25	福 岡 市	20
	農産連絡会議（第1回）	22. 5.25	福 岡 市	14
	共済組合連合会損害評価部会（大豆）	22. 5.31	福 岡 市	10
	共済組合連合会水稲・麦・大豆品種別収穫量検討会	22. 3.29	筑紫野市	10
	麦類現地検討会（大麦）	22. 5.12	志摩町他	33
	平成22年産ビール大麦受験準備指導会	22. 6.24	筑紫野市	55
	平成22年産麦類検査程度統一会	22. 6.24	筑紫野市	80
	ラーメン用小麦普及促進戦略会議販売戦略推進会議 （第1回）	22. 9. 2	福 岡 市	14
	ラーメン用小麦立毛検討会	22. 5.18	志摩町他	34
	ラーメン用小麦普及促進戦略会議生産推進部会 （第1回）	22. 7. 7	福 岡 市	17
	ラーメン用小麦普及促進戦略会議生産推進部会 （第2回）	22. 8. 3	福 岡 市	20
	ラーメン用小麦生産検討会	22. 8.27	筑紫野市	32
	ラーメン用小麦実証ほ成績検討会	22. 8.27	筑紫野市	24
	ラーメン用小麦実証ほ設計等担当者会議	22.10.13	福 岡 市	30
	ラーメン用小麦普及促進戦略会議	22.11. 4	福 岡 市	18
	平成23年産「ラー麦」現地検討会	23.2..25	福 岡 市	23
	北九州採種農家視察研修会	23. 3. 1	筑紫野市	13

キ 野菜育種部・野菜栽培部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
野菜普及員研修	野菜普及員研修	22.9.2	農 総 試	15
	野菜普及指導員調査研究発表会	22.8.6	福 岡 市	40
	野菜普及指導員重点課題成果発表会	22.12.22	福 岡 市	40
	野菜普及指導員調査研究発表会	23.2.25	福 岡 市	40
研究会・研修会	九州大学学生研修会	22.5.13	農 総 試	30
	グリーンネット福岡研修会	22.7.16	農 総 試	50
	八女農業高校社会人招聘講師	22.11.15	八 女 市	36
	九州沖縄推進会議野菜現地研究会	22.11.17-18	大 分 県	51
	九州沖縄推進会議イチゴ研究会	22.12.16-17	鹿 児 島 県	36
	全国農業システム化研究会	23.2.15-16	東 京 都	300
検討会	青ネギ生産販売振興対策会議	22.4.13	大刀洗町	20
	野菜企画委員会	22.4.21	福 岡 市	15
	イチゴ生産専門委員会	22.4.23	福 岡 市	20
	博多なす品種検討会	22.5.19	筑 紫 野 市	20
	イチゴ生産販売振興対策会議	22.5.19	福 岡 市	20
	冬春トマト品種検討会議	22.5.18	大刀洗町	26
	野菜企画委員会	22.5.21	福 岡 市	20
	「あまおう」商品力向上対策検討会	22.6.3	福 岡 市	20
	福岡イチゴ生産販売振興対策会議	22.6.15	福 岡 市	20
	博多なす専門委員会	22.6.18	福 岡 市	25
	ブロッコリー生産販売振興対策会議	22.6.25	福 岡 市	20
	野菜企画委員会	22.6.28	福 岡 市	15
	トマト生産販売振興対策会議	22.7.2	福 岡 市	30
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	22.7.2	八 女 市	30
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	22.7.7	福 岡 市	30
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	22.7.9	福 岡 市	20
	トマト生産販売振興対策会議	22.7.2	福 岡 市	20
	冬春なす生産販売振興対策会議	22.7.13	福 岡 市	20
	キュウリ生産販売振興対策会議	22.7.16	福 岡 市	30
	野菜企画委員会	22.7.20	福 岡 市	15
	青ねぎ「福岡ねぎ15号」現地検討会	22.6.23	朝 倉 市	25
	JA全農ふくれんイチゴ部会全体協議会	22.8.2	福 岡 市	70
	青ねぎ「夏元気」現地検討会	22.8.4	朝 倉 市	20
	JA全農ふくれんなす部会全体協議会	22.8.24	久 留 米 市	40
	野菜企画委員会	22.8.23	朝 倉 市	15
	施設キュウリ生産販売振興対策会議	22.7.16	福 岡 市	30
	JA全農ふくれんきゅうり部会全体研修会	22.8.31	福 岡 市	40
	「あまおう」商品力向上対策検討会	22.9.3	福 岡 市	26
	博多なす専門委員会	22.9.7	福 岡 市	20
	トマト専門委員会	22.9.16	久 留 米 市	20
野菜企画委員会	22.9.21	福 岡 市	15	

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
	キュウリ生産技術検討会	22.10.5	糸 島 市	25
	トマト生産販売現地検討会	22.10.6	糸 島 市	20
	イチゴ生産専門委員会	22.10.19	行 橋 市	20
	青ねぎ生産現地検討会	22.10.7	朝 倉 市	20
	野菜企画企画委員会	22.10.25	大 木 町	15
	イチゴ生産現地検討会	22.11.2	みやま市	15
	博多なす専門委員	22.11.4	みやま市	15
	トマト専門委員会	22.11.9	八 女 市	30
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	22.11.8	筑 後 市	15
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	22.11.13	北九州市	15
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	22.11.12	田 川 市	15
	冬春なす生産現地検討会	22.11.16	みやま市	30
	野菜企画委員会	22.11.19	福 岡 市	15
	イチゴ生産専門委員会	22.11.29	福 岡 市	20
	キュウリ生産技術検討会	22.11.8	糸 島 市	30
	イチゴ生産現地検討会	22.12.8	八 女 市	40
	トマト生産販売現地検討会	22.12.15	八 女 市	20
	野菜企画委員会	22.12.20	筑 後 市	15
	イチゴ生産専門委員会	22.12.21	大 木 町	25
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	23.1.5	筑 後 市	15
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	23.1.7	福 津 市	15
	あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議	23.1.12	飯 塚 市	15
	キュウリ生産技術検討会	23.1.12	久留米市	25
	福岡の野菜編集委員会	23.1.19	福 岡 市	15
	トマト専門委員会	23.1.16	久留米市	20
	イチゴ生産専門委員会	23.1.19	筑紫野市	20
	冬春なす生産現地検討会	23.1.25	みやま市	40
	イチゴ生産現地検討会	23.1.27	直 方 市	25
	ブロッコリー生産現地検討会	23.2.14	北九州市	25
	キュウリ生産技術検討会	23.2.15	久留米市	30
	野菜委企画委員会	23.2.21	筑紫野市	15
	青ねぎ生産販売現地検討会	23.2.22	久留米市	20
	トマト研修会	23.2.24	福 岡 市	50
	JA からついちごパッケージセンター視察研修	23.3.8	玄 海 町	15
	キュウリ生産技術検討会	23.3.16	久留米市	20
	トマト生産販売現地検討会	23.3.23	久留米市	40
	野菜企画委員会	23.3.24	福 岡 市	15

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
生産技術指導援助	野菜生産技術指導・助言	22. 4.16	農 総 試	30
	イチゴ生産技術指導・助言	22. 6.22	農 総 試	18
	野菜生産技術指導・助言	22. 6.23	農 総 試	3
	JA 福岡八女なす部会総会研修会	22. 8.27	筑 後 市	30
	野菜生産技術指導・助言	22.10. 4	農 総 試	20
	イチゴ生産技術指導・助言	22.10. 5	農 総 試	13
	野菜生産技術指導・助言	22.10.13	農 総 試	48
	野菜生産技術指導・助言	22.10.28	農 総 試	10
	野菜生産技術指導・助言	22.10.28	農 総 試	20
	野菜生産技術指導・助言	22.10.28	農 総 試	7
	野菜生産技術指導・助言	22.10.28	農 総 試	70
	イチゴ生産技術指導・助言	22.11. 4	みやま市	37
	イチゴ生産技術指導・助言	22.11. 5	農 総 試	25
	野菜生産技術指導・助言	22.11. 9	農 総 試	3
	野菜生産技術指導・助言	22.11.17	農 総 試	4
	野菜生産技術指導・助言	22.11.17	農 総 試	2
	イチゴ生産技術指導・助言	22.11.25	福 岡 市	30
	イチゴ生産技術指導・助言	22.11.25	農 総 試	9
	イチゴ、トマト生産技術指導・助言	22.11.30	農 総 試	8
	イチゴ生産技術指導・助言	22.12. 7	農 総 試	12
	野菜生産技術指導・助言	22.12.23	農 総 試	23
	JA 全農ふくれんいちご部会青年生産者交流会	23. 1.13	農 総 試	50
	トマト、ナス生産技術指導・助言	23. 1.18	農 総 試	20
	ナス生産技術指導・助言	23. 1.26	農 総 試	26
	ネギ生産技術指導・助言	23. 1.28	農 総 試	42
	野菜生産技術指導・助言	23. 1.28	農 総 試	53
	野菜生産技術指導・助言	23. 1.28	農 総 試	20
	イチゴ生産技術指導・助言	23. 2.10	農 総 試	12
	イチゴ生産技術指導・助言	23. 2.18	農 総 試	1
	イチゴ生産技術指導・助言	23. 2.21	農 総 試	2
	ナス生産技術指導・助言	23. 2.21	農 総 試	8
	イチゴ生産技術指導・助言	23. 2.22	農 総 試	2
	イチゴ生産技術指導・助言	23. 2.22	農 総 試	20

ク 花き部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 期 日	実 施 場 所	対 象 者
普及指導員研修	技術強化研修（花き育種）	22. 7.16	農 総 試	10
	基礎技術研修	22.10. 8	農 総 試	7
検討会	花き技術確立実証ほ設置計画検討会	22. 5.21	農 総 試	16
	トルコギキョウミニプロジェクト	22. 6.30	農 総 試	12
	雪姫栽培マニュアル検討会	22. 9. 7	農 総 試	12
	トルコギキョウミニプロジェクト	22.10. 6	福 津 市	9
	雪姫生産安定対策検討会議	22.11.30	農 総 試	16
	トルコギキョウミニプロジェクト	23. 1.12	農 総 試	9
	雪姫等普及検討会（キクプロジェクト）	23. 2.24	八 女 市	12
	トルコギキョウミニプロジェクト	23. 3.16	田 川 市	9
研究会・研修会	JA くるめ鉢花研究会研修会	22. 5.19	農 総 試	6
	アジサイブランチ研究会	22. 5.20	農 総 試	6
	JA 田川赤池花卉部会研修会	22. 7.21	農 総 試	10
	県育成アジサイ品種特性説明会	22. 7.23	久留米市	15
	久留米花卉農協鉢物部会研修会	22. 8. 4	久留米市	30
	福岡花卉農協洋ラン部会技術研究会	22. 8.26	農 総 試	15
	JA みい切り花・鉢物部会合同研修会	22. 8.27	久留米市	42
	アジサイブランチ研究会	22. 9. 2	農 総 試	4
	福岡花卉農協キク部会研修会	22. 9. 3	久留米市	25
	福岡花卉農協洋ラン部会研修会	22. 9.29	農 総 試	25
	福岡花卉農協（八女）電照ギク部会研修会	22.10.28	農 総 試	20
	筑豊地域花卉生産者連絡協議会トルコギキョウ研究会 現地研修会	22.10.29	直方、田川	25
	道の駅くるめ出荷者協力会花卉グループ研修会	22.11. 9	農 総 試	30
	九州沖縄各県農業会議会長・事務局長研修会	22.11.10	農 総 試	10
	柏友会八女支部現地研修会	22.11.25	八 女 市	12
	琴海青年農業者クラブ研修会	23. 1.28	農 総 試	13
	TK4H アグリマネージメント CLUB 花き部会研修会	23. 1.26	農 総 試	7
	高原園芸研究会研修会	23. 2.18	農 総 試	34
	アジサイブランチ研修会	23. 2.23	朝倉・久留米	7
	JA ふくおか八女花き部会広川支部研修会	23. 2. 1	農 総 試	15
JA 南筑後青年部研修会	23. 2.21	農 総 試	9	
久留米花卉農協キク部会研修会	23. 3.31	農 総 試	6	
共進会・品評会	福岡県品評会表彰式	22. 5.28	福 岡 市	30
	福岡県夏秋ギク圃場品評会	22. 7.26-27	県下一円	20
	第 39 回西日本菊花展審査及び講評	22.11. 1	宗 像 市	120
	第 57 回太宰府天満宮秋芳会菊花展審査	22.11. 2	太宰府市	70
	福岡県花き品評会（産物の部）審査	22.11.26	福 岡 市	50
	福岡県電照ギク圃場品評会審査	22.12.13-14	八女市他	30
	福岡県電照ギク圃場品評会講評	23. 1.13	八 女 市	50
	新品種審査会	23. 1.14	広川・久留米	6
	新品種審査会	23. 3.22	久留米市	7

ケ 果樹部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 期 日	実 施 場 所	対 象 者
普及指導員研修	果樹普及指導員研修	22. 7.13	筑紫野市	7
	果樹普及指導員研修	22. 8.24	筑紫野市	9
	果樹普及指導員調査研究発表会	22.11.12	筑紫野市	22
	果樹普及指導員研修	22.11.16	福岡市	27
	果樹普及指導員研修	22.11.24	筑紫野市	23
	果樹普及指導員調査研究発表会	23. 2.18	福岡市	35
研究会・研修会	ブドウ新品種栽培技術検討会	22. 5.25	筑紫野市	20
	カンキツ苗木現地検討会	22. 6.18	久留米市	20
	早生ナシ品種検討会	22. 8. 3	筑紫野市	17
	中生ナシ品種検討会	22. 8.20	筑紫野市	17
	ブドウ品種検討会	22. 8.27	筑紫野市	27
	ナシ栽培技術研修会	22. 9. 7	朝倉市	35
	カキ早秋現地検討会	22. 9.24	うきは市	15
	カキ大秋現地検討会	22.10. 8	うきは市	15
	中晩柑現地検討会	22.10. 8	古賀市	30
	キウイフルーツ品種検討会	22.10.29	筑紫野市	19
	ナシ「あきづき」せん定目合わせ会	22.11.18	朝倉市	31
	カキ品種検討会	22.11.18	うきは市	30
	中晩柑現地検討会	22.12.15	古賀市	30
	スモモ中期振興計画検討会	23. 1.11	筑紫野市	12
	キウイフルーツせん定検討会	23. 1.12	古賀市	23
	ナシ中期振興計画検討会	23. 1.18	大刀洗町	12
	ブドウ中期振興計画検討会	23. 1.26	久留米市	15
	ナシ産地改革推進研究会	23. 2. 1	久留米市	60
	モモ・スモモ産地改革推進研究会	23. 2. 8	久留米市	40
	キウイフルーツ中期振興計画検討会	23. 2.10	久留米市	10
ブドウ産地改革推進研究会	23. 2.16	久留米市	80	
キウイフルーツ中期振興計画検討会	23. 3.29	久留米市	17	
園芸振興推進会議 及び生産対策検討会	果樹企画委員会（各月1回）	22. 4 ～23. 3	福岡市他	各 12
	スモモ生産対策会議	22. 4. 9	みやま市	15
	ブドウ生産対策会議	22. 4.16	八女市	25
	キウイフルーツ専門小委員会	22. 4.26	八女市	12
	ナシ生産対策会議	22. 4.28	筑後市	20
	カンキツ生産対策会議	22. 4.30	みやま市	23
	ナシ専門小委員会	22. 5. 7	うきは市	13
	カンキツ苗木対策会議	22. 5.19-20	久留米市	22
	中晩柑生産対策会議	22. 5.27	筑紫野市	20
	キウイフルーツ生産対策会議	22. 6. 7	八女市	19
	福岡の果樹編集委員会	22. 6. 8	福岡市	8
	ナシ専門小委員会	22. 6.15	うきは市	13

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 期 日	実 施 場 所	対 象 者
	カンキツ生産対策会議	22. 6.16	古 賀 市	22
	スモモ生産対策会議	22. 6.23	八 女 市	17
	園芸振興対策会議	22. 7. 6	福 岡 市	35
	カキ生産対策会議	22. 7. 8	朝 倉 市	20
	ブドウ生産対策会議	22. 7. 9	朝 倉 市	26
	キウイフルーツ専門小委員会	22. 7.20	八 女 市	13
	果樹ウイルスフリー苗木供給推進会議	22. 7.26	久留米市	18
	損害評価会果樹共済部会	22. 7.30	福 岡 市	10
	九州地域ミカン対策会議	22. 8. 4	熊 本 市	36
	スモモ専門委員会	22. 9. 9	筑紫野市	14
	福岡の果樹編集委員会	22. 9.13	福 岡 市	11
	福岡の果樹編集委員会	22.10. 5	福 岡 市	8
	損害評価会果樹共済部会	22.10.18	福 岡 市	10
	カンキツ生産対策会議	22.10.21	みやま市	25
	ナシ専門委員会	22.10.26	筑紫野市	18
	ブドウ専門委員会	22.11. 4	筑紫野市	21
	ナシ生産販売対策会議	22.11. 2	久留米市	29
	ブドウ専門小委員会	22.12. 2	福 岡 市	10
	カキ専門小委員会	22.12.10	うきは市	10
	ナシ専門小委員会	22.12.10	うきは市	10
	損害評価会果樹共済部会	22.12.13	福 岡 市	10
	カキ生産対策会議	22.12.21	筑紫野市	28
	ブドウ専門委員会	23. 1.12	筑紫野市	15
	カンキツ専門委員会	23. 1.14	福 岡 市	32
	カキ専門委員会	23. 1.25	うきは市	10
	キウイフルーツ専門委員会	23. 2.10	筑紫野市	12
	福岡の果樹編集委員会	23. 2.14	福 岡 市	8
	損害評価会果樹共済部会	23. 2.14	福 岡 市	10
	カンキツ生産販売対策会議	23. 2.14	福 岡 市	28
	果樹ウイルスフリー苗木供給推進会議	23. 2.21	うきは市	13
	カキ専門委員会	23. 2.23	筑紫野市	18
	JA 全農ふくれん園芸部会連絡会議	23. 3. 4	福 岡 市	48
	損害評価会果樹共済部会	23. 3.14	福 岡 市	10
	カキ「秋王」担当者会議	23. 3.23	福 岡 市	20
	キウイフルーツ専門小委員会	23. 3.24	筑紫野市	17
	ナシ専門小委員会	23. 3.25	うきは市	11
	キウイフルーツ生産販売対策会議	23. 3.29	久留米市	20

コ 家畜部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 期 日	実施場所	対象者
[工学・養豚チーム] (工学)				
講 習 会	家畜受精卵移植講習会	23. 1.17～2. 7	筑紫野市	3
研 修 会	福岡県家畜人工授精師協会両筑支部研修会	22. 7.13	朝 倉 市	16
	福岡県家畜人工授精師協会筑後支部研修会	23. 3. 2	筑 後 市	9
	福岡県家畜人工授精師協会福岡支部研修会	23. 3.11	福 岡 市	11
協議会・検討会	県受精卵移植推進会議	22. 5.28	筑紫野市	21
	核移植・受精卵移植技術全国会議	23. 2.21-22	茨城県つくば市	115
	雌雄産み分け技術共同試験技術検討会	23. 2.22-23	茨城県つくば市	20
(養豚)				
講 習 会	福岡県家畜商講習会(中小家畜)	22.10.21	福 岡 市	13
協議会・検討会	実用技術開発事業「豚人工授精」推進会議	23. 2.14-15	茨城県つくば市	15
	吉井町養豚組合意見交換会	23. 3.11	うきは市	20
畜産経営診断指導 共進会・品評会	養豚コンサルテーション	23. 3.30	糸 島 市	10
	福岡県肉畜共進会(豚)	22.10. 6-7	太宰府市	150
	西日本豚枝肉共進会	22.12. 8-9	福 岡 市	100
[乳牛チーム]				
講 習 会	家畜商講習会	22.10.21	福 岡 市	10
研 修 会	普及員指導研修会	22. 5.27	福 岡 市	20
	飼料作物研修会	22. 9.15	筑 後 市	16
	ふくおか県酪農青年女性発表会	23. 3.28	筑紫野市	35
協議会・検討会	九州沖縄農業研究センターシンポジウム	22.10.26	福 岡 市	60
	ふくおか県酪福岡支所直轄組合員全員会議	22.11.15	福 岡 市	15
	九州沖縄農業研究推進会議畜産・草地飼料作分科会	23. 1.27	熊本県合志市	60
	乳用牛コンサルテーション	23. 2. 2	福 岡 市	5
	乳用牛コンサルテーション	23. 2.23	筑紫野市	5
	乳用牛コンサルテーション	23. 3.19	那珂川町	5

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 期 日	実施場所	対象者
[肉用牛チーム] 研 修 会	ちく和会（肉牛農家）研修 普及指導員研修	22. 9. 3 22. 6.29	筑 後 市 久留米市	18 8
協議会・検討会	普及指導員研修（和牛審査） 肉用牛生産者の会枝肉勉強会 大島牧場に係る意見交換会 高能力肥育素牛生産技術に係る打ち合わせ 肉用牛生産者の会枝肉勉強会 和牛登録協会地方審査委員合同研修会 肉用牛農家技術向上検討会 肥育農家バーンミーティング	22. 9.30 22. 4. 7 22. 5.11 22. 8.18 22. 9.16 22. 9.24 22.11.12	筑紫野市 太宰府市 宗 像 市 福 岡 市 太宰府市 佐賀県多久市 宗 像 市	3 28 10 6 15 44 9
畜産経営診断指導 共進会・品評会	肉用牛生産者の会枝肉勉強会 肉用牛農家技術向上検討会 肉用牛生産者の会枝肉勉強会 肉用牛農家技術向上検討会 肉用牛農家技術向上検討会 肉用牛コンサルテーション 西日本地区肉用牛交雑種共進会 福岡県肉畜共進会（肉牛） 福岡県畜産農協枝肉共進会 九州産肉牛枝肉共進会	22.12.21 22.12.22 23. 1.12 23. 2.17 23. 2.25 23. 3.25 22.11.18 22. 9. 6 22.10. 7 22.11.29 22.12.13	筑後市・久留米市 福 岡 市 宗 像 市 太宰府市 宗 像 市 宗 像 市 みやま市 福 岡 市 太宰府市 福 岡 市 福 岡 市	5 17 9 17 9 9 2 62 108 35 110
[家きんチーム] 研 修 会 協議会・検討会	福岡県鶏病技術研修会 はかた地どり推進協議会 はかた地どり推進協議会および通常総会 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 新はかた地どり知事試食 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 はかた地どり推進協議会 はかた一番どり推進協議会 はかた地どり推進協議会	22. 9. 9 22. 4.20 22. 5.20 22. 6.24 22. 6.25 22. 7. 8 22. 7.15 22. 7.23 22. 7.29 22. 8.17 22. 8.20 22. 8.27 22.10. 5 22.11. 4 22.12. 3 22.12.21 23. 2.25 23. 3.11	福 岡 市 久留米市 久留米市 久留米市 福 岡 市 福 岡 市 久留米市 福 岡 市 久留米市 福 岡 市 久留米市 福 岡 市 久留米市 福 岡 市 久留米市 福 岡 市 久留米市 福 岡 市 久留米市	60 14 16 14 12 8 9 11 15 11 16 10 9 11 15 11 10 16

サ 畜産環境部

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
[環境衛生チーム] 行政対応	口蹄疫対策会議	22. 4 15	福 岡 市	40
	畜産環境保全指導事業に係る指導啓発検討会	22. 5 7	福 岡 市	30
	福岡市緑のリサイクルセンター試験設計打合せ	22. 5.25	筑紫野市	7
	口蹄疫場内対策会議（対農総試）	22. 5.26	筑紫野市	11
	口蹄疫場内対策会議（対J A）	22. 5.28	筑紫野市	8
	畜産経営環境保全推進事業に係る現地実証展示ほ 検討会	22. 7. 7	福 岡 市	30
	工業技術センター試験設計打合せ	22. 7. 8	筑紫野市	6
	家畜保健衛生所防疫会議	22. 8. 4	福 岡 市	30
	家畜防疫県域会議	22. 9. 8	福 岡 市	60
	家畜防疫演習事前会議	22. 9.29	福 岡 市	30
	家畜防疫演習県域	22.10.19	福 岡 市	130
	工業技術センター試験設計打合せ	22.11. 9	筑紫野市	5
	酪肉近代化計画資料作成打合せ	22.11.15	筑紫野市	9
	酪肉近代化計画資料作成打合せ	22.12. 2	筑紫野市	9
	検酪肉近代化計画資料作成打合せ	22.12.27	筑紫野市	8
	養蜂疾病調査打合せ	23. 3.16	福 岡 市	5
	畜産環境保全指導事業に係る指導啓発検討会	23. 3.18	福 岡 市	16
指導員対応	畜産関連消臭剤の使用方法の指導	22.10.13	筑紫野市	3
	イチゴ農家に対する堆肥分析及び指導	23. 1.12	筑紫野市	4
	豚舎内臭気に関する指導	23. 1. 5	筑紫野市	2
	堆肥化処理に関する指導	23. 1. 7	筑紫野市	3
農家対応	堆肥化処理方法に関する指導	22. 7. 2	筑紫野市	3
	未利用資源の堆肥化処理に関する指導	22. 7. 5	筑紫野市	2
	堆肥化処理施設に関する指導	22. 7. 9	筑紫野市	3
	未利用資源の堆肥化処理に関する指導	22. 7.26	筑紫野市	2
	牛ふん堆肥成分値に関する指導	22.10. 6	宗 像 市	7
	豚ふん堆肥化に関する指導	22.11.22	筑紫野市	2
	牛ふん堆肥化に関する指導	23. 1.21	筑紫野市	2
	採卵鶏の害虫に関する指導	23.12.15	筑紫野市	2
	採卵鶏の害虫に関する指導	23. 2.18	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	22. 4. 9	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	22. 8.12	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	22.10.26	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	22.11.30	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	22.12.24	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	23. 1.25	筑紫野市	2
	豚汚水処理に係る指導	23. 3. 2	筑紫野市	2

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
[飼料チーム] 行政対応	環境飼料事業担当者会議	22.5.7	福 岡 市	19
	飼料取締り立ち入り検査	22.5.19	北九州市	1
	飼料取締り立ち入り検査	22.5.25	福 岡 市	1
	自給飼料担当者会議	22.6.3	福 岡 市	15
	県産飼料米協議会	22.8.9	福 岡 市	20
	打ち合わせ会議	22.8.11	福 岡 市	4
	飼料取締り立ち入り検査	22.10.20	北九州市	1
	飼料取締り立ち入り検査	22.10.22	行 橋 市	1
	飼料取締り立ち入り検査	22.10.26	福 岡 市	1
	飼料検査実務担当者会議	22.11.25	熊 本 市	27
	飼料取締り立ち入り検査	23.2.8	筑 後 市	1
	普及指導員調査研究発表会	23.2.24	福 岡 市	15
	自給飼料担当者会議	23.3.16	福 岡 市	20
	奨励品種選定会議	23.3.29	福 岡 市	10
	技術指導	飼料作物現地指導	22.4.26	那珂川町
飼料作物現地指導		22.5.19	みやま市	2
飼料作物現地指導		22.7.22	朝 倉 市	5
飼料作物現地指導		22.8.17	那珂川町	3
飼料作物現地指導		22.8.20	みやま市	2
飼料稲講習会		22.9.15	みやま市	20
飼料作物現地指導		22.9.22	那珂川町	3
飼料作物現地指導		22.11.4	那珂川町	3
飼料作物現地指導		22.11.22	那珂川町	3
飼料作物現地指導		22.12.17	那珂川町	3
飼料作物現地指導		23.2.4	那珂川町	3
検討会	国産飼料プロ2系試験設計会議	22.6.2	つくば市	20
	国産飼料プロ1系現地検討会	22.10.6	筑 後 市	30
	国産飼料プロ2系中間成績検討会	22.10.26	宮 崎 市	19
	飼料米現地検討会	22.10.27	筑 後 市	34
	自給飼料品質評価研究会	22.11.4	那須塩原市	140
	飼料稲成績打合せ会議	22.12.22	筑 後 市	4
	自給飼料増産検討会	23.1.18	熊 本 市	113
	国産飼料1系成績検討会	23.1.26	つくば市	26
	国産飼料2系成績検討会	23.2.9	那須塩原市	33
	国産飼料プロ2系打ち合わせ会議	23.3.9	筑 後 市	4
	国産飼料プロ2系現地検討会	23.3.22	那珂川町	9
畜産技術検討会	23.3.23	福 岡 市	51	

シ 豊前分場

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 期 日	実 施 場 所	対 象 者	
(野菜水田作) 研究会・研修会	県北作物研究会	22. 5.18	北九州市	15	
	イチゴ育苗管理講習会	22. 7.14	築 城 町	19	
	九州雑草防除研究会	22. 7.22-23	佐 賀 市	95	
	普及指導員調査研究発表会 (野菜)	22. 8. 6	福 岡 市	60	
	県北作物研究会	22. 8.31	北九州市	15	
	糸島根こぶ病防除対策協議会研修会	22. 9. 1	糸 島 市	25	
	県北作物研究会	22.10. 1	福 津 市	25	
	イチゴ栽培研修会	22.10. 6	田 川 市	20	
	米粉活用研修会	22.11. 4	行 橋 市	30	
	京築地域農作業安全対策研修会	22.12.14	行 橋 市	120	
	認定農業者経営改善研修会	22.12.14	築 上 町	80	
	イチゴ研究会	22.12.16-17	日 置 市	30	
	イチゴ視察研修 (農業大学校)	23. 1.27	豊前分場	12	
	京築地域農業・農村活性化推進大会	23. 2.16	荏 田 町	300	
	普及指導員調査研究発表会 (水田農業)	23. 2.22	福 岡 市	50	
	ゴボウ視察研修 (JA 球磨)	23. 2.24	豊前分場	12	
	普及指導員調査研究発表会 (野菜)	23. 2.25	福 岡 市	60	
	ゴボウ視察研修 (JA 筑前あさくら)	23. 3. 9	豊前分場	8	
	県北作物研究会	23. 3.16	福 岡 市	20	
	検討会	京築地域農業・農村活性化協議会総会	22. 5.12	行 橋 市	57
		豊築地域農業振興協議会総会	22. 6. 1	豊 前 市	28
		京築地域担い手・産地育成総合支援協議会総会	22. 7. 2	行 橋 市	50
		京築地域農業・農村活性化協議会・地産地消部会	22. 8. 4	行 橋 市	20
		京築地域農業・農村活性化協議会・特産物部会	22. 9.10	豊前市他	15
		京築特産物ナバナ代替品目検討会	22. 9.17	行 橋 市	6
		京築地域農業・農村活性化協議会・推進会議	22. 9.30	行 橋 市	18
		京築地域農業・農村活性化協議会・推進会議	23. 1. 6	行 橋 市	20
京築地域農業・農村活性化協議会・地産地消部会		23. 1.31	行 橋 市	25	
京築地域農業・農村活性化協議会・特産物部会		23. 3.15	行 橋 市	20	
京築地域農業・農村活性化協議会・推進会議		23. 3.24	行 橋 市	25	
福岡イチゴ生産販売振興対策会議		22. 5.19	福 岡 市	50	
イチゴ生産現地検討会		22.11. 2	みやま市	50	
イチゴ生産現地検討会		22.12. 8	八 女 市	50	
あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議		22. 7. 9	行 橋 市	10	
あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議		22.11.12	田 川 市	10	
あまおう再構築プロジェクトグループ支援会議		23. 1.12	飯 塚 市	10	
西日本育成系統麦立毛検討会		22. 5.10-11	筑紫野市他	73	
みやこ町山菜農業活性化協議会		22. 5.11	みやこ町	14	
農産連絡会議		22. 5.25	福 岡 市	20	
主要農作物奨励品種選定審査会		22. 8.25	福 岡 市	30	
ラーメン用小麦生産検討会		22. 8.27	筑紫野市	54	

指導項目	事項内容	実施期日	実施場所	対象者
	「元気つくし」導入促進実証ほ現地検討会	22. 8.31	宮若市	25
	ゴボウ生産販売振興対策会議	22. 9. 1	行橋市	18
	農産連絡会議	22.12.20	福岡市	20
	福岡県野菜推奨品種選定検討会	23. 1. 5	筑紫野市	25
	みやこ町農業振興検討会	23. 1.14	みやこ町	16
	主要農作物奨励品種選定審査会	23. 1.18	福岡市	30
	米高温技術対策会議	23. 3. 1	筑紫野市	45
	みやこ町農業活性化協議会	23. 2.23	みやこ町	18
(果樹)				
研究会・研修会	イチジク視察研修 (JA 福岡みやこ)	22. 7. 7	豊前分場	30
	イチジク視察研修 (JA 大山)	22. 9.14	豊前分場	6
	イチジク視察研修 (神奈川農技セズ柄事務所)	22.10. 5	豊前分場	2
	イチジク視察研修 (病虫害防除所)	23. 1. 7	豊前分場	5
	イチジク視察研修 (三重県中央農改)	23. 3. 4	豊前分場	1
	イチジク視察研修 (JA 福岡みやこ)	23. 3.23	豊前分場	25
検討会	果樹企画委員会 (毎月1回、計12回)	22.4~23.3	福岡市他	10
	果樹振興対策会議	22. 7. 6	福岡市	30
	果樹振興対策会議	22.11.26	福岡市	27
	いちじく生産対策会議	22. 5.19	福智町	28
	いちじく生産対策会議	22. 7.15	宗像市	33
	「とよみつひめ」現地検討会	22. 8. 3	八女市	35
	「とよみつひめ」現地検討会	22. 8.17	豊前市	24
	いちじく専門委員会	22.11. 9	筑紫野市	23
	福岡いちじく産地改革推進検討会	22.11.30	福岡市	25
	「とよみつひめ」苗木生産対策会議	22.12. 8	久留米市	10
	福岡いちじく中期振興計画検討会	23. 2.22	福岡市	20
	福岡いちじく産地改革推進研究会	23. 3.24	筑紫野市	85
	「革新的イチジク樹形の開発」推進会議	22. 8.19	加西市	12
	「革新的イチジク樹形の開発」推進会議	22.12.20	大阪市	11
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22. 5.19	福智町	20
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22. 7.15	宗像市	20
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22. 9. 9	朝倉市	18
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	22.11.12	筑紫野市	30
	「とよみつひめ」ミニプロジェクト	23. 3.15	福岡市	30
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22. 9. 7	豊前分場	15
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	22.11. 8	筑紫野市	11
	産学官連携事業「とよみつひめ」プロジェクト	23. 2.28	福岡市	18
	普及指導員調査研究発表会 (果樹)	22.11.12	筑紫野市	30
	普及指導員調査研究発表会 (果樹)	23. 2.18	福岡市	30
	もも品種検討会	22. 7.21	朝倉市	14
	もも専門委員会	22. 9. 9	筑紫野市	12

ス 筑後分場

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者	
(普通作物関係) 生産振興	農産連絡会議	22. 5.25	福 岡 市	15	
	農産連絡会議	22.12.20	福 岡 市	12	
	奨励品種選定審査会	22. 8.25	福 岡 市	25	
	奨励品種選定審査会	23. 1.18	福 岡 市	28	
	奨励品種決定調査成績検討会	22. 8.11	筑紫野市	10	
	奨励品種決定調査成績検討会	22.12.25	筑紫野市	12	
	米麦大豆生産改善情報編集会議	22.10. 5	福 岡 市	12	
	米麦大豆生産改善情報編集会議	23. 1. 7	福 岡 市	15	
	米麦大豆振興協議会指導班会議	22. 5.12	筑 後 市	13	
	米麦大豆振興協議会指導班会議	22. 6.10	筑 後 市	13	
	米麦大豆振興協議会指導班会議	22. 8. 5	筑 後 市	12	
	米麦大豆振興協議会指導班会議	22.10.14	筑 後 市	13	
	米麦大豆振興協議会指導班会議	22.11.16	筑 後 市	13	
	米麦大豆振興協議会指導班会議	23. 3.24	筑 後 市	15	
	植物防疫連絡会議	22. 4. 8	福 岡 市	12	
	植物防疫連絡会議	22. 8.20	福 岡 市	12	
技術指針作成	南筑後地域担い手・産地育成総合支援協議会総会	22. 4.27	みやま市	25	
	南筑後地域担い手・産地育成総合支援協議会総会	23. 3.16	みやま市	28	
	福岡県病害虫・雑草防除の手引き作成方針決定検討会	22. 4.28	福 岡 市	10	
	普通作物病害虫・雑草防除の手引き編集会議	22. 6.22	筑紫野市	8	
	普通作物病害虫・雑草防除の手引き編集会議	22. 8.17	筑紫野市	8	
	水稻・麦施肥基準改定会議	22. 6.28	筑紫野市	10	
	水稻・麦施肥基準改定会議	22.10. 7	筑紫野市	10	
	種子生産における 審査	麦原種圃審査（出穂期）	22. 4.14	筑 後 市	7
		麦原種圃審査（出穂期）	22. 4.21	柳 川 市	6
		麦原種圃審査（出穂期）	22. 4.22	八 女 市	6
麦原種圃審査（糊熟期）		22. 5.13	筑 後 市	1	
麦原種圃審査（糊熟期）		22. 5.18	筑 後 市	6	
麦原種圃審査（糊熟期）		22. 5.19	八 女 市	6	
麦原種圃審査（糊熟期）		22. 5.26	柳 川 市	6	
麦原種審査（生産物）		22. 6. 4	八 女 市	6	
麦原種審査（生産物）		22. 6.14	筑 後 市	7	
麦原種審査（生産物）		22. 6.21	柳 川 市	6	
水稻原種圃審査（出穂期）		22. 8.26	筑 後 市	3	
水稻原種圃審査（出穂期）		22. 8. 30	柳 川 市	3	
水稻原種圃審査（糊熟期）		22. 9.15	筑 後 市	3	
水稻原種圃審査（糊熟期）		22. 9.24	柳 川 市	3	
水稻原種圃審査（生産物）		22.10.25	筑後分場	5	
大豆原種圃審査（開花期）		22. 8.23	柳 川 市	1	
大豆原種圃審査（成熟期）		22.11. 5	柳 川 市	1	
大豆原種審査（生産物）		22.12.16	柳 川 市	1	
ハトムギ原種審査（生産物）	23. 2. 7	筑後分場	2		

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
技術指導支援	春夏作農薬展示ほ(水稲除草剤)現地巡回調査	22. 7.23	久留米市他	22
	春夏作農薬展示ほ成績検討会	22.10.26	福 岡 市	40
	もち米部会会議	22. 5.31	福 岡 市	15
	大牟田地域土壌汚染対策協議会	22. 7.13	みやま市	16
	大牟田地域土壌汚染対策協議会	23. 3.24	みやま市	16
	元気つくし技術対策会議	22. 7.27	筑紫野市	18
	元気つくし実証ほ現地検討会	22. 9. 3	久留米市	18
	元気つくし実証ほ成績検討会	22.12.13	福 岡 市	46
	元気つくし栽培基準作成会議	23. 1. 5	筑紫野市	12
	ラーメン用小麦実証ほ検討会	22. 8. 9	筑紫野市	26
	ラーメン用小麦実証ほ成績検討会	22. 8.27	筑紫野市	26
	ラーメン用小麦実証ほ設計検討会	22.10.13	福 岡 市	24
	米・麦・大豆生産改善実証ほ現地検討会	22. 9.10	八 女 市	35
	米・麦・大豆生産改善実証ほ成績検討会	23. 2. 9	福 岡 市	35
	講習会・研修会	水田農業普及指導員調査研究発表会	23. 2.22	福 岡 市
もち米部会栽培技術向上研修会		22. 8. 3	筑紫野市	120
こめこめ研修会		22.12.22	筑 後 市	250
福岡県米麦大豆づくり推進協議会推進会議		23. 2. 1	福 岡 市	85
水稻視察研修(JA 北九州)		23. 3. 7	筑後分場	10
品改筑後支部採種農家研修会		23. 3.11	筑後分場	35
筑後地区作物研究会		23. 3.28	筑後分場	12
(イグサ関係)				
生産振興	い草産地振興連絡会議	22. 4.15	大 木 町	9
	い草産地振興連絡会議	22. 5.11	大 木 町	9
	い草産地振興連絡会議	22. 6.11	大 木 町	9
	い草産地振興連絡会議	22. 9.22	大 木 町	9
	い草産地振興連絡会議	23. 1.24	大 木 町	9
	い業振興協会幹事会	22. 5.19	大 木 町	20
	い業振興協会総会	22. 5.26	大 木 町	22
	い業振興協会幹事会	23. 2.12	大 木 町	18
技術技術指針作成	いぐさ栽培暦改訂検討会	22. 5.20	筑後分場	5
	いぐさ栽培暦改訂検討会	22. 6.11	筑後分場	5
	いぐさ栽培暦改訂検討会	22. 8.18	筑後分場	4
	いぐさ栽培暦改訂検討会	22. 9. 2	筑後分場	5
	いぐさ栽培暦改訂検討会	22. 9.14	筑後分場	4
	いぐさ病害虫・雑草防除の手引き作成会議	22. 6.22	筑紫野市	6
	いぐさ病害虫・雑草防除の手引き作成会議	22. 8.17	筑紫野市	6
技術指導援助	イグサシンムシガ現地巡回調査	22. 4. 8	大川市他	5
	イグサシンムシガ現地巡回調査	22. 5. 6	大川市他	5
	イグサシンムシガ調査打ち合わせ会議	23. 1.17	筑後分場	6
講習会・研修会	実需者と産地との交流会	22.11. 4	福 岡 市	35
	審査・品評会	ブランド畳表用いぐさ栽培圃場審査	22. 7. 7	大川市他
ブランド畳表用いぐさ収量・品質審査		22. 8. 9	大 木 町	15
ブランド畳表目合わせ会		22. 9. 2	大 木 町	12

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
(野菜関係) 生産振興	なす立毛品評会	22. 4.23	みやま市	20
	博多蕾菜生産対策打ち合わせ	22. 5. 7	筑後分場	10
	博多なす品種検討会	22. 5.19	筑紫野市	20
	博多蕾菜生産販売振興対策会議	22. 5.27	福岡市	25
	アスパラガス生産販売現地検討会	22. 6.22	柳川市	29
	冬春なす生産販売会議	22. 7.13	福岡市	25
	博多蕾菜生産販売計画検討会	22. 8.10	福岡市	30
	冬春なす部会全体協議会	22. 8.24	久留米市	50
	なす専門委員会	22. 9. 7	みやま市	20
	JA ふくおか八女ナス担当者会	22. 9. 9	八女市	6
	アスパラガス専門委員会	22. 9.14	福岡市	11
	促成なす省エネ新技術支援事業検討会	22.10.15	みやま市	6
	いちご生産現地検討会	22.11. 2	みやま市	60
	促成なす省エネ新技術支援事業検討会	22.11. 2	筑後分場	6
	なす技術者協議会現地検討会	22.11. 4	八女市	11
	アスパラガス専門委員会	22.11.12	大刀洗町	20
	冬春なす生産現地検討会	22.11.16	みやま市	20
	アスパラガス生産販売振興対策会議	22.11.24	大刀洗町	31
	いちご生産現地検討会	22.12. 8	直方市	60
	技術指導援助	JA ふくおか八女ナス担当者会	22.12. 9	八女市
なす技術者協議会現地検討会		22.12.21	みやま市	20
博多蕾菜生産現地検討会		22.12. 21	筑後分場	28
いちご生産現地検討会		23. 1.27	八女市	60
アスパラガス専門委員会		23. 3. 2	福岡市	9
アスパラガス生産販売現地検討会		23. 3.25	みやま市	30
普及指導員調査研究成果発表会		22. 8. 6	福岡市	40
「あまおう」再構築プロジェクト」グループ支援会議		22. 7. 2	八女市	15
「あまおう」再構築プロジェクト」グループ支援会議		22.11. 8	みやま市	15
JA 柳川アスパラガス部会生産反省検討会		22.11.18	柳川市	23
講習会・研修会	「あまおう」再構築プロジェクト」グループ支援会議	23. 1.11	みやま市	15
	ナス高温対策視察研修 (JA ふくおか八女)	22. 9.15	筑後分場	10
	野菜茶業課題別研究会	22.11.12	名古屋市	75
	アスパラガス生産振興大会	22.12.10	みやま市	200
	ナス増収技術視察研修 (JA 柳川)	23. 1.13	筑後分場	20
ナス増収技術視察研修 (JA 南筑後)	23. 2.22	筑後分場	20	

セ 八女分場

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
[茶チーム] 生産振興・技術指導 援助	県茶生産組合連合会総会	22. 4. 2	八 女 市	50
	県茶業振興推進協議会総会	22. 4. 7	八 女 市	20
	九州お茶まつり福岡大会実行委員会事務局会	22. 5.13	筑 後 市	15
	八女地域農推協特産部会定例会	22. 5.25	八 女 市	30
	八女地域農推協総会	22. 6. 1	八 女 市	40
	県茶業振興会議	22. 6.22	福 岡 市	10
	九州茶業協議会担当者会議	22. 7. 1	八 女 市	10
	八女地域農推協特産部会定例会	22. 7. 7	八 女 市	25
	茶の施肥コスト低減対策（点滴かん水）事業	22. 7. 9	現地茶園	10
	九州茶業協議会総会	22. 7.14	福 岡 市	20
	茶の施肥コスト低減対策（点滴かん水）事業	22. 7.16	福 岡 市	10
	茶の施肥コスト低減対策（点滴かん水）事業	22. 7.23	八 女 市	10
	茶業部会八女茶活力研究会	22. 8. 4	八 女 市	30
	茶の施肥コスト低減対策（点滴かん水）事業	22. 8.10	八 女 市	10
	茶の施肥コスト低減対策（点滴かん水）事業	22. 8.18	八 女 市	10
	九州お茶まつり福岡大会実行委員会事務局会	22. 8. 5	筑 後 市	15
	九州お茶まつり福岡大会実行委員会幹事会	22. 8.20	筑 後 市	20
	八女地域農推協特産部会定例会	22. 8.20	八 女 市	25
	高級茶生産対策協議会・県茶連合同会議	22. 9.13	八 女 市	30
	八女地域農推協幹事会	22.10. 1	八 女 市	20
	九州お茶まつり福岡大会実行委員会品評会班会議	22.10. 7	八 女 市	15
	茶のくに八女玉露研究会	22.10.14	八女市黒木町	25
	八女地域農推協特産部会定例会	22.10.26	八 女 市	25
	九州お茶まつり福岡大会実行委員会品評会班会議	22.11. 4	八 女 市	15
	九州お茶まつり福岡大会	22.11. 5～7	筑 後 市	3,000
	茶のくに八女玉露研究会	22.11.30	八 女 市	25
	八女地域農推協特産部会定例会	22.12.10	八 女 市	25
	茶の施肥コスト低減対策（点滴かん水）事業	22.12.14	八 女 市	20
	八女地域農推協特産部会定例会	23. 2.10	八 女 市	25
	茶のくに八女玉露研究会	23. 2.25	八 女 市	25
	九州茶業協議会	23. 3.10	福 岡 市	25
	茶業部会総代会	23. 3.16	八 女 市	25
八女地域農推協特産部会定例会	23. 3.25	八 女 市	25	
県茶生産組合連合会総会	23. 3.28	八 女 市	50	
講習会・研修会	病害虫防除の手引き作成会議	22. 7. 2	筑紫野市	25
	県農業大学校視察研修受入	22. 7. 5	八女分場	5
	県茶連茶生葉格付け査定員研修	22. 7. 6	八 女 市	40
	県新採職員農業体験研修受入	22. 7. 6	八女分場	5
	茶業部会黒木支部研修会	22. 7.22	八女市黒木町	80
	京築地域茶業研修会	22. 7.28	豊 前 市	30
	八女地域農推協特産部会茶栽培暦検討会	22. 8. 6	八 女 市	15
	病害虫防除の手引き作成会議	22. 8.26	筑紫野市	25

指導項目	事項内容	実施時期	実施場所	対象者
共進会・品評会	八女地域農推協特産部会研修会	22. 8.23	八女市	30
	八女地域農推協特産部会茶栽培暦検討会	22. 9.16	八女市	15
	八女地域農推協特産部会現地研修会	22. 9.28	八女市	20
	八女地域農推協特産部会茶栽培暦検討会	22.10.15	八女市	15
	静岡県牧之原改良区視察研修受入	22.11.10	八女分場	30
	茶業部会土づくり研修会	22.11.15	八女市	80
	茶業部会全体研修会	22.12. 9	八女市	250
	茶業部会筑後支部土づくり研修会	22.12.27	筑後市	25
	J A清水視察研修受入	23. 1. 5	八女分場	10
	静岡大学視察研修受入	23. 2.25	八女分場	3
	九州茶業協議会現地研修受入	23. 3.11	八女分場	10
	茶業部会総代会	23. 3.16	八女市	200
	八女茶手もみ競技大会審査	22. 4. 9	八女分場	100
	黒木町茶共進会（煎茶の部）審査	22. 5. 9	八女市黒木町	20
	上陽地区茶共進会（煎茶の部）審査	22. 5.10	八女市上陽町	10
	上陽地区茶共進会（玉露の部）審査	22. 5.20	八女市上陽町	10
	黒木町茶共進会（玉露の部）審査	22. 5.24	八女市黒木町	20
	矢部村荒茶共進会審査	22. 5.26	八女市矢部村	20
	福岡県茶共進会審査	22. 6. 2-3	八女市	80
	京築地域茶共進会審査	22. 7.28	豊前市	30
	全国茶品評会出品茶（玉露・煎茶）研修会	22. 8. 6	八女市	50
	九州茶品評会準備・審査	22. 9. 1.6～9	八女市	180
	ECセンサー対策会議	22. 9. 9	八女市	15
	全国うまい玉露の淹れ方コンテスト実行委員会	22.10.25	八女市	30
	八女茶手もみ研修会	22.11.11	八女分場	100
	福岡県茶園共進会審査	22.12. 1～3	県内茶園	100
	県茶業共進会褒賞授与式・茶生産者大会	23. 1.20	八女市星野村	200
	県茶業青年の会 21世紀茶業経営研究大会	23. 1.25	八女市	120
	ECセンサー対策会議	23. 2.23	八女市	15
	全国うまい玉露の淹れ方コンテスト実行委員会	23. 2.24	八女市	30
	全国うまい玉露の淹れ方コンテスト大会	23. 3. 6	八女市黒木町	400
	福岡県茶業青年の会総会・闘茶会	23. 3. 8	八女市	100
	全国うまい玉露の淹れ方コンテスト実行委員会	23. 3.24	八女市	30
全国茶品評会対策（平坦茶園巡回）	23. 3.25	出品茶園	30	
将来の八女茶を考える会	23. 3.31	八女市	70	
[中山間地作物 チーム] 講習会・研修会	オクラ生産支援	22. 4.15	八女市黒木町	35
	ワサビ栽培講習会	22. 4.27	みやこ町	25
	ワサビ栽培講習会	22. 5.24	うきは市	12
	わさび研究会総会	22. 5.24	八女市矢部村	20
	直売用野菜栽培講習会	22. 7.16	Aコープ 八女	55
	直売用野菜栽培講習会	22. 7.20	Aコープ 黒木	28
	わさび研究会生産講習会	23. 2.18	JA 矢部支店	21
	直売用野菜栽培講習会	23. 2.22	Aコープ 黒木	34

指導項目	事項内容	実施時期	実施場所	対象者
生産振興・技術指導 援助	矢部村農業振興推進会議	22. 4. 6	矢部支所	10
	ワサビ生産支援	22. 4.12	八女分場	2
	ワサビ栽培講習会	22. 4.13	八女市矢部村	6
	直売用野菜生産支援	22. 4.20	八女分場	1
	ワサビ生産振興検討	22. 4.28	八女分場	1
	ワサビ生産支援	22. 4.29	八女市矢部村	2
	中山間地作物生産支援	22. 4.30	八女分場	1
	ワサビ生産振興支援	22. 5. 7	八女分場	3
	ワサビ生産振興支援および検討	22. 5.10	八女市矢部村	3
	中山間地振興事業検討	22. 5.14	八女分場	2
	矢部村農業振興推進会議	22. 5.18	矢部支所	9
	八女地域農業振興推進協議会幹事会	22. 5.20	八女普セ	15
	八女地域農業振興推進協議会中山間地振興部会	22. 5.21	黒木総合支所	12
	夏ギク生産支援	22. 5.27	八女市黒木町	1
	夏ギク生産支援	22. 5.28	八女市黒木町	1
	八女地域農業振興推進協議会総会	22. 6. 1	JA 八女本店	65
	八女市食料・農業・農村政策審議会	22. 6. 2	八女市役所	20
	北九州地区ワサビ導入支援	22. 6. 4	八女分場	2
	ワサビ生産支援	22. 6. 4	矢部・うきは	5
	ワサビ生産支援	22. 6. 9	八女分場	2
	中山間地作物栽培支援	22. 6.11	八女市矢部村	1
	矢部村農業振興推進会議	22. 6.22	矢部支所	10
	八女地域農業振興推進協議会花き部会	22. 6.23	八女市矢部村	11
	ワサビ等山菜導入支援	22. 7. 6	八女市矢部村	3
	中山間地域花き生産改善支援	22. 7. 9	八女市黒木町	1
	矢部村農業振興推進会議	22. 7.21	矢部支所	11
	ホオズキ生産現地検討会	22. 7.23	みやこ町	8
	小ギク導入支援	22. 7.26	八女分場	3
	八女地域農業振興推進協議会花き部会	22. 7.27	久留米市	13
	ワサビ育苗支援	22. 8. 4	八女市矢部村	6
	中山間地域花き生産改善支援	22. 8. 4	八女分場	1
	野菜普及指導員調査研究成果発表会	22. 8. 6	福岡西総合庁	70
	八女市食料・農業・農村政策審議会	22. 8.20	八女市役所	24
	ワサビ共同育苗検討会	22. 8.24	JA 矢部支店	11
	中山間地作物に係る研修会	22. 8.27	八女分場	27
	ワサビ株貯蔵法検討会	22. 8.30	八女分場	2
	矢部村山菜農業活性化会議	22. 8.30	矢部支所	12
	ワサビ等水耕栽培検討	22. 9.10	岡垣町	1
	八女地域農業振興推進協議会中山間地振興部会	22. 9.17	黒木総合支所	12
	直売用野菜生産支援	22. 9.28	八女分場	23
ワサビ施肥改善検討	22.10. 5	八女分場	1	
ワサビ生産支援	22.10. 7	うきは市	10	
ワサビ生産支援	22.10.13	JA 矢部支店	4	
ワサビ加工業者との情報交換	22.10.14	大野城市	4	

指導項目	事項内容	実施時期	実施場所	対象者
	八女市中山間地農業活性化チーム会議	22.10.15	上陽支所	18
	矢部地区農林産物販売促進研修会	22.10.19	矢部公民館	39
	ワサビ生産振興検討会	22.10.28	JA 矢部支店	28
	筑後分場、八女普及指導センターとの意見交換会	22.11. 1	八女普セ	15
	八女地域農業振興推進協議会幹事会視察研修	22.11.11	佐賀市	20
	八女市中山間地農業活性化チーム会議	22.11.16	黒木総合支所	16
	ワサビ採種改善支援	22.11.22	八女市矢部村	6
	矢部村農業振興推進会議	22.11.26	矢部支所	10
	八女地域農業振興推進協議会花き部会	22.11.26	宇美町	16
	八女地域農業振興推進協議会中山間地振興部会	22.12. 2	黒木総合支所	13
	ワサビ生産支援	22.12. 9	うきは市	20
	ワサビ採種改善支援	22.12.10	八女市矢部村	7
	矢部地区農産加工セミナー	22.12.13	JA 矢部支店	30
	ワサビ水耕栽培導入支援	22.12.15	八女分場	2
	八女市食料・農業・農村政策審議会	22.12.16	八女市役所	19
	ワサビ生産支援	22.12.20	八女市矢部村	2
	ワサビ共同研究検討会	22.12.27	山口農研セ	5
	福岡県野菜推奨品種選定検討会	23. 1. 5	農総試	6
	サトイモ品種比較支援	23. 1.12	八女分場	2
	小ギク生産振興支援	23. 1.17	八女分場	1
	矢部村農業振興推進会議	23. 1.25	矢部支所	11
	直売野菜生産支援	23. 2. 1	八女分場	1
	わさび研究会	23. 2. 1	JA 矢部支店	7
	矢部地区農産加工セミナー	23. 2. 3	JA 矢部支店	32
	八女市食料・農業・農村政策審議会	23. 2. 3	八女市役所	18
	矢部村山菜農業活性化会議視察研修	23. 2. 8-9	大分県	16
	中山間地作物導入支援	23. 2.17	八女分場	1
	中山間地花き品目課題検討	23. 2.18	八女分場	2
	矢部村山菜農業活性化会議幹事会	23. 2.18	矢部支所	10
	八女地域農業振興推進協議会花き部会	23. 2.23	八女普セ	10
	野菜担当普及指導員調査研究報告会	23. 2.25	吉塚合同庁舎	40
	矢部村山菜農業活性化会議	23. 2.28	矢部支所	18
	矢部村農業振興推進会議	23. 3. 3	矢部支所	10
	直売用野菜生産支援	23. 3.11	八女分場	2
	中山間地作物導入支援	23. 3.14	八女市矢部村	1
	八女市食料・農業・農村政策審議会	23. 3.23	八女市役所	20
	八女地域農業振興推進協議会中山間地振興部会	23. 3.24	大分県	12
	八女地域農業振興推進協議会花き部会	23. 3.28	八女普セ	10
	ワサビ生産支援	23. 3.29	八女市矢部村	1

ソ 果樹苗木分場

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実施場所	対象者	
[果樹苗木チーム] 研修・技術指導援助	キウイフルーツ専門小委員会	22. 4.26	八女市立花町	9	
	とよみつひめ苗木生産対策検討会	22. 4.30	久留米市	5	
	病害虫・雑草防除の手引き作成方針検討会	22. 5.19	県 庁	7	
	とよみつひめ苗木生産対策検討会	22. 6. 1	久留米市	13	
	病害虫・雑草防除の手引き（果樹）作成会議	22. 7. 2	筑紫野市	11	
	キウイフルーツ専門小委員会	22. 7.20	八女市立花町	10	
	とよみつひめ苗木生産対策検討会	22. 7.22	久留米市	14	
	病害虫・雑草防除の手引き（果樹）作成会議	22. 8.26	筑紫野市	11	
	果樹苗木農業協同組合研修会	22. 9.10	久留米市	30	
	とよみつひめ苗木生産対策検討会	22. 9.17	久留米市	10	
	イチジク専門委員会	22.11. 9	筑紫野市	15	
	果樹普及指導員調査研究成果発表会（前期）	22.11.12	筑紫野市	30	
	とよみつひめ苗木生産対策検討会	22.12.10	久留米市	15	
	キウイフルーツ専門小委員会	23. 1.24	八女市立花町	6	
	キウイフルーツ中期振興計画検討会、専門委員会	23. 2. 9	久留米市	15	
	果樹普及指導員調査研究成果発表会（後期）	23. 2.18	福 岡 市	30	
	県育成品種「秋王」の普及に係る担当者会	23. 3.23	福 岡 市	21	
	キウイフルーツ専門小委員会	23. 3.24	筑紫野市	10	
	生産振興・品評会・ 大会	果樹企画委員会（月 1回）	22. 4～23. 3	福岡市他	12×12
		果樹振興対策会議	22. 7. 6	福 岡 市	25
福岡苗木研究会幼苗期互評会		22. 7. 9	久留米市	40	
福岡苗木研究会成苗期互評会		22.10. 8	久留米市	40	
福岡県果樹苗木品評会		22.10.12～13	久留米市	95	
福岡苗木研究会台木調査		22.11.16	久留米市	40	
果樹振興対策会議		22.11.26	福 岡 市	27	
福岡苗木研究会互評会表彰式		22.12. 3	久留米市	40	
福岡県果樹苗木品評会表彰式		23. 1.18	久留米市	95	
福岡県苗木農業協同組合総会		22. 7.23	久留米市	95	
協議会・総会	果樹ウイルスフリー苗木供給推進会議	22. 7.26	久留米市	15	
	福岡苗木研究会総会	22.10. 8	久留米市	40	
	果樹ウイルスフリー苗木供給推進会議	23. 2.21	久留米市	15	
	[花木チーム] 研修・技術指導援助	TIU 技術援助	22. 4.14	苗木分場	4
		カナメブランチ技術援助	22. 4.21	苗木分場	5
		FCT 技術援助	22. 4.26	苗木分場	2
		FCT 技術援助	22. 4.27	苗木分場	2
		FCT 技術援助	22. 4.28	苗木分場	2
		カナメブランチ技術援助	22. 4.30	苗木分場	6
		スモークツリー研究会	22. 5.11	苗木分場	2
クリスマスローズ研究会		22. 5.13	苗木分場	2	
TIU 技術援助		22. 5.19	苗木分場	2	
スモークツリー研究会		22. 5.21	苗木分場	5	

指 導 項 目	事 項 内 容	実 施 時 期	実 施 場 所	対 象 者
	アジサイブランチ技術援助	22. 5.24	苗木分場	2
	アジサイブランチ技術援助	22. 5.26	苗木分場	2
	FCT 技術援助	22. 5.28	苗木分場	2
	TIU 技術援助	22. 5.28	苗木分場	2
	スモークツリー研究会	22. 6. 1	苗木分場	2
	アジサイブランチ技術援助	22. 6. 3	苗木分場	2
	FCT 技術援助	22. 6. 4	苗木分場	3
	アジサイブランチ技術援助	22. 6. 7	苗木分場	2
	TIU 技術援助	22. 6.17	苗木分場	2
	アジサイブランチ技術援助	22. 6.22	苗木分場	2
	クリスマスローズ現地巡回	22. 6.23	久留米市	6
	FCT 技術支援	22. 7. 2	苗木分場	2
	クリスマスローズ研究会技術支援	22. 7. 6	苗木分場	2
	クリスマスローズ研究会技術援助	22. 7. 8	苗木分場	2
	スモークツリー研究会技術支援	22. 7.14	苗木分場	2
	TIU 技術援助	22. 8. 3	苗木分場	2
	FCT 技術支援	22. 8. 7	苗木分場	2
	FCT 技術支援	22. 9. 6	苗木分場	2
	FCT 技術支援	22. 9.21	苗木分場	2
	カナメブランチ技術支援	22.10. 1	苗木分場	7
	クリスマスローズ研究会ほ場巡回	22.11.12	久留米市	5
	クリスマスローズ研究会技術指導	22.11.24	苗木分場	2
	FCT 技術支援	22.12.21	苗木分場	2
	TIU 技術支援	22.12.22	苗木分場	4
	クリスマスローズ研究会ほ場巡回	22.12.27	久留米市	5
	クリスマスローズ研究会技術支援	23. 1.12	苗木分場	2
	クリスマスローズ研究会技術支援	23. 1.14	苗木分場	2
	TIU 技術支援	23. 2. 7	苗木分場	2
	カナメブランチ技術支援	23. 2.10	苗木分場	2
	TIU 技術支援	23. 2.16	苗木分場	5
	TIU 技術支援	23. 2.23	苗木分場	5
	FCT 技術支援	23. 2.24	苗木分場	2
	アジサイブランチ技術支援	23. 2.25	苗木分場	2
	TIU 技術支援	23. 3. 2	苗木分場	5
	TIU 技術支援	23. 3. 9	苗木分場	5
	FCT 技術支援	23. 3.14	苗木分場	2
	TIU 技術支援	23. 3.16	苗木分場	7
	TIU 技術支援	23. 3.23	苗木分場	2
生産振興・品評会 協議会・総会	星野村緑化生産出荷組合連合会圃場共進会	22.10.29	八女市星野村	12
	FCT 報告会	22. 6. 4	苗木分場	10
	花振協花き花木研究会	22. 6.10	苗木分場	8
	J A にじコンテナ部会総会	22. 8. 9	久留米市	30

(2) 農業大学校講義

講義科目名	時間	担当部名	講師名
農産物流通加工論 農業経営演習	15 14	食品流通部 "	池田 浩暢、江嶋 亜祐子 手嶋 洋司
生物工学演習	14	バイオテクノロジー部	内村 要介
土壌肥料論	16	土壌・環境部	兼子 明
病害虫防除論	16	病虫害部	堤 隆文
栽培各論（水稻基礎） 雑草防除論 育種学	15 15 15	農産部 " "	井上 敬 内川 修 馬場 孝秀
生物工学演習	8	野菜育種部	末吉 孝行、古賀 武
野菜各論（イチゴ） 野菜各論（ナス） 野菜各論（トマト）	15 15 15	野菜栽培部 " "	奥 幸一郎 小熊 光輝 龍 勝利
生物工学演習 花き開花調節論	6 15	花き部 "	巢山 拓郎 中村 知佐子、佐伯 一直
果樹各論（ブドウ） 果樹各論（カンキツ）	15 15	果樹部 "	白石 美樹夫、村本 晃司 藤島 宏之、大倉 英憲
受精卵移植概論 大家畜論 中小家畜論	15 15 15	家畜部 " "	磯崎 良寛、笠 正二郎、森 美幸 馬場 武志、森永結子、浅岡 壮平、林 武司 西尾 祐介、山口 昇一郎
家畜衛生論 飼料作物論	15 15	畜産環境部 "	浅田 研一 棟加登 きみ子、手島 信貴

(3) 農業総合試験場における指導普及業務（まとめ）

ア 延日数

項目	企画 情報部	食品 流通部	バイオ テクノロジー 部	土壌・ 環境部	病害 虫部	農産部	野菜 育種部 野菜 栽培部	花き部	果樹部	家畜部	畜産 環境部	豊前 分場	筑後 分場	八女 分場	果樹 苗木 分場	計
行政 対応	0	19	2	25	60	85	20	17	35	32	65	38	33	77	38	546
指導 員対応	2	13	3	29	18	46	29	21	53	48	28	57	77	21	48	493
農家 対応	0	27	2	10	20	32	26	30	36	22	63	36	12	67	76	459
農大 講義	1	13	8	4	4	16	28	6	16	17	8	0	0	0	0	121
計	3	72	15	68	102	179	103	74	140	119	164	131	122	165	162	1,619

イ 延人数

項目	企画 情報部	食品 流通部	バイオ テクノロジー 部	土壌・ 環境部	病害 虫部	農産部	野菜 育種部 野菜 栽培部	花き部	果樹部	家畜部	畜産 環境部	豊前 分場	筑後 分場	八女 分場	果樹 苗木 分場	計
行政 対応	0	201	22	105	1,050	1,520	345	288	653	270	570	968	155	2,126	160	8,433
指導 員対応	75	209	9	366	402	1,020	197	107	880	71	139	621	1,553	604	296	6,549
農家 対応	0	595	2	75	361	960	591	766	804	341	162	1,452	867	1,801	786	9,563
農大 講義	27	110	160	48	80	160	350	74	80	47	32	0	0	0	0	1,168
計	102	1,115	193	594	1,893	3,660	1,483	1,235	2,417	729	903	3,041	2,575	4,531	1,242	#####

(注)

- 1 行政対応…振興大会、技術指針作成会議等行政が主に主催するもの
- 2 指導員対応…展示ほ現地指導、普及指導員やJA営農指導員等を対象としたもの
- 3 農家対応…講習会、参観者案内、研究会などの主に農家を対象としたもの
- 4 農大講義…1日あたり2時間とし、1クラス受講者数を乗じて算出

V 研 修

V 研 修

1 研修生及び実習生の受入れ

(1) 普及指導員留学派遣研修の受入れ

受 入 部 署	氏 名	普及センター	研 修 部 門	期 間
花 き 部	中 村 理 恵	福 岡	花 き	22. 8.17 ~ 22.11. 9
果 樹 部	谷 川 宏 行	朝 倉	果 樹	22.11. 1 ~ 22.11.30
野菜栽培部	山 田 恭 子	久 留 米	野 菜	22.10. 5 ~ 23. 1.28
花 き 部	近 藤 孝 治	久 留 米	花 き	22.10.12 ~ 22.11. 9
果 樹 部	豊 福 ユ カ リ	久 留 米	果 樹	22. 9.21 ~ 22.10.20
家 畜 部	竹 村 陽	久 留 米	畜 産	22. 6. 4 ~ 22. 7. 1
農 産 部	松 下 幸 平	久 留 米	水 田 農 業	22. 8.23 ~ 22. 9.17
花 き 部	樋 口 俊 輔	飯 塚	花 き	22.10.25 ~ 22.11.22
野菜育種部	大 西 亮 樹	南 筑 後	野 菜	22.11.12 ~ 23. 1.28
花 き 部	久 松 美 咲	南 筑 後	花 き	22. 9. 6 ~ 23. 1.18
野菜栽培部	上 村 香 菜 子	八 女	野 菜	23. 1.17 ~ 23. 2.18
農 産 部	瓜 生 智 典	京 築	水 田 農 業	22. 7.12 ~ 22. 8. 6

(2) 実習生の受入れ

受 入 部 署	氏 名	期 間
家 畜 部	大 西 正 志	22. 4.12 ~ 23. 3.25
八 女 分 場	永 松 優 次	22. 7. 1 ~ 23. 6.28
農 産 部	寺 嶋 純 一	22.12. 3 ~ 23.11.30

(3) 海外技術研修生の受入れ

該 当 な し

(4) 一般研修生の受入れ

受 入 部 署	氏 名	団 体 名 等	期 間
花 き 部	植 松 紘 一	長崎県農林技術開発センター	22. 5.31 ~ 22. 6. 4
農 産 部	野 田 遥	九州大学農学部生物資源環境学科	22. 8.12 ~ 22. 8.25
野菜育種部	松 下 竜 一	山口大学大学院農学研究科	22. 8.23 ~ 22. 9. 3
病虫害部	宮 本 和 茂	九州産業大学経営学部産業経営学科	22. 8.23 ~ 22. 9. 3
土壌・環境部	吉 富 知 佳 子	福岡女子大学人間環境学部環境理学科	22. 8.24 ~ 22. 9. 3
バイオテクノロジー部	永 石 由 季	佐賀大学農学部応用生物科学科	22. 8.30 ~ 22. 9.10
バイオテクノロジー部	後 藤 彩 緒	福岡大学工学部化学システム工学科	22. 9. 6 ~ 22. 9.13
花 き 部	川 原 裕 貴	福岡工業大学工学部生命環境科学科	22. 9. 6 ~ 22. 9.17
野菜栽培部	松 本 尚 之	九州大学農学部生物資源環境学科	22. 9. 6 ~ 22. 9.17
農 産 部	原 野 圭 輔	九州大学農学部生物資源環境学科	22. 9.13 ~ 22. 9.17
農 産 部	長 内 克 真	九州大学農学部生物資源環境学科	22. 9.13 ~ 22. 9.17
野菜育種部	八 尋 衣 里 奈	九州大学農学部生物資源環境学科	22. 9.13 ~ 22. 9.17
果 樹 部	宮 崎 理 子	九州大学農学部生物資源環境学科	22. 9.21 ~ 22. 9.30
食品流通部	寺 田 拓 哉	久留米工業高等専門学校専攻科	22.10.12 ~ 22.12.10

2 研究職員の派遣研修

(1) 依頼研究員研修

所 属	氏 名	派 遣 先	期 間	研 修 課 題
病 害 虫 部	清 水 信 孝	独立行政法人農業・食品産業 技術総合研究機構 中央農業総合研究センター 総合的害虫管理研究チーム	22. 8. 30～22. 11. 26	フェロモンに誘引されるダ イズ加害性カメムシ類の生 理・生態的特性の解明及び 評価手法の習得
野 菜 育 種 部	片 山 貴 雄	独立行政法人農業・食品産業 技術総合研究機構 野菜茶業研究所 野菜育種研究チーム	22. 10. 1～22. 12. 28	イチゴの品種育成に関し て、倍加半数体法などを用 いた育成技術の習得
家 畜 部	山 口 昇 一 郎	独立行政法人農業・食品産業 技術総合研究機構 動物衛生研究所 生産病研究チーム	22. 9. 21～22. 12. 17	豚人工授精における子宮内 の炎症反応に関する研究

(2) 短期研修

所 属	氏 名	派 遣 先	期 間	研 修 名
畜産環境部	福原 絵里子	環境調査研修所	22. 6. 24～ 7. 9	平成22年度環境省環境 調査研修所研修 機器分析研修：Aコース

(3) 大学院 博士後期課程 社会人枠入学者

平成23年3月31日現在

所 属	チ ーム	氏 名	大 学 院 名	期 間
企画情報部	企 画 課	塚田輝貴	九州大学大学院生物資源環境科学府 植物資源科学専攻	H20. 10～23. 9 (見込)
果 樹 部	果 樹 栽 培	大倉英憲	鳥取大学大学院連合農学研究科生物 生産科学専攻	H16. 10～23. 3 (見込)
家 畜 部	工学・養豚	森 美幸	九州大学大学院生物資源環境科学府 動物資源科学専攻	H21. 10～24. 9 (見込)
筑後分場	野 菜	森山友幸	九州大学大学院生物資源環境科学府 植物資源科学専攻	H21. 4～24. 3 (見込)
八女分場	茶	吉岡哲也	九州大学大学院生物資源環境科学府 生物資源開発管理学専攻	H20. 10～23. 9 (見込)

VI 表彰及び海外出張

VI 表彰及び海外出張

1 職員の表彰等

氏名	所属	項目	内容
水上 宏二	野菜栽培部	園芸学会九州支部賞進歩賞	イチゴにおける緑色蛍光灯の花芽分化への影響と夜行性蛾類抑制効果
森山 友幸	筑後分場	園芸学会九州支部賞進歩賞	イチゴにおける緑色蛍光灯の花芽分化への影響と夜行性蛾類抑制効果
平田 祐子	筑後分場	園芸学会九州支部賞進歩賞	イチゴにおける緑色蛍光灯の花芽分化への影響と夜行性蛾類抑制効果
渡邊 辰彦	果樹部	園芸学会九州支部賞進歩賞	ニホンナシ‘幸水’の加温栽培における発芽不良障害の発生実態
古庄 雅彦	バイオテクノロジー部	研究表彰	ラーメン用小麦新品種「ちくしW2号」の育成
塚崎 守啓	食品流通部	研究表彰	ラーメン用小麦新品種「ちくしW2号」の育成
宮崎 真行	農産部	研究表彰	ラーメン用小麦新品種「ちくしW2号」の育成
松江 勇次	場長	研究表彰	ラーメン用小麦新品種「ちくしW2号」の育成
池田 明久	農産部	農林水産部長感謝状	ラーメン用小麦新品種開発のための系統管理、製粉適性作業の効率化
仲山 妙子	農産部	農林水産部長感謝状	ラーメン用小麦新品種開発のための系統管理、製粉適性作業の効率化
古江 洋幸	農産部	農林水産部長感謝状	ラーメン用小麦新品種開発のための系統管理、製粉適性作業の効率化
岡松 陽介	農産部	農林水産部長感謝状	ラーメン用小麦新品種開発のための系統管理、製粉適性作業の効率化
林田 達也	豊前分場	農学博士号取得	ツケナ(Brassica napus)の化学形態別カルシウム濃度に及ぼす栽培方法の影響～人体に利用されやすい化学形態のCa濃度を高めるツケナの栽培方法を明らかにした。
藤 富 慎一	土壌・環境部	農学博士号取得	農耕地における窒素、カリウム等肥料成分の溶脱の実態と機構を解明した。

2 海外出張等

該当なし

[附属資料]

- 1 作柄經過概要
- 2 気象表

1 作柄経過概要

(1) 水稲

移植後～7月3半旬までの平均気温は平年より1℃程度高く、日照時間は平年より20%少なく降水量が多かった。梅雨明け(7月17日頃)後は好天が続き、8月4半旬までの平均気温は平年より2～3℃程度高く、日照時間は平年より多く著しい高温で経過した。

出穂期は、夢つくしでは平年並、つくしろまんでは前6年比より3日早く、ヒノヒカリでは平年より1～2日早かった。

8月5半旬以降の気温は平年より1～3℃程度高く経過した。日照時間は9月6半旬までは多雨で推移し、その後は平年並～やや寡照で推移した。

出穂後20日間の平均気温は、夢つくしでは29.7℃と高く(前10年平均差+2.3℃)、元気つくしおよびつくしろまんでは29.3℃(前10年平均差+2.8℃)、ヒノヒカリでは27.9℃(前10年平均差+2.8℃)であった。出穂後20日間の積算日照時間は前10年平均より22～38%多かった

成熟期は、夢つくしでは平年より4日早く、つくしろまんでは前6年と比べて6日早く、ヒノヒカリでは2～5日早かった。

夢つくしでは、千粒重が平年よりやや軽かったため、収量は平年より4%少なかった。つくしろまんでは、前6年と比べて㎡当たり籾数および登熟歩合がやや優れたため、収量は前6年と比べて4%多かった。ヒノヒカリの収量は㎡当たり籾数がやや少なかったことから、平年並～5%少なかった。あきさやかの収量は平年並であった。

検査等級(相当)は、夢つくしは2等中、つくしろまんは2等下、元気つくしは1等中～下、ヒノヒカリは1等下～2等上、あきさやかは1等中～下であった。2等以下の格付理由は、乳白、心白粒および基部未熟粒の発生であり、登熟期の高温の影響によるものと考えられた。病害虫の被害はみられなかった。

(2) 麦類(22年産)

播種期から1月中旬までの平均気温は平年並で、日照時間は平年より20%、降水量は平年より50%程度少なかった。その後、平均気温は高めに推移し、1月下旬～2月下旬までの平均気温は平年より約3℃高く、日照時間は15%程度多く、降水量は15%程度多かった。3月以降は曇りや雨の日が多く、3月上旬～4月上旬までの平均気温は平年より約1℃程度高く、日照時間は平年より10%程度少なく、降水量は平年より30%程度多かった。麦の茎

数は平年よりやや多かった。出穂期は小麦は平年より3～4日早く、大麦は平年並であった。3月27日早朝の低温による凍霜害が発生したが被害は軽微であった。出穂期以降、4月下旬までは降雨が多く低温寡照で推移し、5月以降は高温多照で推移したことから、麦は枯れ熟れ気味に成熟した。4月中旬～5月下旬までの平均気温および日照時間は平年並で降水量は平年より30%程度多かった。病害の発生はみられなかった。小麦、大麦ともに成熟期は平年より2～6日遅く、3～4月の多雨による影響で、穂数および粒数は平年より少なく、千粒重は平年より軽く、収量は小麦、大麦とも平年と比べて20%程度少なかった(麦作況試験)。検査等級は小麦、裸麦の1等比率は92～94%、食糧用大麦は80%、ビール大麦の2等比率は95%であった。

(3) 大豆

播種後、記録的な高温で経過した。降水量は7月3半旬に400mmを超える集中豪雨があったものの、7月4半旬から8月2半旬の降水量は著しく少なく乾燥状態が続いた。播種から9月5半旬までの平均気温は平年より2.4℃高く、日照時間は24%長く、降水量は41%多かった。9月6半旬以降も高温で経過し、平均気温は平年より約2℃高かった。日照時間は平年より少なく、降水量は10月1～4半旬が少なく、ほ場の乾燥状態が続いた。

7月9日播の成熟期は平年並であった。成熟期における主茎長および主茎節数は平年並で、分枝数は平年より24%少なかった。台風の襲来はなかったものの、9月23日および27日の大雨により倒伏が少～中程度発生した。登熟期の乾燥により稔実莢数は平年比93%、整粒数は平年比88%と少なく、百粒重は平年比96%と軽くなり、子実重は32.1kg/aと平年に比べて12%少なかった。検査等級は大粒および中粒ともに1等と優れた。

7月26日播の成熟期は、7月9日播に比べて4日遅く、主茎長は短く、主茎節数は少なく、百粒重は軽かったが、稔実莢数および整粒数は多く、子実重は31.5kg/aと7月9日播と同程度であった。検査等級は大粒および中粒ともに1等と優れた。

病害虫による被害は、葉焼病と紫斑病が少程度で、カメムシ類は少程度であった。

(4) いぐさ

筑後みどりの茎数及び茎長は、3月の気温が高かったため4月1日ではそれぞれ平年比109%、116%であったが、5月中旬の先刈り以降平年並みで経過した。

5月下旬以降7月中旬の収穫期まで曇りや雨の日

が多く日照時間が短かったため、収穫期の茎数は
平年比106%とやや多かったものの、120cm以上の
「長い」割合は低くなった。また茎の太さがや
や細く1m乾茎重が減少したため、収量は平年比9
5%と少なくなり、120cm以上収量は平年比72%と減
収となった。

品質面では先枯歩合は少なかったが、部分変色
茎率及び花序着生率は多かった。硬度はやや硬か
った。

(5) 茶

ア 一番茶

月別の平均気温は、平年に比べ1月は並み、2・3
月は高く、4月は低く推移した。1月から4月までの
降水量の合計は、平年の131%であった。萌芽期は
平年より7日早く、前年と同じ3月31日であった。
摘採日は平年より1日、前年より6日遅い5月7日で、
萌芽期から摘採日までの期間は平年より8日、前年
より6日長い37日間となった。生葉収量は平年より
16%少なく、前年より1%多い476kg/10aであった
(出開度72%)。新芽数は平年より21%少なく、
百芽重は26%多かった。

イ 二番茶

5月と6月の平均気温は平年並みで推移し、5月の
降水量は平年の111%とやや多く、6月は92%とや
や少なかった。摘採日は平年と同じで、前年より5
日遅い6月23日で、一番茶摘採から要した期間は平
年や前年より1日短い47日間であった。生葉収量は
平年より21%、前年より16%少ない484kg/10aであ
った(出開度71%)。新芽数は平年より10%少な
く、百芽重は5%多かった。

(6) 野菜

ア イチゴ

22年度は、生産者が55戸減り1,749戸となり、作
付面積は約357.9ha(前年比98%)で栽培が行われ
た。

育苗期は、春先の低温によりランナーの発生が
遅れ、苗数確保のため切り離しが梅雨時期にかか
ったが平年並みの苗に仕上がった。炭そ病の発生
は、7月の早い段階から汚斑が見られたが、発病株
の除去や防除の徹底により発生拡大を防ぐことが
できた。

早期作型(9月15日～9月18日定植)では、育苗
期の高温により花芽分化の遅れやバラつきが見ら

れた。普通作型(9月19日以降の定植)では、9月
の残暑の影響により花芽分化が遅れ、頂果房の花
芽分化は昨年より4～5日遅い9月24日頃であった。

定植後の寒冷紗被覆、活着後のかん水制限など
の2番果房分化促進対策が多く生産者で実施さ
れた。9月下旬以降の気温は平年よりやや高い程度
に落ち着き、少雨傾向となった。早期定植ほど初
期成育が旺盛になったが、10月時点では昨年並み
からやや遅い生育となった。普通作型では、定植
が遅れたことで昨年より生育が遅れた。早期作型
では2番果房までの果房間葉数が5～6枚程度であ
ったが、株や個人間でばらつきが大きかった。普
通作型でもばらつきはあるものの、4～6枚の果房
間葉数で昨年より遅い分化であった。

収穫開始は、11月15日前後で平年並みであつた
が11月25日までの出荷量は少なく推移した。11月
20日頃からの好天の影響により、早期作型の出荷
が一気に揃い急増した。12月下旬から1月下旬まで
少日照、寒波が継続したため、果実肥大は良好で
3L比率が例年より10%以上高くなったが、出荷量
は伸び悩んだ。2番果房は早期作型で1月中旬から
収穫が見られ始めたが、花芽分化のばらつきと寒
波の影響を受け、出荷の谷こそできなかったが2月
下旬まで増量しきれずダラダラした出荷となった。
2月下旬～3月初旬に気温が急上昇したため、遅れ
ていた2番果房の着色が一気に進み出荷量が急増
した。3番果房は葉の展開が鈍く、3月以降は晴天
が続いたが比較的気温が低く推移したため大果傾
向で、4月上中旬に大きな出荷のピークとなった。
4番果房はばらつきが大きく、出揃いは5月中旬以
降であった。病害虫の発生は、寒波の影響で暖房
機の稼働時間が長くなったため病害の発生は少な
かったが、ハダニ類の発生が目立った。

10月～5月上旬までの累計で、数量12,771 t(前
年比107%)、単価1,136円/kg(同98%)、金額
145億円(同105%)で1農家当たりの数量、金額は
「あまおう」導入以来最高となった。

イ 冬春ナス

平成22年産の冬春ナスは、生産者が11戸減り
(461戸)、作付面積は約107ha(前年比98%)で
栽培が行われた。

定植は中山間地の8月20日頃から開始され、ピー
クは9月中旬頃と前年と同様の定植時期となった。
8月下旬から9月上旬まで記録的高温となり、早植
え作型については1～2番花の着果不良が見られた。

9月中旬以降の定植分は活着もスムーズで順調な生育となった。

その後10月以降は天候に恵まれ主枝の生育および着果は良好であった。12月中旬以降は日照不足と気温低下により樹勢低下、側枝発生や伸長が鈍くなり着果数は減少した。

厳寒期は、周期的な寒波により低温・日照不足が続いたため芽の動きが鈍く花数は減少、また花質の低下や着果不良、果実品質の低下（デコボコ果、赤果、細果、曲り果）が見られた。省エネ対策が継続的に取り組まれているが、暖房機の設定温度は依然として低い状況であった。

3月からは気温も上昇したため着果・花数が増え始めたものの急な樹勢の強まりで石ナスの発生が目立った。出荷量は増加したものの、急な成りこみにより樹勢低下のほ場も見られた。

5月からは出荷量の大きな山谷なく推移したが、5月10日以降の天候不順で出荷量が急減した。

以上から、10月～6月中旬までの累計で、数量9,718 t（前年比101%）、単価350円/kg（同94%）、金額34億円（同95%）となった。

ウ 冬春トマト

平成22年産の冬春トマトは、生産者が1戸増え（231戸）、作付面積は68ha（前年比99%）で栽培が行われた。

土耕栽培では10月上旬をピークに定植が行われ台風および気象災害も少なく順調に経過した。養液栽培では、7月下旬から定植が始まり8月下旬～9月上旬の高温で、草勢の低下、着果数減少などが見られた。

1月以降は低温・日照不足および着果負担から草勢が低下傾向となったが、土耕栽培の出荷が出そろったことから出荷量は前年並みとなった。

4月以降は草勢も回復し、生育・出荷量とも比較的良好に推移した。例年4月下旬から発生が問題となる、花芽分化時の低温遭遇が原因と考えられる軟化玉やガザ玉の発生がやや多く、6月以降は前年に比べてやや少ない出荷量となった。

以上から、10月～6月下旬までの累計で、数量8,876 t（前年比104%）、単価285円/kg（同90%）、金額25.3億円（同94%）となった。

エ 施設キュウリ

平成22年産は、生産者数が88戸、栽培面積は抑制作型9.4ha、促成作型12.0ha、半促成作型7.5haで栽培が行われた。

抑制作型では「ズバリ163」、「エクセレント353」、促成作型では「ハイグリーン21」、「輝世紀」、半促成作型では「ズバリ163」、「極光」が主要品種として作付けされた。

抑制作型(8月上～中旬定植)は、猛暑の影響により、花とびが生じ果形も悪く、出荷開始の9月は収量、秀品率ともに前年を下回った。出荷量は11月上旬頃まで減少傾向にあったが、その後は順調な出荷となった。促成作型(10月中旬定植)は、11月上旬から出荷がはじまり、年末まで昨年を上回る出荷が続いた。しかし、12月下旬からの日照不足と1月の記録的な寒波の影響で草勢は低下、花とびや流れ果が多く発生し、出荷量は減少した。2月以降になると、草勢は回復し順調な出荷が続いていたが、5月中旬の曇天と6月の梅雨入り後は昨年を下回る出荷となった。半促成作型(2月上旬定植)は、1月の寒波の影響で定植時の苗が小さく、そのため定植を遅らせたところもあった。出荷は3月10日頃からはじまり、昨年を上回る出荷が続いた。

病害虫については、退緑黄化病、黄化えそ病の発生は比較的少なかった。多くの産地で紫外線カットフィルムや防虫網がスリップス、コナジラミの侵入防止対策として導入が進んでいる。また、捕食性天敵“スワルスキーカブリダニ”の導入がはじまり、一定の効果を上げている。

9月～7月上旬までの系統共販実績は、数量3,544 t（前年比103%）、単価236円/kg（同97%）、金額8.4億円（同100%）となった。

(7) 花き

本年の気温は4月中～下旬は前年よりかなり低く、梅雨入りからは前年より高く推移した。特に8月は気温が35℃を越す日の多い記録的な猛暑となり、9月以降も残暑が続いた。降水量は、5～6、10月は前年より少なく、4、7、9月は前年より多くなった。とくに、梅雨明け直前の7月中旬は集中豪雨に見舞われた。

このように、梅雨明け直前の集中豪雨、梅雨明け後の高温等栽培の気象条件としては過酷なもので、花き類の生育や開花に大きな影響を与えた。

病害虫の発生は、気温が高く推移したものの、適度に雨量があったことからハダニの発生は前年並みであったが、ヤガ類の発生が多くなった。

ア トルコギキョウ

本県の主要な作型である秋出荷作型(11～12月)

は8月の定植初期の気温が高かったため草丈はやや低いものの、生育後期の好天に恵まれ、灰色カビ病等の病害やブラスチングの発生は少なく、品質は良好であった。

(8) カンキツ

発芽は、平年よりやや早かったが、開花期は、平年より3日～6日遅かった。着花量は並からやや少なく、生理落果は並で、着果量は並からやや少なくなった。果実肥大は、全般的に平年並みで推移した。果実品質は、温州ミカン、中晩柑いずれの品種も糖度は低く推移し、クエン酸は平年並みからやや低めで推移した。年末からの低温により収穫の遅い中晩柑では果実の苦味が確認された。また、落葉等低温による被害が全般で認められた。

(9) ブドウ

ブドウ「巨峰」は平年に比べて発芽が5日遅く4月5日で、開花盛期も平年より4日遅い5月23日であった。着花量および結実量は平年並みであった。果粒肥大は平年並みであったが、着色開始期以降の日照時間が少なく、無加温および露地で着色不良であった。

収穫最盛期は前年より2日遅い8月27日で、糖度および酸含量は平年並みであった。雨よけや露地栽培では裂果もやや多かった。

収穫後、9月中旬にべと病、ハスモンヨトウの発生が多くみられた

(10) カキ

発芽期はいずれの品種も平年より3～9日早く、前年より1～4日早かった。「西村早生」等の発芽が早い品種では、3月27日の降霜により芽が枯死したものも見られた。着蕾数は、「松本早生富有」では平年に比べてやや少なかった他は、いずれの品種も概ね平年並みであった。開花盛期は、「西村早生」で前年より5日、平年より1日遅く、「富有」で前年より7日遅く、平年より1日遅かった。開花期間中は曇雨天日が多く、開花後の気温も上がらなかったため、結果率は平年より低く、特に「伊豆」や「早秋」では著しく結果率が低くなった。開花期が昨年より遅く、開花後もここ数年では気温が低かったことに加え、7月中旬～9月中旬の乾燥により、果実肥大は平年比95～97%、前年比93～99%と小玉傾向で推移した。収穫盛期は、8～9月中旬まで気温が高く推移し着色が遅延したことから、「西村早生」、「早秋」、「伊豆」、

「松本早生富有」では平年より5日程度遅れたが、「太秋」および「富有」では9月下旬以降の気温低下に伴い平年比1日の遅れにとどまった。糖度は「松本早生富有」以降の品種で平年より1度程度高く、食味は概して良好であった。「伊豆」、「松本早生富有」を中心に樹上軟化が散見されたが、平年より少なかった。

病害虫では、フジコナカイガラムシおよびカメムシ類は平年並からやや少なかった。しかし、7月以降に炭疽病が多発し、果実にも被害が及んだ。

(11) ナシ

2月以降の気温が非常に高く、発芽、開花期は平年より7～10日程度早かった。しかし、3月下旬に急激に冷え込み、花器発育の早い「豊水」で霜害がみられた。開花期間は好天に恵まれ、気温も高かったため結実量は良好であったが、開花後1ヶ月は一転して気温が低下し、前年、平年に比べて果実肥大は著しく劣った。

6月以降は気温も高くなり、適度な降雨も得たが果実肥大は回復せず、収穫期の平均果実重は「幸水」が334g(平年比85%)、「豊水」が421g(平年比92%)と過去10年で最小であった。しかし、糖度は両品種とも12.7度と平年より高く、良食味であった。「豊水」のみつ症の発生は少なかったが、8月の気温が非常に高かったため日焼け果が平年より多かった。

病害は黒星病がわずかに発生したが、平年よりも少なかった。害虫は梅雨明け後よりヤガ類の発生が増え、平年よりも被害果が目立った。

(12) キウイフルーツ

発芽、展葉とも前年、平年より遅かったが、一部の結果母枝先端付近の新梢で晩霜による被害が発生した。開花盛期は前年より10日、平年より3日遅かった。着花数は平年並みで、側花は少ない傾向にあった。がく割れ期以降の天候不良により花腐れ細菌病の発生が目立った。開花期が遅かったことから、果実の初期肥大は不良で、その傾向は収穫期まで続き、果径は平年より小さく、果実重も平年よりやや軽かった。追熟果実の糖度は15.9とほぼ平年並みで、クエン酸含量は平年よりもやや低かった。果実軟腐病の発生は少なく、クワシロカイガラムシの果実への寄生も一部見られたがその程度は軽微であった。

(13) スモモ

発芽期は、2月の高温の影響で平年より6～10日早く、開花盛期も平年より12日程度早かった。開花期および、その後の低温により結実がやや悪く、生育が遅れた。収穫期は、「大石早生李」が平年より1～2日遅く、「ソルダム」が平年より4～5日遅かった。成熟期の糖度は、「大石早生李」が12.0、「ソルダム」が13.1といずれも平年を上回り、良食味であった。

(14) モモ

2～3月の気温が平年より1.5～2℃ほど高く、平年に比べて発芽期は3～4日、満開期は3～5日早かった。その後は4月の気温が低く降水量も多かったため結実は全般に不良となったが、一部の品種を除いて結果量は確保できた。収穫盛期は平年より3～6日ほど遅かった。新梢伸長は平年に比較して劣った。病害虫では、7月中旬に灰星病が多く発生した。果実品質は、早生種の糖度が低く食味が劣ったが、中晩生種は大玉傾向で糖度が高くなり、収穫期の遅い品種で食味が優れた。

(15) イチジク

3月下旬の晩霜や4月の低温の影響で、発芽は前年より2～3日遅かった。「柵井ドーフィン」と「とよみつひめ」では、晩霜害による枝枯れや発芽不良が発生した。発芽後も5月の気温が低かったため、その後の生育も遅れ、前年より着果開始期が遅く、収穫開始期も11～12日遅かった。台風の上陸がなかったことから傷果の発生は少なかった。各品種とも前年より果重が小さく、「柵井ドーフィン」、「蓬萊柿」は着色割合や糖度も低めであったが、「とよみつひめ」の糖度は前年より高く、着色も前年、平年と同等以上であった。病害虫は7月に疫病、9月にさび病の発生があったが、ショウジョウバエの発生は少なかった。

(16) 果樹苗木

カンキツ苗木では、掘り取り、接ぎ木時期の3～4月に降雨が多く作業が遅れがちとなった。5～6月前半までは気温の低い日が多く初期生育は遅れ気味で推移した。4～5月の強風でマルチがあおられ、カラタチの主幹部に障害を受け、上部の枯れ込む障害が一部の園地で発生した。6月末

～7月前半は降水量が多く、特に7月13、14日は降水量が200mmを超え、河川の一部が氾濫した。この時期に、苗木の伸長が抑制され、一部の品種（日南1号、不知火、はるみ等）で葉身の先端が枯れ込み、落葉する現象がみられた。8～9月は記録的な高温が続いたものの適度に夕立があり、極端な干ばつとはならず、生育はほぼ順調に推移した。台風は3年連続で襲来がなかったため、苗木でのかいよう病の発生は少なかったが、秋口、台木のカラタチに一部多発した。ハダニ等虫害の発生は少なかった。

2 気象表〔2010年1月～2010年12月〕

(1) 太宰府（アメダス）

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1月	1	4.5	6.0	8.7	10.0	0.3	2.4	3	9	19.1	18.5
	2	4.4	5.7	7.5	9.4	1.9	2.2	0	11	16.3	16.2
	3	5.8	5.2	7.5	8.8	4.2	1.8	0	12	0.0	14.8
	4	7.9	4.8	14.3	8.4	1.9	1.4	17	12	23.7	14.6
	5	6.7	4.6	10.5	8.3	3.3	1.0	5	9	15.3	15.5
	6	6.8	4.4	11.0	8.2	2.0	0.8	16	9	30.3	20.7
平均(合計)		6.0	5.1	10.1	8.9	2.0	1.6	40	63	104.7	100.3
2月	1	4.7	4.6	7.5	8.5	1.8	1.0	22	7	25.1	19.5
	2	10.7	5.2	15.7	9.3	5.5	1.4	9	9	22.4	21.5
	3	6.8	5.8	10.6	9.9	3.7	1.9	23	12	3.2	21.4
	4	5.3	6.1	8.5	10.1	2.8	2.3	2	15	20.1	19.9
	5	12.1	6.2	19.0	10.1	6.0	2.4	5	16	35.8	19.5
	6	12.8	6.5	15.9	10.5	10.3	2.5	18	9	8.8	12.2
平均(合計)		8.5	5.7	12.6	9.7	4.6	1.9	78	68	115.4	114.0
3月	1	12.2	7.0	15.2	11.2	9.4	2.9	22	16	0.4	21.3
	2	7.7	7.9	9.6	12.2	5.7	3.5	62	19	6.3	21.9
	3	12.4	8.6	17.0	12.9	7.2	4.3	9	22	13.7	21.4
	4	10.8	9.2	15.8	13.6	5.5	5.0	24	22	33.3	20.8
	5	9.8	9.8	13.0	14.1	6.8	5.7	48	22	18.6	19.7
	6	8.9	10.7	13.3	15.1	4.1	6.4	5	26	37.2	24.4
平均(合計)		10.3	8.9	14.0	13.2	6.4	4.6	169	126	109.5	129.5
4月	1	13.1	11.8	17.8	16.3	8.0	7.2	50	22	28.1	23.5
	2	14.1	12.7	19.7	17.3	9.0	8.1	0	21	22.0	25.4
	3	12.4	13.4	15.4	18.0	9.9	8.8	22	20	10.2	26.2
	4	13.2	14.3	17.9	19.0	8.6	9.5	54	19	25.8	26.5
	5	13.4	15.3	17.4	20.1	9.5	10.5	54	19	23.1	26.5
	6	14.0	16.2	20.4	21.0	8.5	11.4	48	21	39.5	26.0
平均(合計)		13.4	14.0	18.1	18.6	8.9	9.3	226	122	148.7	154.1
5月	1	19.3	17.0	25.4	21.8	13.5	12.3	0	25	48.1	24.9
	2	19.7	17.6	24.9	22.5	15.2	13.1	37	30	23.8	23.6
	3	16.3	18.0	21.6	22.9	10.8	13.4	2	32	47.1	22.4
	4	21.0	18.4	25.9	23.3	16.8	13.7	18	27	26.8	22.1
	5	20.6	19.0	25.4	24.1	17.0	14.4	68	22	16.3	22.5
	6	16.8	19.9	20.9	25.0	12.5	15.4	0	27	33.6	26.8
平均(合計)		18.9	18.3	23.9	23.3	14.3	13.7	124	162	195.7	142.3
6月	1	20.8	20.8	27.2	25.8	15.9	16.5	26	25	43.9	20.7
	2	22.8	21.4	28.6	26.1	18.1	17.4	1	30	34.2	17.6
	3	23.7	21.9	28.4	26.2	20.2	18.3	31	40	18.2	15.1
	4	24.8	22.5	28.6	26.3	22.0	19.2	17	57	18.9	13.0
	5	24.2	23.0	28.0	26.6	21.8	20.1	17	74	17.2	10.1
	6	24.5	23.6	27.5	27.0	22.4	20.9	198	83	1.4	8.7
平均(合計)		23.5	22.2	28.0	26.3	20.1	18.7	289	309	133.8	85.2

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
7月	1	26.1	24.3	28.9	27.7	24.1	21.6	43	77	5.6	10.9
	2	26.1	25.1	30.6	28.6	23.0	22.3	35	65	20.9	14.0
	3	25.5	25.8	27.8	29.5	23.6	23.0	473	58	0.5	15.7
	4	28.5	26.4	34.2	30.3	23.8	23.5	3	50	42.7	18.0
	5	29.3	26.9	34.5	31.0	25.4	23.8	0	40	51.0	20.2
	6	28.6	27.2	32.6	31.4	25.5	24.0	13	36	33.1	24.9
平均(合計)		27.4	26.0	31.5	29.8	24.3	23.0	567	326	153.8	103.7
8月	1	30.0	27.2	35.2	31.5	26.5	23.8	8	26	30.0	21.2
	2	29.0	27.1	35.0	31.4	25.1	23.7	12	29	33.4	21.9
	3	28.8	27.0	31.7	31.3	26.9	23.8	35	34	13.4	21.5
	4	29.5	26.8	34.6	30.9	26.2	23.6	20	37	39.1	20.6
	5	30.2	26.4	35.6	30.6	26.3	23.1	0	40	44.4	21.6
	6	29.6	25.9	35.6	30.2	25.5	22.5	55	51	46.5	28.8
平均(合計)		29.5	26.7	34.7	31.0	26.1	23.4	129	217	206.8	135.6
9月	1	29.6	25.1	35.1	29.5	25.7	21.6	7	39	41.5	23.8
	2	26.8	24.2	30.4	28.5	23.5	20.7	43	31	17.1	21.9
	3	25.8	23.3	29.7	27.7	22.6	19.7	33	27	22.4	21.5
	4	25.6	22.5	31.4	26.9	20.6	18.8	4	28	38.2	22.4
	5	24.0	21.6	28.4	25.9	20.4	17.8	80	30	24.0	23.0
	6	20.9	20.5	24.7	24.9	17.4	16.6	45	26	19.8	23.2
平均(合計)		25.5	22.9	29.9	27.2	21.7	19.2	211	181	163.0	135.8
10月	1	21.1	19.6	25.1	24.2	16.8	15.4	13	21	22.1	24.2
	2	20.0	18.9	24.4	23.7	16.3	14.5	7	17	23.9	25.4
	3	20.5	18.1	25.6	23.1	15.6	13.7	3	15	23.6	26.9
	4	18.5	17.0	24.2	22.0	13.3	12.5	0	12	31.7	28.3
	5	20.4	15.8	23.0	20.9	17.9	11.3	40	10	7.0	27.9
	6	15.2	15.0	18.8	20.1	11.8	10.5	4	13	19.5	30.8
平均(合計)		19.1	17.4	23.4	22.3	15.2	13.0	66	87	127.8	163.5
11月	1	12.3	14.4	18.0	19.4	7.7	9.9	19	12	41.1	24.7
	2	13.6	13.7	18.4	18.5	9.2	9.5	0	11	28.1	23.8
	3	13.9	12.8	17.9	17.4	9.0	8.6	9	11	20.5	22.1
	4	10.8	11.6	16.7	16.4	5.9	7.5	0	11	34.0	21.2
	5	12.1	10.7	16.7	15.2	7.6	6.5	12	12	25.4	20.0
	6	8.8	9.6	14.0	14.0	3.5	5.6	4	12	24.6	18.6
平均(合計)		11.9	12.1	17.0	16.8	7.2	7.9	44	68	173.7	130.4
12月	1	10.5	8.7	16.5	13.1	5.0	4.7	43	10	33.9	18.7
	2	7.8	7.9	11.7	12.4	3.8	4.0	14	8	16.2	19.0
	3	9.2	7.3	13.1	11.6	4.7	3.5	34	7	8.8	18.8
	4	6.8	6.9	11.0	11.0	2.6	3.1	13	7	21.4	19.1
	5	7.6	6.6	11.1	10.7	4.7	2.8	12	7	13.6	20.1
	6	4.5	6.3	8.0	10.4	1.7	2.5	50	9	9.0	24.4
平均(合計)		7.5	7.3	11.7	11.5	3.6	3.4	166	47	102.9	120.1
年平均(合計)		16.8	15.5	21.3	19.9	12.9	11.7	2,103	1,774	1,735.8	1,514.5

注) 年平均: 気温と降水量は1979年～2000年(22年)、日照時間は1986～2000年(15年)

(2) 豊前分場（観測地点）

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1月	1	4.5	5.7	9.5	9.9	-0.8	1.5	4	10	24.0	20.1
	2	4.6	5.4	7.9	9.3	1.3	1.4	0	12	19.6	18.4
	3	3.0	4.9	5.5	8.7	0.2	1.1	7	13	6.1	17.7
	4	5.3	4.5	12.9	8.4	-1.0	0.6	6	11	36.1	17.8
	5	6.8	4.3	11.0	8.3	2.6	0.3	3	9	19.2	18.9
	6	6.6	4.3	11.2	8.3	1.7	0.3	22	10	33.1	24.3
平均(合計)		5.1	4.8	9.7	8.8	0.7	0.9	41	66	138.1	115.9
2月	1	4.5	4.5	8.6	8.5	1.1	0.5	20	9	28.3	21.8
	2	8.1	5.0	12.5	9.1	3.5	0.7	16	11	21.1	23.3
	3	6.6	5.4	9.6	9.6	3.7	1.1	27	14	7.0	22.8
	4	4.9	5.6	8.8	9.5	1.6	1.4	2	17	20.2	21.4
	5	8.9	5.7	15.3	9.6	2.4	1.7	1	18	34.9	21.2
	6	12.3	6.0	15.5	10.0	9.7	1.8	21	11	7.3	13.3
平均(合計)		7.5	5.2	11.7	9.2	3.7	1.1	86	81	118.8	123.3
3月	1	11.0	6.5	14.0	10.7	8.4	2.1	32	18	0.9	23.6
	2	7.2	7.3	9.3	11.6	4.9	2.7	71	21	9.1	23.9
	3	10.7	8.0	16.3	12.1	4.8	3.4	8	25	18.2	23.4
	4	10.4	8.5	16.7	12.6	4.1	4.1	8	25	38.3	22.9
	5	9.2	9.1	12.0	13.2	6.0	4.8	63	25	19.7	21.9
	6	8.2	10.0	13.4	14.1	2.9	5.6	7	31	43.2	27.1
平均(合計)		9.5	8.3	13.6	12.5	5.2	3.9	189	144	129.4	141.7
4月	1	12.1	11.0	17.2	15.3	7.5	6.4	35	26	31.3	25.7
	2	12.2	12.0	17.0	16.4	7.6	7.3	0	25	19.5	27.5
	3	12.2	12.8	15.5	17.3	9.8	8.1	26	23	12.8	28.3
	4	11.8	13.7	16.8	18.3	7.2	8.8	49	23	21.1	28.5
	5	12.7	14.6	16.9	19.3	8.7	9.6	65	23	20.9	28.7
	6	13.7	15.4	19.2	20.0	8.6	10.5	61	24	41.0	28.6
平均(合計)		12.4	13.2	17.1	17.8	8.2	8.4	234	146	146.6	170.6
5月	1	16.7	16.3	22.5	20.8	10.5	11.5	0	28	50.1	27.6
	2	18.8	17.1	24.8	21.7	13.5	12.3	36	32	21.2	26.4
	3	15.5	17.6	21.5	22.2	9.8	12.8	2	33	51.1	25.2
	4	19.7	18.0	24.7	22.7	14.8	13.2	21	28	28.5	25.3
	5	18.9	18.6	23.4	23.3	15.6	13.8	125	22	16.8	25.9
	6	16.7	19.4	21.8	23.9	12.2	14.8	0	25	36.8	30.9
平均(合計)		17.7	17.9	23.1	22.4	12.7	13.1	183	167	204.5	160.9
6月	1	20.4	20.3	25.8	24.7	15.0	15.9	0	24	47.6	24.8
	2	21.4	21.0	26.4	25.0	16.9	16.9	2	30	38.6	22.5
	3	21.8	21.6	25.2	25.3	19.0	18.0	47	41	19.0	20.0
	4	23.5	22.1	27.0	25.6	21.3	18.9	27	58	17.4	17.3
	5	23.7	22.7	27.7	25.9	21.1	19.8	44	77	20.3	13.7
	6	23.8	23.3	27.4	26.5	22.1	20.5	202	88	1.7	12.5
平均(合計)		22.4	21.9	26.6	25.5	19.2	18.3	321	321	144.6	108.4

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
7月	1	25.6	24.0	28.4	27.2	23.4	21.1	38	84	8.6	15.6
	2	25.4	24.8	29.0	28.2	22.6	21.8	37	70	19.2	18.9
	3	25.0	25.5	28.2	28.9	23.1	22.5	477	58	1.0	20.0
	4	26.3	26.1	30.4	29.6	22.9	23.0	9	48	39.9	22.3
	5	28.4	26.6	33.2	30.2	24.2	23.4	0	37	55.8	25.5
	6	27.8	26.9	32.0	30.5	24.6	23.6	10	30	34.9	33.1
平均(合計)		26.4	25.7	30.2	29.2	23.4	22.6	569	328	159.4	136.9
8月	1	29.2	26.9	33.2	30.5	26.2	23.5	1	19	28.2	29.0
	2	28.1	26.8	32.2	30.5	24.4	23.4	31	21	42.0	28.9
	3	29.0	26.8	32.8	30.3	26.0	23.5	11	26	19.7	27.3
	4	29.4	26.6	34.0	30.1	25.5	23.4	6	28	49.4	26.1
	5	28.8	26.2	33.2	29.9	25.0	22.9	12	30	42.1	27.1
	6	27.9	25.8	32.1	29.7	24.8	22.3	8	38	43.6	35.3
平均(合計)		28.7	26.5	32.9	30.2	25.3	23.2	68	159	225.0	175.6
9月	1	28.3	25.0	32.6	29.0	24.5	21.4	3	31	46.6	28.5
	2	26.6	24.1	30.6	28.0	23.4	20.4	13	30	21.3	25.8
	3	25.9	23.2	30.6	27.1	22.2	19.5	10	29	27.3	24.4
	4	25.1	22.4	31.3	26.2	19.7	18.7	1	28	41.5	24.5
	5	24.2	21.5	28.8	25.3	20.8	17.9	52	28	28.1	25.0
	6	20.2	20.4	24.5	24.5	16.9	16.6	57	26	20.1	25.4
平均(合計)		25.0	22.7	29.7	26.6	21.2	19.1	135	177	184.9	149.6
10月	1	20.5	19.5	24.6	23.8	16.8	15.3	12	21	23.5	26.6
	2	19.6	18.7	24.1	23.2	15.7	14.3	11	17	27.7	27.9
	3	19.8	18.0	25.5	22.5	14.7	13.4	0	15	25.8	28.8
	4	17.8	16.9	23.6	21.6	12.7	12.2	0	13	29.1	29.8
	5	19.9	15.6	22.0	20.5	17.0	10.8	54	11	4.0	29.6
	6	14.7	14.7	18.6	19.7	11.3	9.8	1	13	15.1	33.2
平均(合計)		18.7	17.1	23.1	21.8	14.7	12.5	77	79	125.2	178.4
11月	1	12.2	14.0	19.3	18.9	6.8	9.3	12	12	43.2	26.4
	2	13.2	13.4	17.7	18.1	8.9	8.8	3	11	28.9	25.3
	3	13.3	12.5	18.1	17.0	8.2	7.9	9	11	18.4	23.2
	4	9.7	11.3	16.1	15.9	4.6	6.7	0	11	34.4	22.1
	5	11.0	10.3	15.9	14.9	6.7	5.8	8	11	22.4	21.1
	6	8.4	9.4	14.4	13.9	1.6	4.9	2	11	26.4	20.3
平均(合計)		11.3	11.9	16.9	16.4	6.1	7.3	33	74	173.7	136.9
12月	1	9.8	8.5	15.7	13.1	4.3	3.9	27	9	35.9	21.1
	2	7.4	7.8	12.4	12.4	2.6	3.2	21	8	18.8	21.7
	3	8.7	7.2	12.8	11.6	4.7	2.7	52	7	13.7	21.2
	4	6.4	6.8	10.8	11.0	2.2	2.3	3	7	25.0	21.3
	5	7.4	6.4	11.0	10.7	4.0	2.0	31	6	24.1	22.3
	6	4.2	6.0	7.5	10.4	0.8	1.7	24	8	16.2	26.6
平均(合計)		7.3	7.0	11.7	11.5	3.1	2.5	158	42	133.7	137.0
年平均(合計)		16.0	15.2	20.5	19.3	12.0	11.1	2,091	1,794	1,883.9	1,741.1

(3) 久留米 (アメダス)

月・半旬		平均気温(°C)		最高気温(°C)		最低気温(°C)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1月	1	3.9	6.0	8.5	10.3	-0.4	2.0	3.5	8.5	21.1	21.5
	2	4.3	5.7	8.1	9.8	1.2	1.8	0.0	9.5	19.5	19.5
	3	3.2	5.2	6.3	9.2	0.4	1.5	7.0	9.6	12.0	18.2
	4	6.5	4.9	13.4	8.9	0.9	1.1	28.5	9.5	35.7	18.1
	5	6.6	4.6	10.7	8.8	2.7	0.8	0.0	8.1	20.4	19.6
	6	6.8	4.5	11.8	8.8	1.6	0.6	30.0	8.0	32.5	27.3
平均(合計)		5.3	5.1	9.9	9.3	1.1	1.3	69.0	54.4	141.2	124.2
2月	1	4.9	4.8	8.6	9.2	1.3	0.8	22.0	7.1	27.5	25.1
	2	10.5	5.4	15.5	9.9	5.9	1.3	15.0	9.7	19.6	26.2
	3	7.2	6.1	11.3	10.6	3.9	1.9	13.0	14.4	6.6	25.3
	4	5.7	6.5	9.7	10.8	2.7	2.5	0.0	17.2	26.3	23.4
	5	12.3	6.6	19.5	10.9	5.6	2.7	11.5	17.2	34.9	23.1
	6	13.5	6.9	17.1	11.4	10.9	2.9	25.5	10.2	10.2	19.1
平均(合計)		8.7	5.9	13.4	10.3	4.6	1.9	87.0	74.6	125.1	135.5
3月	1	12.5	7.4	15.6	12.1	9.6	3.2	39.0	18.0	1.2	24.4
	2	7.9	8.3	10.4	13.1	5.9	3.9	47.0	21.4	9.7	24.1
	3	12.5	9.1	17.2	13.8	8.0	4.8	20.0	23.9	17.5	23.6
	4	10.6	9.8	17.0	14.3	4.6	5.5	8.5	24.0	35.6	23.3
	5	10.2	10.4	13.4	14.9	6.7	6.2	34.5	24.2	21.2	21.9
	6	9.3	11.2	14.7	15.9	4.5	6.9	9.5	29.7	44.2	26.9
平均(合計)		10.5	9.5	14.7	14.0	6.5	5.1	158.5	142.1	129.4	143.0
4月	1	13.9	12.4	19.2	17.3	8.6	7.7	40.5	25.3	31.6	26.4
	2	14.7	13.3	20.5	18.4	9.2	8.6	0.0	26.0	29.0	28.8
	3	13.2	14.0	17.1	19.2	10.0	9.2	23.0	24.8	14.0	29.8
	4	13.5	14.9	18.6	20.2	8.9	9.9	54.0	23.6	27.5	30.5
	5	14.3	15.9	19.3	21.3	10.8	10.8	89.0	24.1	24.4	30.4
	6	14.0	16.8	20.5	22.2	7.5	11.8	46.5	27.2	39.3	30.2
平均(合計)		13.9	14.6	19.2	19.8	9.2	9.6	253.0	150.0	165.0	178.1
5月	1	19.2	17.6	26.2	22.9	12.9	12.8	0.0	32.0	48.2	29.6
	2	19.8	18.3	25.5	23.6	15.2	13.5	27.0	36.1	19.0	28.6
	3	17.3	18.7	23.4	24.1	11.8	13.8	0.5	37.2	52.7	27.3
	4	21.1	19.2	26.1	24.6	16.2	14.2	46.5	32.2	28.7	28.3
	5	20.7	19.9	26.0	25.4	16.5	14.9	137.0	26.3	16.3	29.7
	6	18.1	20.8	23.1	26.3	14.2	15.9	0.0	31.8	40.3	36.2
平均(合計)		19.3	19.1	25.0	24.5	14.4	14.2	211.0	191.5	205.2	179.5
6月	1	21.5	21.7	28.7	26.9	16.3	17.0	2.0	31.7	40.0	29.2
	2	23.2	22.2	29.4	27.1	18.2	17.9	3.0	38.4	33.8	25.7
	3	24.0	22.6	28.9	27.0	20.4	18.8	35.5	49.8	33.3	23.5
	4	24.8	23.0	28.9	27.1	22.1	19.7	24.0	66.0	15.0	21.5
	5	24.4	23.6	28.5	27.2	21.8	20.6	30.5	83.4	15.8	18.1
	6	24.3	24.1	26.6	27.6	22.5	21.4	214.5	94.9	0.3	17.6
平均(合計)		23.7	22.9	28.5	27.2	20.2	19.3	309.5	376.8	122.6	132.8

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
7月	1	26.1	24.8	28.8	28.3	24.3	22.0	23.0	88.7	4.6	21.7
	2	26.5	25.7	31.3	29.4	23.5	22.7	39.5	73.4	23.2	26.2
	3	25.6	26.4	27.8	30.3	24.0	23.4	309.0	63.1	2.1	27.4
	4	28.6	27.0	34.7	31.1	23.8	23.8	2.0	50.9	42.0	29.7
	5	29.9	27.5	35.9	31.8	25.0	24.2	2.0	36.4	50.5	32.4
	6	28.5	27.8	33.0	32.2	25.4	24.4	18.5	32.5	33.9	39.9
平均(合計)		27.6	26.6	31.9	30.6	24.4	23.5	394.0	340.1	156.3	179.3
8月	1	30.1	27.8	35.7	32.3	27.0	24.3	0.0	25.0	28.7	33.2
	2	29.2	27.7	35.7	32.2	25.4	24.2	40.0	29.1	35.6	33.0
	3	28.6	27.6	31.9	32.0	26.7	24.2	48.0	34.0	23.7	31.2
	4	30.0	27.3	35.8	31.6	26.1	24.1	40.5	38.1	50.3	35.8
	5	30.0	27.0	36.1	31.3	26.1	23.7	7.0	41.3	41.8	30.8
	6	29.6	26.6	35.8	30.9	25.5	23.0	4.0	51.9	49.7	38.9
平均(合計)		29.6	27.3	35.1	31.7	26.1	23.9	138.0	218.4	220.6	197.5
9月	1	29.8	25.8	35.7	30.1	25.5	22.2	0.5	40.6	42.9	31.3
	2	27.3	24.9	31.3	29.1	23.9	21.3	17.5	34.2	19.5	28.8
	3	26.1	24.0	30.6	28.3	12.9	20.5	15.0	27.6	27.3	28.1
	4	26.1	23.2	32.0	27.5	21.1	19.7	11.5	24.3	45.2	28.0
	5	24.0	22.2	28.3	26.4	20.6	18.7	61.5	23.6	29.8	27.2
	6	21.2	21.1	25.0	25.5	18.4	17.6	29.5	21.1	20.1	27.6
平均(合計)		25.7	23.5	30.5	27.8	22.1	20.1	135.5	173.4	184.8	166.0
10月	1	21.3	20.2	25.9	24.8	17.7	16.4	23.5	18.7	22.9	28.4
	2	20.2	19.5	25.0	24.1	16.3	15.5	5.5	17.6	30.1	29.1
	3	20.8	18.7	25.9	23.5	16.2	14.7	0.0	15.5	24.2	30.2
	4	19.2	17.6	24.7	22.5	14.3	13.4	0.0	12.6	31.9	31.4
	5	20.8	16.4	23.5	21.3	18.7	12.1	44.5	10.3	7.0	30.9
	6	15.4	15.4	19.5	20.5	12.5	11.0	1.0	12.6	25.0	34.1
平均(合計)		19.5	17.9	23.9	22.7	15.8	13.8	74.5	79.7	142.2	185.9
11月	1	12.6	14.8	19.0	19.8	7.4	10.4	2.5	11.2	42.7	27.2
	2	13.8	14.1	19.1	18.9	9.3	9.8	2.0	10.5	29.5	26.1
	3	14.4	13.0	18.7	17.8	10.3	8.8	6.0	10.1	24.5	24.4
	4	11.0	11.9	17.3	16.6	5.8	7.7	0.0	11.5	40.0	23.5
	5	12.4	10.9	16.8	15.5	8.7	6.7	15.5	13.6	26.5	23.3
	6	8.6	9.9	14.1	14.4	3.0	5.7	4.0	13.4	28.0	22.1
平均(合計)		12.1	12.4	17.5	17.2	7.4	8.2	30.0	77.2	191.2	146.4
12月	1	10.5	8.8	16.1	13.5	5.3	4.6	28.0	10.7	34.9	21.8
	2	7.5	8.0	11.9	12.7	3.5	3.7	4.0	8.5	22.7	22.4
	3	9.3	7.3	13.3	11.9	5.3	3.2	50.0	7.2	11.7	22.5
	4	7.8	6.9	12.8	11.3	3.3	2.8	5.5	6.4	27.8	23.0
	5	9.7	6.5	14.0	11.0	6.7	2.5	18.0	5.7	21.0	23.9
	6	3.1	6.2	6.0	10.7	0.7	2.2	30.5	7.4	11.3	28.4
平均(合計)		7.5	7.2	11.8	11.8	3.8	3.0	133.0	41.2	121.5	142.8
年平均(合計)		17.0	16.0	21.8	20.6	13.0	12.0	1,993.0	1,919.3	1,905.1	1,913.7

(4) 八女分場 (アメダス黒木)

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1月	1	2.4	4.5	8.2	10.2	-2.9	-0.2	6.0	8.1	20.7	20.1
	2	2.7	4.3	7.1	9.8	-1.0	-0.3	0.0	9.2	19.4	18.9
	3	1.7	4.1	5.3	9.4	-1.5	-0.4	4.0	10.6	8.1	17.6
	4	5.6	3.9	13.4	9.1	-0.9	-0.6	20.0	12.0	36.1	17.0
	5	4.8	3.6	9.8	8.9	-0.1	-1.0	1.5	11.3	17.6	17.7
	6	5.6	3.5	11.4	9.0	-0.5	-1.2	22.0	11.4	32.2	23.7
平均(合計)		3.8	4.0	9.2	9.4	-1.1	-0.6	53.5	62.6	134.1	115.0
2月	1	2.9	3.9	7.9	9.6	-0.7	-1.0	22.0	9.1	26.2	21.9
	2	9.7	4.6	15.3	10.5	4.0	-0.5	18.0	10.7	17.5	23.5
	3	6.4	5.3	11.9	11.2	2.4	0.0	17.0	14.6	4.9	23.6
	4	4.0	5.7	8.8	11.5	0.2	0.4	0.0	17.3	22.6	23.3
	5	10.9	6.1	19.0	11.8	3.7	0.9	3.0	18.2	34.6	23.0
	6	12.7	6.4	17.4	12.3	9.4	1.3	35.0	14.9	11.1	18.1
平均(合計)		7.7	5.3	13.4	11.1	3.2	0.2	95.0	84.8	116.9	133.4
3月	1	11.6	6.7	15.2	12.6	8.1	1.4	43.5	19.2	0.8	22.9
	2	6.9	7.4	9.2	13.4	4.8	1.8	48.5	20.6	8.4	23.7
	3	11.5	8.3	16.1	14.4	6.7	2.7	27.0	23.4	13.0	24.5
	4	9.1	9.2	16.0	15.3	2.1	3.6	19.5	25.2	33.4	24.8
	5	9.0	9.8	13.1	15.8	5.0	4.2	38.0	25.0	20.1	24.1
	6	7.6	10.5	14.4	16.6	1.4	4.8	6.0	28.4	41.6	29.6
平均(合計)		9.3	8.7	14.0	14.8	4.7	3.1	182.5	141.8	117.3	149.6
4月	1	12.4	11.6	18.7	18.0	6.1	5.6	42.5	23.5	27.4	27.2
	2	13.7	12.6	20.8	19.1	6.8	6.7	0.0	22.9	25.8	28.4
	3	11.9	13.5	16.6	20.0	7.8	7.5	21.5	22.1	11.6	28.9
	4	12.4	14.2	18.2	20.8	6.6	8.2	43.5	24.3	24.5	29.4
	5	13.3	15.1	18.9	21.8	8.0	9.0	93.5	27.6	24.0	29.9
	6	12.7	16.1	19.6	22.7	5.5	10.0	49.5	31.4	35.9	30.0
平均(合計)		12.7	13.9	18.8	20.4	6.8	7.8	250.5	151.8	149.2	173.8
5月	1	17.7	17.0	25.3	23.6	10.3	11.1	0.0	35.2	45.4	29.6
	2	18.5	17.7	24.4	24.3	12.5	11.8	25.0	37.1	16.0	29.0
	3	15.8	18.1	23.2	24.7	8.6	12.1	1.0	38.0	50.1	28.9
	4	19.7	18.4	25.4	25.1	13.6	12.4	46.5	34.4	28.4	29.0
	5	19.7	19.0	25.0	25.8	14.9	13.1	159.5	28.1	15.3	29.4
	6	16.6	19.8	23.7	26.6	11.1	14.0	0.0	31.7	36.4	36.0
平均(合計)		18.0	18.4	24.5	25.1	11.8	12.5	232.0	204.5	191.6	181.9
6月	1	19.3	20.7	27.3	27.3	13.3	15.0	22.5	29.3	32.5	29.3
	2	21.3	21.3	28.0	27.6	15.5	16.0	3.0	35.8	34.0	26.9
	3	22.5	21.8	28.0	27.6	18.2	17.0	69.0	49.6	15.9	23.9
	4	23.7	22.4	27.6	27.7	20.7	18.2	32.0	70.6	13.0	20.6
	5	23.2	23.0	27.2	27.7	20.8	19.3	31.5	93.7	13.6	16.7
	6	24.0	23.6	26.3	28.1	21.7	20.2	237.0	106.0	0.1	15.1
平均(合計)		22.3	22.2	27.4	27.6	18.4	17.6	395.0	385.0	109.1	132.5

月・半旬		平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(h)	
		本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
7月	1	25.3	24.3	27.5	28.8	23.5	20.9	54.0	108.8	4.1	17.4
	2	24.9	25.1	29.8	29.8	21.0	21.6	11.5	82.7	22.2	20.9
	3	25.0	25.7	26.9	30.6	23.5	22.1	295.0	70.0	0.2	23.5
	4	26.3	26.2	33.4	31.4	21.1	22.4	23.0	57.8	39.4	27.1
	5	27.9	26.6	34.1	32.1	23.0	22.5	0.0	43.1	48.9	31.5
	6	27.1	26.9	32.1	32.7	23.8	22.6	17.0	36.8	25.9	40.4
平均(合計)		26.1	25.8	30.6	30.9	22.7	22.0	400.5	399.2	140.7	160.8
8月	1	28.3	26.9	33.9	33.0	24.6	22.5	16.0	27.2	25.8	33.8
	2	27.5	26.8	34.7	33.0	22.4	22.4	0.0	30.6	31.1	32.5
	3	27.7	26.7	30.9	32.7	25.7	22.5	40.0	34.8	15.0	30.6
	4	27.9	26.4	34.4	32.3	23.4	22.2	8.5	35.8	36.8	29.5
	5	28.1	26.1	35.0	31.9	23.5	21.8	1.5	34.4	44.1	30.1
	6	27.7	25.6	34.4	31.5	23.1	21.3	66.5	42.8	42.5	36.7
平均(合計)		27.9	26.4	33.9	32.4	23.8	22.1	132.5	205.6	195.3	193.2
9月	1	27.7	25.0	34.6	31.0	22.6	20.6	12.0	38.6	40.1	30.1
	2	25.7	24.3	30.3	30.2	22.3	19.9	17.0	35.7	17.6	28.7
	3	24.5	23.5	29.7	29.4	20.8	19.0	26.0	28.3	22.7	28.0
	4	24.4	22.6	31.0	28.6	19.0	18.1	3.0	23.8	44.1	28.2
	5	22.3	21.7	27.5	27.6	18.1	17.0	39.5	23.8	28.7	28.4
	6	19.8	20.6	24.3	26.7	16.2	15.9	26.5	23.0	19.8	28.0
平均(合計)		24.1	22.9	29.6	28.9	19.8	18.4	124.0	173.2	173.0	171.4
10月	1	19.5	19.6	24.8	25.8	15.1	14.7	20.5	20.3	21.6	27.5
	2	18.4	18.7	24.4	25.1	13.9	13.6	4.5	17.2	29.0	28.0
	3	18.7	17.9	24.9	24.4	13.5	12.6	0.0	14.2	22.2	30.0
	4	18.0	16.8	24.5	23.5	12.1	11.4	0.0	12.1	33.0	30.9
	5	19.8	15.6	22.5	22.3	17.4	10.2	56.0	11.2	4.5	29.5
	6	14.1	14.6	17.9	21.2	11.3	9.3	0.0	15.2	24.0	32.5
平均(合計)		18.1	17.1	23.2	23.6	13.9	11.9	81.0	90.2	134.3	178.4
11月	1	10.6	13.8	17.9	20.3	5.2	8.6	3.5	14.2	41.8	26.3
	2	12.2	13.1	17.9	19.4	7.6	8.1	4.0	13.2	27.0	25.4
	3	12.6	12.0	18.1	18.2	6.9	7.0	20.0	11.4	22.7	24.2
	4	9.0	10.7	16.6	16.9	3.5	5.6	0.0	11.0	39.8	24.0
	5	10.9	9.7	16.0	16.0	6.4	4.6	14.5	11.8	26.3	23.9
	6	7.0	8.9	13.2	15.1	1.0	3.8	3.0	12.5	27.0	22.9
平均(合計)		10.4	11.4	16.6	17.6	5.1	6.3	45.0	74.1	184.6	146.7
12月	1	9.2	7.9	16.5	14.0	2.9	2.9	24.0	12.2	35.8	21.8
	2	5.7	7.1	10.7	13.0	1.3	2.2	5.5	11.0	22.4	21.0
	3	8.4	6.3	12.8	12.1	3.2	1.6	35.0	9.3	10.8	20.3
	4	5.6	5.7	10.8	11.4	0.9	1.1	7.0	7.9	22.7	20.2
	5	5.7	5.4	10.2	11.1	1.6	0.7	11.0	7.0	15.9	20.7
	6	2.3	4.9	6.1	10.7	-0.5	0.2	27.5	8.3	12.5	25.1
平均(合計)		6.1	6.2	11.2	12.0	1.6	1.4	110.0	55.7	120.1	129.1
年平均(合計)		15.5	15.2	21.0	20.7	10.9	10.5	2,102	2,018	1,766.2	1,709.6

福岡県農業総合試験場年報

平成23年9月発行

発行 福岡県農業総合試験場

〒818-8549

福岡県筑紫野市大字吉木587

TEL 092-924-2936

ホームページアドレス <http://farc.pref.fukuoka.jp>

印刷 社会福祉法人 福岡コロニー

分類記号 PA	所属コード 4703700
登録年度 23	登録番号 0001